鄆城縣の月夜に劉唐を走しむ

翌日又諸〻の頭領聚義廳に集會せしに、晁蓋乃ち吳用に對して云けるは、我輩七人の性命は都て宋押司、朱都頭兩人に救はれぬ。古人の云、恩を知て恩を報せざるは獸類禽鳥にだも如ずと、今日の富貴安樂何れより來れるや、皆是宋押司、朱都頭兩人の賜なり。近日の內に金銀を以て禮物とし、則人を鄆城縣に馳て一禮を述べし。是第一專要のことなり。又彼白勝今已に濟州の牢中にあり。我輩必ず濟州に馳て渠をも救ひ出すべし。吳用が云、兄長必ず是を憂ひ給ふ事なかれ。宋押司の大恩を謝せんずるには、某已に所存あり。近日一人の頭領を遣すべし。又彼白日鼠を救んは一人聰明の人を濟州に遣し、上下の役人に賄賂をなさしめ、其便機を待て遂に彼を救ひ出すべき間、先宜しく商議して粮を貯へ船を造り軍器を製へ、寨柵を設け盔甲を整へ、弓箭を調へ山陣を嚴密に備て官軍を支ん計をなすべし。晁蓋が云、既にかくのごとくは、全く軍師の良計に從んに速にこれを調へ給はんや。吳用此時諸の頭領に命じて山陣の備等一々是を辨せしむ。扨濟州府の府尹は、黃安が手下の士卒に命を脫れて逃かへりたる者を呼で、乃ち梁山泊の動靜を具しく盤問ければ、彼士卒答て云、官軍盡く殺され、黃安已に活捕れぬ。梁山泊の豪傑等十分の猛勇にして、近づき敵することを能はず。且水路窄くして船の進退自由ならざりしゆゑ、いよ〳〵戰ひ打負て賊を捕ふること叶はず。府尹これを聞て大に驚き、則蔡太師の使者に對して云けるは、我此度太師の爲に賊を捕へんと欲し、初何濤を捕盜の觀察として馳しめけるに、許多の人馬を失ひ、何濤一人命を脫れかへりしかども、二ツの耳を割落され、其疵今に痊ず。私宅に在て將息す。所以に此度又團練使黃安ならびに當府の捕盜官に兵を與へて、梁山泊に遣しける所に、是又强賊らに打破られ、黃安は終に擒となりて今梁山泊の獄中に繫るとなり。尙且官軍を殺されたること其數を知ず。又戰馬許多を賊に得らる。再び誰を將としいかなる計を以て賊を捕へ得んやとて、大に憂ひくるしみけり。頃日又濟州府の府尹新たに替るよし、專ら取沙汰有しが、此日果して新官當府に至りしかば、一人の承局官忙しく來て、府尹に告て云けるは、今城の東門接官亭上に少停新官の到來なりとて、飛報此に至れり。府尹これを聞て、早速馬に乘直ちに東門の外に出て相迎ふ。新官已に接官亭の前に至て馬より下りしかば、府尹急に是を延て亭上に登り、一禮畢つて座已に定りければ、彼新官則朝廷より携へたる尹替の文書を取出して、府尹に與へて語りけるは、此度梁山泊の强盜等、頗る猖獗といへども、これを平がたきと云こと預じめ京に聞え、卽ち某に命じ給ひて速に府尹に替り、宜く濟州府を守つて急に賊を捕ふべきよし詔命なり。尤も俄の勅諚なりしかば、先達て當府に飛報到來するにも及び候はじ。府尹是を聞て心中快からず、乃ち彼文書を披てこれを讀了り、卽時に新官を導て濟州府に歸り、酒宴を設て新府尹を欵待し、酒已に數盃巡りければ、舊府尹先新府尹に告て云けるは、今般誕辰の禮物を奪ひ取たる兇賊晁蓋等七人の輩、今已に梁山泊に上て太だ猛威を奮ふ。某彼等を平ること能はざるよし、已に都に聞えたるとなれば、蔡太

師嘸憤り給ふらめ、然れども梁山泊の英雄等智勇足備つて、要害の險地に據けるゆゑ、直正等閑のことにあらず。已に兩度まで許多の官軍を殺されぬとて、彼何濤黃安等が次第一々微細に語りければ、新府尹これを聞て大に愕然ていはく、十分のことはよも有まじきとこそ思ひつるに、反つてかくのごとく猛勇を振ひ申すやとて、忽ち面色土のごとくに成て、心中に思ひけるは、蔡太師這般のことを聞知られたるゆゑ、故意我を擡舉て此處につかはし給ふらん。此處には强兵猛將極て少なれば、賊を捕へんことは偖置、賊却て此處に刼來り兵粮を借んと云はゞ、我何を以てかこれに當んやとて、只願躊躇して憂ひ愁ふ。舊府尹は翌日旅粧を准備て遂に新府尹に別て東京に歸りけり。扨新府尹は東京に在りし時は、只七人の棗商客のみならば縱ひ梁山泊に上りたるとも、何の捉へがたきことかあらんとて、已に看破して此に到りしが、昨日舊府尹に梁山泊猛勇の形勢を告知らされて大に驚き怕れ、乃ち諸の軍官等と商議して、專ら軍を招き馬を買草を集め、粮を屯し梁山泊の豪傑等を防ぎ捉ふべき備を催し、卽日文書を以て近州鄰郡に觸を廻し、各宜しく力を併せ賊を捕ふべしとぞ命じけり。此時、鄆城縣の知縣は文書を見觸を聞て早速宋江と商議して云けるは、此度の賊情最大なり。汝宜く文書を以て支配の村里にて一々嚴に梁山泊の盜賊を防がしめよ。必ず怠る事なかれとて、遂に文書を修へて宋江に與ふ。宋江文書を得て心中に想ひけるは、晁蓋等七人の輩いかんぞかくの如き大罪を犯しけるや。況や官軍を殺し何濤を傷ひ、今又黃安を活捉山陣に留置こと是乃ち九族を滅す罪に當れり。

尤も止むことを得ずしてこそ、斯は行しならん。されども法度の上に於てこれを饒しがたし。萬一官軍等に捉はるゝことあらば、必定大法に行はれん。我何ぞよくこれを忍びんやとて、一向憂愁に逼りぬ。然れ共宋江知縣の命重きに仍て自ら止ことを得ず、遂に貼書後司張文遠に仰せて、彼文書を諸の村里に下して嚴に觸を廻しけり。已にして宋江は縣裡を出て三五十步計り行ぬる所に、背後に人あつて押司々々と呼りければ、宋江これを聞いて誰なるにやと頭を回してこれをみるに、乃ち是媒をなして過活とする王婆なり。この王婆一人の老婆を引て後へに來る。宋江則問ていはく、汝王婆我を呼て何のことありや。王婆忙しく答へて彼老婆を指して云、押司に告申たきことあり。此老婆は本是一家三人東京より此所に來りし人なりけるが、一人の女あり。其名を閻婆惜と申、其父閻公原來能歌を唱はれしゆゑ、彼女幼き時よりこれを學び、吹彈歌舞等の事都て詳かに曉し。年まさに十八歲にして、頗る顏色好し。向に親子三人山東に往て女を官人の家に事へしめんとしけれ共、本山東の地に知人なき故にや、これを聘視者一人もなく、遂に落魄して此鄆城縣に徘徊しける處に、彼閻公不幸にして昨日病死いたしぬ。此閻婆又是を葬るべき力なくして、已に急苦に逼り、乃ち我を賴んで女を奉公に出さんとなしけれ共此節急に安貼がたし。願くは押司一片の仁心を垂給ひて彼に一ッの棺椁を惠給はんや。宋江が云、已に斯あらば汝ら兩人我に從て來れ。街梢の酒店に至て書簡を修へ乃ち汝に與へて縣裡の陳三郎が家に遣はし、一ッの棺椁を賒らしめん、只しらず屍骸を葬る使用銀有や。閻

婆答て、我流落て旅宿にあることなれば、棺椁を求る銀だにもあらず、焉ぞ能使用の備あらんや。宋江が云、若使用の銀なくんば縱ひ棺椁有とも葬ること能ふまじ。我又汝に十兩の銀を惠むべし。汝宜しく此銀を以て使用とせよ。閻婆これを聞て大に悅で云、押司若しかくのごとく憐を垂給はゞ、則此恩天地と等うして齒を沒るまで忘れ申まじ。宋江遂に一錠の銀を取出して閻婆に與へていはく、汝此書を携へて陳三郎が家に往なば、必ず棺椁を得ることあらんとて、遂に別れて歸りけり。這閻婆書簡を得て甚だ悅び、直に陳三郎か家に至りて棺椁を賒、則旅宿に持せ回て死人を葬りける。一日閻婆宋江が家に至て嚮に惠を受し恩義を謝し、家内をみるに一人の女もなかりしかば、閻婆心中に怪しく思ひ　回て王婆に問て云、宋押司の家には一人の女も見えざりけるが、未だ夫人を娶り給はざるや。王婆がいはく、宋押司の本宅は宋家村にあれども、未だ夫人有ことをしらず。今押司と成て此處に住し給ふは、乃是旅宿なり。此宋押司は稟性仁心深く專ら人に棺椁を施し、人の貧苦を救ひ給ふゆゑ、我向に汝の艱難を彼押司に告たり。定て未だ夫人は娶り給ふまじ。閻婆が云、我女婆惜は頗ぶる顏色あり、殊に吹彈歌舞の事一々是を曉せり。我古鄕に在りし時は幾ばくの富貴人彼を養子にせんとて、再三我ら夫婦に求めしかども、唯壹人の女なるゆゑ、其需に應せざりし。然れども今日想ず此處に流落て宋押司の洪恩を蒙りたれば、若宋押司我女を求めんと欲し給はゞ、我早速女を宋押司に事しめて聊大恩を報ずべし。王婆我爲に此事を宋押司に告給はんや。王婆是を聞て然りと同じ、翌日宋押司に見て閻老婆が言を告、再三宜しく言を巧にして宋江を擯援ければ、宋江肇は承允せざりしかども、王婆に言を竭され遂に其議に應じて、閻婆惜を娶りて妾とし、乃ち縣裡に小宅を借て閻婆親子を住しめ、多く金銀米錢を送て豐かに過させけり。已にして半月餘り經たりしかば、彼婆惜忽ち格別に粧うて、頭には玉の簪を帶し身には錦の衣を着し、殊に風流にぞ見えにけり。初の間は宋江常に來り、閻婆惜と一所に在て娛をなしけるが、日を遂て漸々疎んじぬ。此ゆゑはいかんとなれば、宋江は原是有名の豪傑にして色道には十分荒ざるゆゑ、閻婆惜が心に合はず。此より兩人互に睦しからず。一日宋江後司貼書張文遠を引て、閻婆惜が家に至て飲酌を催しける。彼張文遠は、皆人これを小張三と呼慣せり。此張三生れ得て眉清く目秀齒白く唇紅にして、其形きはめて風流なり。況や彼少年の時より專ら花街に遊び娼門靑樓に戲れ、妓女婊子の風情ならびに吹彈歌舞盡くこれをさとりぬ。かの閻婆惜も元來曲をよく唱ひ舞奏ることを以て、諸方に徘徊したる娼子の流なれば、今一と目張三を見て忽ち心を動しけるに、張三も又婆惜を見て已に十分の意あり。只顧眼を以て情を送る。此時宋江淨手に立ければ、張三則ち言を以て婆惜を戲れり。諺にも、風來らざれば樹動かず、舟搖ざれば水渾ずと云。はたして此のことの如く張三來て婆惜が心を動せり。此より兩人互に十分の情ありしかば、彼張三其後は時々來て、故意宋江を訪ふ。此時宋江は又かつて婆惜がいへに行ざりしゆゑ、婆惜は私に是を獻び、張三が來るごとにこれを留て談話をなし、つひに兩人不義の情をつうじけり。かの張三

は原來色道の達人なりしかば、かの婆惜百念を忘れて悅びをのぶること尤限なし。諺にも、一たび將す二たび帶せずといふことありけるに、宋江は想はず張三を將て婆惜がいへに至て酒を酌しゆゑ、遂にかくの如き反ごとを惹いだしぬ。彼婆惜張三と情をつうじてより後は、朝夕に張三がことのみ心にかけ、宋江がことは毛頭も想はざりければ、宋江若し一月の內たま〳〵一日も來ることあれば、彼婆惜多く道理なきことを以て宋江に違く。宋江は原女のことなどを心に掛すといへども、此よりは彌疎んじて婆惜が家に至ること尤も稀なり。那張三這婆惜と情を交ること恰も漆と膠のごとくにして、曉暮一處に在て擅に戲れしかば、左右のりんか悉く皆しらざるは一人もなかりし。此沙汰頗る宋江が耳に入しかども、宋江猶半は信じ半は疑うて、心中に思ひけるは、婆惜はもと父母の匹配給ふ妻室にあらざれば、彼もし我を嫌はゞ我又渠を慕ふまじ。徒に恚を起して何の益かあらん。向後彼が家に往ずんば、彌て是心淸からんとて、約莫一月餘り往ざりければ、閻老婆は私に宋江が來らざることを愁ひ、每度使を馳て邀へしかども、宋江は只公事繁きよしにて往ざりけり。又一日宋江暮に乘じて縣裡を出來り、乃ち茶坊に坐して茶を用ひ居ける處に、一人の大漢子頭には白毡の笠を戴き身には黃羅の衣を着し、腰には一挺の刀を帶し、脊量に一ッの大包袱を背、一身に汗を流して忙しく走行。宋江これを見て、何者なれば昏に及んでかく急に馳行や、いかさま怪しき粧束かなと思ひ、茶坊を立て彼漢子が後を赶て慕ひ行。約莫四五十步計に至て、彼漢子頭を回らして宋江を一と目看けるが、只顧立住て躊躇す。宋江も又彼漢子を見て何とやらん其面を識認たる樣にて、頻に心中に思ひけるは、彼漢子が面色慥に識認たる者なるが、何れの所にて參會しけるにやと、再三考ながら、同じく躊躇す。彼漢子も尙又頭を回らして宋江を打望み、恰も事ありげに見えけれ共、又安に詞をも掛ることなし。宋江此光景を見て彌怪しみしかども、是又安りに問ふこともなさゞりけり。彼漢子傍の篦頭鋪に立倚て問けるは、彼後より來り給ふ官人は、誰なるぞや。待招答て云、彼官人は及時兩宋押司也。彼漢子是を聞て急に宋江が前に來て慇懃に腰を回て云けるは、押司は某を識認給ふや。宋江が云、足下は隱々に識認たるやうにはあれども、未だ其參會したる所を知らず。彼漢子が云、願くは押司某が爲に一步を移し給はゞ、告申たきことあり。宋江が云、已にかゝらば我豈辭し申さんやとて、彼漢子とともに一軒の酒店に至て樓の上に登り、未だ坐も定らざるに、彼漢子忽ち身を翻へして拜をなす。宋江忙しく禮を還して云、足下は本誰人やらん。先其姓名を報給へ。那漢子が云、大恩人は何故某を見忘れ給ふや。宋江が云、我も幽々に識認たるやうに記しかども、實に足下のことを忘れり。願くは早く告しらせ給へ。彼漢子が云、某は是向に晁蓋が館にて、押司の尊顏を拜し、乃ち押司の救を蒙り一命を脫れたる赤髮鬼劉唐なり。宋江是を聞て大に驚て云、足下いかんぞかく大たんなるや。若下官等に見尤められ給はゞ、忽ち大事を惹出し給はんに、何故此處に來り給ひしぞ。劉唐が云、不佞已に再生の恩を蒙りしゆゑ、一死を怕す特々來て押司を訪ひ奉る。宋江が云、晁保正は這一向恙なきや。

足下今此處に至り給ふは、定めて晁保正に賴れ給ひつらん。劉唐が云、晁保正那日押司の大恩を蒙りての後、直ちに梁山泊に登つて山陣の主となられぬ。吳學究は軍師となり、公孫勝も又吳學究と共に同く山陣の兵權を執。林冲深く某ら七人を憐んで彼王倫を殺し、再三山陣を以て晁保正に讓りぬ。山陣に又原來杜遷、宋萬、朱貴と申て三人の頭領あり。今總て十一人の頭領山を守る。小賊都合七八百人を集めけれども、猶兵粮を蓄しことは其數を計らず。晁蓋は申すに及ず吳用以下の頭領某に至るまで、常に只顧押司の大恩をかんじて忘るゝ違なし。此ゆゑに某晁保正の命を受て、書簡幷に黃金一百兩を携來て押司及び朱同、雷橫、兩都頭を謝し奉るとて、先づ書簡を宋江に呈す。宋江已に書簡を披て看畢りしかば、乃ち腰に掛たる招文袋を開て書簡を入、劉唐又黃金を取出して宋江に送る。宋江が云、足下先此金を包給へとて再び是を包しめ、つひに酒屋のこものを呼て酒を出しぬ。頓て劉唐にすゝめて飲酌を催ける。此時日も漸々西山に落過て晚たりければ、劉唐又金を取出して宋江に送らんとせし處に、宋江忙しく攔住て云、足下宜しく我言を聞給へ。晁保正今初て山陣に上られしとあれば、定て金銀の使用大にして、何程蓄給ふとも不足すべし。某は原來家內に頗る錢財の蓄有て缺用なし。先此金は山陣へ拿回り給へ。異日もし我要用の時あらば舍弟宋淸を山陣に遣して借用申べし。扨彼朱同も頗る家財有者なれば、必ず金子を送らるゝに及ぶまじ。晁保正の厚意我密に彼に宜く傳へ申さん。又彼雷橫は某ら晁保正を逃したることを知らざれば、是越發金子を送るに及ぶまじ。況や彼は博奕を好む者なれば、若金を得ば必定賭場に拿出べし。然らば萬一事を惹出すこともあらん。決して此金を送るべからず。我また足下を私宅に留て歡待申たく思へども、若人有て足下を識認ときは、大事忽出來らん。今宵は月色も定て明かならん。よろしく月光に乘じ回らるべし。諸の頭領にも委しく一禮を傳へ給はるべし。必ず一刻も早く道を急ぎ給ふべし。劉唐是を聞て云けるは、押司の厚恩甚だ重き故、晁頭領再三不佞に命じて薄儀を贈り申さる。若是を請給はず拿回らしめ給ふならば、某必定其責を蒙るべし。願くは押司これを受給へ。宋江が云、晁保正の命令既にかく嚴ならば、我宜しく返簡を修へて送らん。足下これを持回り給へ。しからば少しも足下の過たること あらじ。劉唐此時尙苦々に宋江を强て收めしめんとしけれ共、決して受ずして、早速酒肆の主に墨筆を假具しく返簡を修へて劉唐に與ふ。劉唐は原來直性の勇夫なれば、宋江斯辭するを看て畢竟宋江に强がたきことを料知り、遂に返簡を得て其金を再び包袱になし、乃ち別を告て宋江に辭して云けるは、天色も已に晚候へば、某終夜に馳て山陣に回り申べし。宋江が云、是尤も然り早々急ぎ給へ。我敢て足下を留め申さゞること明らかにこれを察し給へ。劉唐が云、宋押司の厚意、某いかんぞ察せざるべき。山陣に歸りなば晁頭領らに詳に語り聞せ候はんとて、乃ち又宋江を拜して兩人遂に酒店の樓を下り、直に街の口に至りしかば、月色已に上りぬ。此時八月中旬にて秋光一入明かなり。宋江又劉唐が手を携ていはく、足下自ら路次の間を小心給へ。重ねて此邊に來り給ふこと必ず以て無

用なり。此處は常に下官多く徘徊する所なれば、別して用心すべきことなり。我故意遠く送るまじき間、則ち此邊にて別るべし。劉唐これを聞て云けるは、押司宜しく此所より回り給へ。某も急に連夜て馳行き申さんとて、遂に別れ梁山泊へと回りけり。扨宋江は已に劉唐に別れて、乃ち心中に想ひけるは、早くも是下官等が看着る者ならば、忽ち大事を惹出すべきに、天幸ひを垂れ給ひて危き地位を脱れしこそ悦びなりとて、又晁蓋等が事を暗に思ひけるは、彼十一人の豪傑いかんぞ斯のごとく大いに威勢をふるふや。誠に梁山泊は要害双なき名地と聞きつるに、果して其言虚からぬよと、感歎しつつ往ける處に、忽然として背後にて呼はる聲あつて云けるは、押司は奚方に往き給ひぬるや。何故我家には至り給はぬぞ。宋江これを聞、急に頭を回してこれを看るに、是則ち閻婆なり。是宋江不慮の難義を惹出す始末、次の卷に具なり。

閻婆を又虔婆とも出たり。水滸傳舶來の本には、毎回詩章多し。兒女の耳には遠きゆゑ、譯本には省けり。然れ共呼保義、宋江は、後に梁山泊に入て第一甕の豪傑たれば、此卷第二十一回の首に出たる古風一首をこゝに載す。

宋朝運祚將傾覆　四海英雄起寥廓　流光垂象在山東
天罡上應三十六　瑞氣盤旋繞鄆城　此鄉生降宋公明
神清貌古眞奇異　一舉能令天下驚　幼年涉獵諸經史
長爲吏役決刑名　仁義禮智信皆備　曾受九天玄女經
江湖結納諸豪傑　扶危濟困恩威行　他年自到梁山泊
綉旗影搖雲水濱　替天行道呼保義　上應玉府天魁星

二編卷之九

虔婆醉て唐牛兒を打虔又閻に書す

閻婆宋江を途中に見て呼び掛けるゆゑ、宋江立ち住りし時、閻婆が云く、押司は何ゆゑ久しく我屋には至り給はぬや。女婆惜もし押司の心に背くことあらば、宜しく教訓を垂給へ。我今押司に遇ぬるこそ幸ひなれ。巴不得我が家に導き申べし。宋江が云く、我今日は公用忙しければ汝が家に至ること能はじ。異日暇を得ば必らず母子を訪ふべきに、今日は先我を免せ。閻婆が云、我女專ら押司の光臨を待わびて居候へば、扨て來臨を惠み給へ。押司は何ゆゑ斯疎んじ給ふや。宋江が云く、今日は實に忙しければ、先宜しく我を放ち回らしめよ。明日は早々汝が屋に至るべし。閻婆が云く、我偶押司に遇ひぬるに、如何ぞ肯て放ち申さんや。今晩は除非に駕を扨給へとて、宋江が衣の袖を扯て尙再三云ひけるは、何人か押司に詐のことを告げ申て、斯は疎じ給ふらん。我等母子は押司を憑て今日の生涯を饒にして世を過す者なれば、豈押司のことを等閑に思ひ申すべき、必らず外人等が云ふ所の讒言を信じ給ふことなかれ。若し女に過ち候はゞ、都て我身の上に干てこれを正し申さんずれば、今晩は縱ひいか樣の幹事おはしますとも、少の間なりとも駕を移し給へ。宋江は猶公用あるを以て、只顧

否けれ共、彼閻老婆、宋江が袖裂しも放たず、竟に宋江を拽て己が家の門前に至つて云ひけるは、押司已に此所まで至り給ふ上は、宜しく門内に入り給へ。宋江今は辭すること能はず、遂に門内に入つて凳の上に坐しければ、彼の閻婆も同じく宋江が傍に坐して、女を呼ばはつて云ひけるは、汝が心愛の人來り給ひしに、早く出でてこれを迎へよや。彼婆惜は床の上に在りて一向張三がことを思ひ居ける處に、忽ち母が呼ばはつて心愛の人來り給ひしと云ぬるを聞き、必らず張三が事ならんと思ひ、忙ぎ慌て起上り、樓を下り彼隔子の縫間より透しみるに、瑠璃燈の下に宋江凳に坐して在りしかば、彼婆惜急に身を回して再び床の上に打臥けり。此時閻婆は、女が樓を下りんとする足音の聞えけるが、再び又樓を上りぬるを聞いて、重ねて呼ばはつて云ひけるは、汝が心愛の人來り給ひぬるに、何ゆゑ樓を下りざるや。彼婆惜床の上より答へて云く、其人は是盲目にあらず、自ら能く樓に上るべきに何ぞ我樓を下りて迎へ申さんや。閻婆これを聞いて云ひける。我女押司の久しく來り給はざるを怨て、かくのごとく申ならん。我押司を延て樓に上るべし。宋江は今婆惜が云ひし詞を聞いて早心中悅こびず、直ちに回らんと思ひけれ共、閻婆再三再四扯住るに、已ことを得ず閻婆と共に樓の上に登しかば、閻婆乃ち宋江を拖て房局の内に入り、乃ち女に對して云ひけるは、押司偶至り給ふに、汝は何ゆゑ斯悅びざるや。汝原來短氣の者なるゆゑ、嚮にも押司の心に背て押司を恚らしめまゐらせ、押司遂にこれを恨給ひて、久しく我家に來り給ふことなかりき。汝當に押司を慕ひけるが、今晩却つて

かく憤りを含は何の道理ぞや。我再三力を盡して押司を迎へ來りしに、汝必らず等閑のことに思ふべからず。婆惜これを聞き、母に答へて云ひけるは、母は是何事を噪ぎ給ふぞや。我かつて反きことをも致さゞるに、彼人自ら來り給はぬに、我なんぞ是を知らんや。必らず少しも怕れ給ふことなかれ。宋江是を聞きしかども、只聲をも做ずして居たりしかば、閻婆則ち婆惜を扯起して、宋江が左の側に坐せしめて云ひけるは、汝宜しく押司を慰て談話せよ、必らず又押司の心に背くことなかれ。婆惜是を聞いて大いに悅びず、則ち座を起つて宋江が座の遙對面に坐し、頭を低て居たりしかば、宋江も同じく頭を低て互に一句一言も云はず在りければ、閻婆此體を見て云ひけるは、酒なくんばいかんぞ能情を惹ことあらんや。我少刻酒肴を求めて來るべきに、女必らず押司に陪して談話せよ、少しも羞怕るゝことなかれ。此時宋江暗に想ひけるは、我想はず此閻婆に扯住られ、已ことを得ずして此處に來りぬ。閻婆もし外に出ることあらば、我好此間に乘じて逃回るべきものをと、思案を定めける處に、彼閻婆宋江が回らんと欲する色を悟りしかば、乃ち房間の戸を關して鎖を下ろし、遂に樓を下りて街の上に行き、多く酒肴を調へ、再び家に歸り、やがてこれを具へて房間の内に運ひ來りける處に、宋江も婆惜も共に頭を低互に無興の色面に露れしかば、閻婆乃ち女に對して云ひけるは、汝宜しく盃を擧て押司に勸めよや。婆惜が云く、我今日何とやらん身心煩はしく候へば、酒を用ひんこと能ふまじ。閻婆が云く、汝幼き時より父母に寵愛せられて自由自在に生長たるゆゑ、動不動自像自意のこと多し。這等のことは是父母に對しては行はるべけれども、他人に對しては行はれざることなり、汝宜しく心を更めて押司を慰め申せ。婆惜が云く我今日は快からざるゆゑ、酒を酌まじきに、何ぞこれを自像自意といはんや。我縱ひ酒を酌まずして床の上に打臥とも、誰か敢て劍を飛ばし我首を取る者あらんや。必らず多く無用の言を云ひ給ふことなかれ。閻婆これを打笑つて云ひけるは、押司は是風流の人物にて、汝がごとき短見にあらず、汝縱ひ酒こそ酌まずとも、頭を擡て談話をもすべきことなるに、却つて頭を低れて悅びざるは、至つて無禮なりとて、自から盃を執て宋江に勸めければ、宋江辭することを能はず、自から强て一盞を酌乾けり。閻婆これを見て哈々と打笑つて云ひけるは、願はくは押司心を寛げ給へ。必らず外人の云ふことを聞き入れ給ひて、我等母子を恨み給ふことなかれ。別して今日は何事も打休め給ひて、一向酒を過ごし給へとて、言を巧にし色を令して再三酒を篩て宋江を勸め、又婆惜に對して云ひけるは、汝は何ゆゑ孩子のごとく頻りに我教訓に背くや、宜しく怒を息て一盃を酌まんや。婆惜が云く、母はいかなることによつて斯く我を苦しめ給ふや。我實に酒を飲意なし、必らず無益の諫を云ひ給ふことなかれ。閻婆又云く、汝が心愛の宋押司偶來り給ふに、一盃の酒を勸め申すとも、何の不可なることかあらん。汝速に我言に隨て押司とともに酒を酌んで心を愚めよ。婆惜此言を聞いて心中に想ひけるは、我心は只張三が事こそ思ひぬるに、いかんぞ能く宋江に陪して酒を酌まんや。然れども我もし彼を醉しめずんば、彼必らず床の内にて我を妨ることあらんか。

されば先彼を酒に醉はしめ、熟く睡しめんにはしかじと圖り、乃ち盃を執半盞の酒を酌みければ、閻婆打笑つて云く、婆惜汝は心を改めけるよな。必ず憤ることをなさずして、押司の心に從ひまゐらせよ、押司も又多く酒を過ごし給へとて、再四詞を盡し强ければ、宋江辭すること能はず、一連に三五盃を酌みしかは、閻婆も又數盃酌み了て再たび樓を下りて酒を盪來りける處に、婆惜又半盞を酌みければ、閻婆これを見て心中に悅び想ひけるは、今宵もしよく宋江を欺しむることあらば宋江必らず此間の怨を忘れて、又幾ばく月日を養ふべければ、其内に宜しく商議をなすべきものをと思ひ、又樓を下りて酒を盪て來たりける處に、宋江も婆惜も頭を低れて居たりしかば、閻婆哈々と打笑つて云ひけるは、汝兩人は何ゆゑ互に羞怕て、談話もなさゞるや。押司は是男子のことなれば、別に羞給ふことも有るまじきに、只宜しく風流の談話を催し給へ。宋江は是を聞き彌悅びず、只一言も答へずして甚だ憂愁に迫りぬ。彼婆惜も又自ら想道、我は只張三がことをこそ朝夕これを思ふに、汝今宵こゝに來るとも我豈敢て汝と偕に樂をなさんやとて、心中宋江を惡み嫌ふこと尤甚し。かゝる處に鄆城縣に一人の糟薑を賣ふ唐牛兒と云ふ者有りけるが、常に宋江の恩を蒙りしゆゑ、若し宋江彼を用ゐる時は、彼又死を捨て宋江が爲に力を盡しけるが、此夜博奕に輸て如何ともすることならず、宋江に本錢を借らんと欲して、宋江が宅に往きしかども、宋江は宅にあらざりければ、唐牛兒彼に去り此に來つて、方々尋ぬる所に、一人の友唐牛兒に問うて云く、汝は誰を尋ねんとてかくのごとく忙しきぞ。唐牛兒が云く、我は是縣裡の宋押司を尋ぬるなり。彼友が云く、我看たるに宋押司は閻婆に引かれ此前を通り給ひぬ。唐牛兒が云く、彼閻婆が女閻婆惜は宋押司の妾なりけるが、頃日張三と私情を通じて不義をなしけるゆゑ、宋押司頗ぶる此事を知りて、久しく彼が家には往き給はざりけるが、今宵は必定かの閻婆に誑れてこそ、行き給ひしならん。我今賭博に輸て一錢の貯もなきまゝ、宋押司に少し本錢を借らんと欲することなれば、閻婆が家に尋ね行きて、本錢をも借り尙且相伴して、幾ばくの酒をも酌まんものを、とても押司の歸り給はん迄は待がたしとて、直ちに閻婆が家に至り、門の縫間より内を望み見るに、燈の光明かにして、樓の上に人音ありければ、唐牛兒急に進み入つて、直ちに樓に上り、乃ち宋江に見えて慇懃に跪ぬ。宋江暗に思ひけるは、此者幸ひの處に來れりとて、乃ち唐牛兒に向つて、回りたき摸樣を見はし眼交しければ、唐牛兒原來乘き者にて早く其意を知覺則ち宋江に對して言をつくり云ひけるは、某押司を尋ねて方々を馳けるに、押司は此處に在つて斯く安々と酒を酌んで娛給ふや。宋江が云く、汝我を尋ねしは、定めて縣裡より公用を申來りつらん。唐牛兒が云く、押司何ぞはや忘れ給ふや、今朝彼一ッの公用いまだ消息なきゆゑ、知縣相公大いに焦燥て待ちわび給ひ、已に五六度許使を馳せて押司を尋ねしめ給ひぬ。宜しく急に回り給へ。宋江が云く、誠に我不圖今朝の公用を忘れたり。知縣すでにかく使を馳せ給ふ上は、一刻も急に回るべしとて頓て座を立たんとしける處に、彼閻婆これを攔住て云けるは、押司何ぞ這樣の計をなし給ふや、

我愚なりといへ共、此計に中るまじ。且宜しく坐をなし給へとて、又唐牛兒に向つて云ひけるは、汝は何ゆゑ我樓に登りて我を誑さんとするや。今此夜中には知縣相公も已に衙門に回り給ひて、夫人とともに酒を酌んで樂を催し給ふべきに、何の公用有りてか、只顧押司を尋ね給はんや、這等の計は只よく三歳の孩兒を欺くべし。我前にては此計は決して行はるまじ。唐牛兒が云く、實に是知縣相公より、度々使を馳給ひて宋押司を尋ねしめ給ふなり。我何ぞ謊を云はんや。閻老婆大いに罵つて云く、汝少人何ぞ敢て我を欺んとするや。我兩眼は星よりも明かなり。先に押司汝に向つて回りたきの摸樣を見し給ひて、汝にかくのごとき計を云はしめ給ふなり。汝もし心ある者ならば、押司回らんと云ひ給ふとも、猶これを諫て押司を慰むべき處に、却て押司を抱て歸らんと圖るはいかんぞや、我決して汝を饒しがたしとて、忽ち跳起て唐牛兒が面を打ちければ、唐牛兒は樓の口に坐しけるゆゑ、遂に樓より落ちけれども、幸ひに身を傷損ずして云ひけるは、汝閻婆何ゆゑ妄りに我を打つや。閻婆が云く、汝擅に我家に來り、押司を引いて回らんとするは、是れ則ち我衣飯を破る者なれば我何ぞ汝を打つまじきや、汝もし猶聲を揚ることあらば、彌痛く打つべきぞ。唐牛兒が云く、汝我を打つて妨なくんば、我汝に打たるべしとて、近々と進みければ、彼閻婆酒興に乘じて、また唐牛兒が面を續けて三拳打つて門外に推出し、乃ち門を關して猶頻りに惡口しければ、唐牛兒大いに怒り、門外に立住つて罵り呼ばはつて云ひけるは、賊老婆汝よく我を打ちけるよな。我若し宋押司の事を想はずんば、汝が此屋を微塵に打壞て、汝が命をも害すべきものをと牙を咬んで回りけり。閻婆は再び樓に上り、宋江に對して云ひけるは、押司は何ゆゑ彼小人に憐憫を加へ給ふや、彼は是專ら人の是非を云うて、一碗の酒を貪る乞食なり。押司向後彼を惠み給ふことなかれ。宋江は原來眞實の人なれば、今閻婆に計を看破られたるゆゑ、座を立難て只顧躊躇して居たりしかば、閻婆又宋江に對して云ひけるは、押司必らず心中に我を恨み給ふことなかれ、我は唯押司を慰ん爲斯は行ひ申せしなりとて、又女に對て云ひけるは、汝何ゆゑ押司を勸めて酒を過ぐさゞるや、我暗に汝兩人の動靜を猜するに、久しく遇はざりしゆゑ、互に怨あると覺えたり。若しいよ〳〵怨あらば、早く歇んで是を語り候へとて遂に盃を收めて樓を下りければ、宋江暗に想道、婆惜は張三と私情を通じけると、人皆沙汰しけれ共、我いまだ實正のことを見ざるゆゑ、半は信じ半は疑て事を決せざるが、今宵心を認て婆惜が動靜を伺はんため、一夜は曲て歇るべしと、意を定めける處に、那閻婆又樓に上りて女に對して云ひけるは、夜も已に更けるに、何ゆゑ押司を勸めて共に歇まざるや、只宜しく早々歇んで我心を安からしめよ。閻婆惜答へて云く、我等が歇まんことは、母の干り給ふことにあらず。多く心を費し給はんより、自から樓を下りて歇み給へ。明日再び遇ひ申さんとて遂に樓を下り燈を滅、自から寢間に入つて臥にけり。宋江は猶凳の上に坐して在りけるが、婆惜定めて常のごとく、凳の傍に來つて談話をもなし、宜しく我を請て歇ましめんと思ひけるに、豈知らんや、婆惜は只心中張三がことのみ慕ひけ

るゆゑ、郤つて宋江が來りしを大いに悅ずして想ひけるは、宋江今宵も又我と同じく休まんとこそ思ふべけれども、我今宵は決して彼と俱に寢むまじとて、獨燈の下に坐して、一向歎息しける處に夜もはや闌にして二更の鐘も響しかば、婆惜衣をも解ずして床の上に打ち臥しけるが、更に宋江を顧ざりければ、宋江心中に思ひけるは、此女何ぞ我を欺くこと此に至れりや。我先に閻婆に酒を勸められて醉けるにや、少し疲に及んで、此深夜を過しがたければ、只曲て一睡眠らばやと思ひ頓て頭巾を除きて卓の上に置き、衣服を脫ぎて衣架の上に架、壓衣力と招文袋を床の邊の欄杆の上に掛、遂に床の上に登つて婆惜が背後に打臥しければ、婆惜これを見て再三冷笑ひけるゆゑ、宋江愈鬱悶して睡ること能はず、已に三更の左側に至りける處に、酒の醉も全く醒て漸々又五更の時に推移りしかば、宋江遂に起きて頭巾を戴き衣服を着し、乃ち彼の婆惜を罵つて云ひけるは、汝賤婦何ぞかくの如く無禮をなすや。婆惜此言を聞いて、同じく答へ罵つて云ひけるは、汝自ら羞を知らずして我が床の上に臥し、却つて我を罵しるは、實に好笑こと共也。宋江益々怒りたる體して、急に樓を下りける處に、彼老婆床の內より宋江が回るを聞いて、呼ばはり云ひけるは、押司は何ゆゑ今五更の時分に歸り給ふや、宜しく夜の明くるを待ちて歸り給へ。宋江是を耳にも聞き入れず、門を開きて私宅へと歸りけり。程なく縣前を過りける處に、一盞の燈の光有ければ、宋江立ち倚て見れば、是則ち湯藥を賣王公と云ふ者也。此時分縣前に出て湯藥を賣て產業とす。此王公宋江を見て忽ち禮をなして云く、押司は何の急用有つて、今朝未明より出で玉ふや。宋江が云く、我昨夜多く酒を飲けるゆゑ時を差へて此時分出でける也。王公が云く、押司已に酒を過ごし玉ひしならば、定めて快かるまじきに、醒酒二陳湯を用ひ玉はんや。宋江が云く、二陳湯あらば我幸ひにこれを用ゆべしとて、凳の上に坐しければ、王公頓て一盞の二陳湯を捧げて宋江に與ふ。宋江これを用ひ忽ち思ひ出し、我每度此者が湯藥を用ゆれ共、此者我償ひを請けざるゆゑ、我日外彼に一ッの棺椁を施すべしと約しけれ共、未だ是を與へざりしまま、今朝幸ひ彼に棺椁錢を與へ、悅こばしめんと思ひければ、乃ち王公に對して云ひけるは、我日外汝に棺椁を惠むべしと約しけれ共、事の忙はしきに紛れて未だ與へざりき、幸はひ今朝金子の携出あれば、約のごとく料を惠まんに、汝速かに陳三郎が家に往きて、棺椁を調のへ來り家に安置し、百年の齡を經て竟に死去の時は、我又幾ばくの銀を施して宜しく葬らしめん。汝老人只心を安んじて、這等のことを憂ふることなかれ。王公が云く、押司每々某を憫れみ玉ふ上、肯て壽具を惠み玉はんこと、此恩生前には報じ盡くし難からん。一たび死せば二たひ驢と生れ馬となり、押司の洪恩を報ひ奉らん。宋江が云く、汝なんぞ慇懃のことを云ふやとて、彼招文袋の內に金子あるを取り出ださんとして、已に手を以てこれを探けれども、招文袋は腰に着かざりしかば、大きに駭きて想ひけるは、昨夜不圖、婆惜が床の側なる欄杆の上に懸け置きけるが、今朝忙しう回りし故、忘れて腰に着けざりしよな、其內の金子は盜取らるゝとも、聊か憂なけれ共、晁蓋が方より來りし書簡を入れ置き

けるが、第一の禍ひ也。我昨日酒樓にて是を燒棄んとは思ひしか共、劉唐もし山陣に歸りて書簡も其席に燒き捨しと告げば、晁蓋が思はん所もいかゞあらんと憚りしゆゑ、宿所に歸らば燒火んと想ふの所、其途より不慮に閻婆に引かれ、彼が家に往燒火間なくこゝに及べり。我常に婆惜を看に、動不動曲の本を讀みけるが、定めて幾ばくの文字をも識りたらん。若し渠に看らるゝことあらば忽ち大事を惹出だすべき間、急に立ち歸りて是を取らんと欲し、乃ち王公に對して云ひけるは、汝必らず我を怪むことなかれ、我今朝忙しく出でけるゆゑ、彼金を入れし袋を忘れて、家の內に置き來れり。我今是を取りて少刻來るべき間、宜しく此に在つて我を待たんや。王公が云く、押司何ぞ必ずしも今日に限るべきや、明日にても明後日にても、慢々と賜はるべし。若し此事のみならば、必らず今立ち歸り給ふことなかれ。宋江が云く、別に又肝要の物を入れ置きしゆゑ、我今立歸りて取り來るべしと、忙しく別れて再び閻婆が宅に急ぎけり。扨彼閻婆惜は宋江が歸りしを聞いて、爬起獨言に宋江を罵つて云ひけるは、彼宋江村夫我を妨げて終夜睡しめざるこそ遺憾なれとて、猶一向罵つて不圖欄杆の上を看れば、彼招文袋を忘れて掛け置きしかば、婆惜冷笑て云ひけるは、宋江今朝我に羞辱られ、忙しく逃回りけるが、果して招文袋を忘れけるよな、われ幸ひに是を採て張三に送るべきにと悅こんで、遂に招文袋と壓衣刀とを取りて、これを見るに、少し重かりしかば、必定銀もやあらんとて、急に是を揮ひけるに果して一包の金子と一通の書簡とを揮出しければ、婆惜呵々と打咲ていひけるは、天是を我に惠み給ふなり、明日早々酒食を調へ張三を欵待、偖に娛を催さんものと、且其金を收め、又書簡を披て燈の下に之れをみるに、其上に晁蓋が名判を書き記し、許多の事共詳かに述べたりしかば、婆惜大いに悅び、這樣の大事我手に落つること、是我と張三とが莫大の福なり。我先には只弔桶の井の內に落ちたるかとこそ思ひしに、豈知らんや、井却つて弔桶の內に落ちたるよな、我常に張三と夫婦にならんことを冀ふといへども、宋江が在るゆゑに此願ひを遂げずして、萬千是を憂ケるに、今日此書簡我手に落ち入ること、是乃ち井の弔桶の內に落ちたるごとき稀有の珍事なり。宋江汝は原來大丈夫の譽あるとこそ聞きつるに、誰か識らん、かくのごとく梁山泊の强盜らと通同して書簡の往來をなすよな、書簡の內に百兩の金子を以て汝に送りけると有るなれば、我此金子をも乞取て、張三と娛を催さんをとて、再び金子と書簡とを招文袋に入れ置き、自から天に悅び地に喜びけり。

宋江怒て閻婆惜を殺す

斯る所に忽ち閻婆が家の門を開き入は誰なるぞや、宋江再び來るなり。閻婆が云、我先に尙甚だ早からんに、夜明て回り給へと云ひけれ共、押司これを容ひ給はざりしが、果して回り來り給ふ。且樓に上て婆惜と俱に歇み、夜明けん時早々歸り給へ。此時宋江直ちに樓を登りければ、婆惜は宋江が再び來りし樣子を聞知けるゆゑ、急に彼招文袋を懷中に藏し入て自ら牢くこれを懷、故意熟く睡たる體に詐臥しける處に、宋江已に房局の裏に進み來て、先床の前の欄杆を見けるに、招文袋ははやなかりしか

ば宋江心中に甚だ驚き、自ら昨夜の憤りを忍びて、彼婆惜を推動して云けるは、汝もし舊日の恩愛を思ひ出して、彼招文袋を我に還さは、我深くこれを感心すべし。婆惜詐て熟睡の體にもてなし、更に一言の答もせず。宋江又も推搖して云、汝何ゆゑ再三我を怨るや、我明日より汝を格外に敬ふべきに宜しく速かに怒を息んや。婆惜は初て眠を醒したる體にて云けるは、われ甘く睡り居ける所に、我を推起すは誰なるぞや。宋江が云、汝已に我又來りしを知ながら、斯僞の體は何事ぞや、願くは汝怒ることを息て我云ことを聞んや。婆惜答て、汝何の云こと有て妄りに我を妨るや。宋江が云、汝早く招文袋を我に還さんや。婆惜が云、汝何れの所にて、我に招文袋を交與して是を索るや、我曾てこれを知らざるに、汝率爾の事を問ふことなかれ。宋江が云、我先に汝が床の前の欄杆の上に、架置たるを忘れて回りぬ。此所には別に來る人もなければ、汝是を取ずんば誰か是を取んや。婆惜が云、汝は是狸か狐に迷惑されたるに疑なし。何ぞかくのごとき無實の言掛をなすや。宋江が云、汝頻りに抵賴んより速に我に還せ、我明日を初として何事も汝が心に隨ふべきぞ、汝再三戯れをなして我を焦らしむることなかれ。婆惜が云、我汝を戯れて何の興かあらん。我は曾て一物も拾はざるに、汝速に他所に往てこれを問ば、萬一又得ることもやあらんに、汝此無用の所に長居することなかれ。宋江が云、汝先には衣をも脱ずして臥けるが、今は是被を蓋て臥しければ、汝再び起て此被を運入たるには疑ひなし、其時必定彼招文袋を拾取たらん。何ぞ一向に抵賴や。婆惜此言を聞て大に怒り、忽ち柳眉を蹋竪、星眼を睜開て云けるは、我實に招文袋を拾ひ取しか共、決してこれを還すまじきに、汝能我を捉へて、官府に賊情を訟んや。宋江が云、我いかんぞ汝を捉へて賊とせんや。必ず誤て我心を疑ふことなかれ。婆惜冷笑て云けるは、汝も又能く我は賊ならずと知けるこそ奇特なれ。宋江此一言を聞て、心ます〳〵慌悵て云けるは、我常に汝母子兩人を覩こと、稀にも懇切ならずといふことなかりしに、汝は何ゆゑ我を怨るや、願くは、平生の情を省て、招文袋を還さんや。婆惜が云、汝常に云、我と張三とは事ありと、其實正を看屆んと欲する心深し、張三たとひ一點の過ありとも、未だ死罪に決すまじ。是則ち汝が彼盗賊等と通同する罪よりは猶大いに輕からん。宋江甚だ驚て云、汝必ず聲を高むることなかれ、若し隣家の人是を聞ば、事終に敗れん。只宜しく聲を低くせよ。婆惜が云、若外人の聞ことを恐るゝならば、這樣の大罪は犯すまじきことなり。我彼書簡を牢く藏し置け共、汝もし我に三つの事を准へなば、我書簡を還し得させん。宋江が云、三つの事は扨置て三十の事たりとも、都て我准ん。汝速に望のことを告よ。婆惜が云、汝只恐らくは准難からん。宋江が云、いかなる事かは知らざれども、我まさに行ふべき事ならば、即ち行はん、何ぞ豫じめ先疑ふや、汝宜く早々に申せ。婆惜が云、第一のことは、我今日より彼張三に嫁すとも汝一言を申すまじきと云文書を修へて我に與へんや。宋江が云、是最易し、我これを准へん。婆惜が云、第二の事は我縱ひ張三に嫁したりとも衣食使用は、都て汝是を辨ずべきと云文書を修へて我に與へんや。宋江が云、是又易し、

我是を准へん。婆惜又云、恐らくは第三の事准へがたからん。宋江が云、我已に二つの事を准へり何ぞ第三の事を准へざらんや。婆惜が云、汝彌准へんとならば彼晁蓋が送りし一百兩の金子を早く我に與へよ、然らば我汝を饒して招文袋を還し與ふべし。宋江が云、我二つの事は准んが、此一つの事は頗る准がたし。其故いかんぞなれば、彼百兩の金子を我に送りしかども、我再三是を辭し、封をも開す山陣に還しぬ。もし此金子我手に有ならば、早速汝に與ふべけれども、誓て此金子我手になし。婆惜が云、汝聞すや、公人錢を見ては蠅子の血を見るが如しと云ことを、彼汝に百兩の金子を送るに、汝是を受ずして還すべきや。這些の言は只好三歳の孩子を誑べし。汝何ぞ百兩の金子を惜や、若事の敗れに至て、汝が一命を殺さるゝ時は、必ず後悔することあらん。宋江が云、汝も素より知る如く、我は曾て謊を云たることなし。汝もし信ぜずんば、我に三日を限れ、三日の内に家財盡く變賣し百兩の金子を汝に與ふべきぞ、汝先招文袋を我に還せ。婆惜冷笑て云けるは、汝一人聰明の人にて、他人は皆癡なると思ふかや。汝我を誑いて招文袋を求んと欲すとも、我何ぞ汝に誑されん。汝三日内に百兩の金子を調へて我に與へんと云は、大いなる僞なり。汝もし招文袋を求度ば、早く金子を持參し招文袋と取換せ。宋江が云、我實に此金なし。何ぞ汝を誑かさんや。婆惜が云、汝明日知縣相公の廳上に至ても、尚抵賴て此金なしと言べきや。宋江は未だ怒をなさずしてありけるが、婆惜今知縣相公の廳上と云しを聞て、忽ち大に怒り、急に兩眼を睜開き云けるは、汝實に還さんや又還すまじきや。婆惜が云、汝何を怒るぞや、我決して還すまじ。宋江が云、彌還すまじきや。婆惜が云、我百度も還すまじきに、汝これを如何。若招文袋を求たくば、鄆城縣知縣相公の前に出よ、我彼所にて汝に還すべし。宋江是を聞て大に怒り、彼が被たる夜襖を扯開て、其内を見る所に、彼招文袋は原來女が懷中に藏し置ける故、婆惜は只双手を伸し胸の上を緊と抱て、夜襖の内を搜すを顧みざりしかば、宋江これを知て云けるは、招文袋は汝が懷中に藏し置たるに疑なし。速に出して還さんやとて、忙はしく向ひ倚て、婆惜が手を扯離してこれを奪ひ取んとしけれは、婆惜は一命を掛て、これを奪取られじと働しゆゑ、宋江又死を捨てこれを奪取んと互に推つおされつ暫く揉合ける處に、彼壓衣刀まづ懷中より落たりしかば、宋江乃壓衣刀を取て手に持ければ、婆惜これを見て忽ち聲を揚、宋江人を殺すと未だ呼も罷らざるに、宋江此聲を聞て忽然として、婆惜を殺さんと思ふ念起りし處に、婆惜又第二聲を呼はりければ、宋江彌々これを忍びず、左の手にて婆惜が胸を壓へ、右の手に壓衣刀を持て、遂に婆惜が頸の上を一刀刺ければ、鮮血滾流れ滿身紅に染けれども、婆惜いまだ息絶ずして、猶聲を揚て喊んとしければ、宋江回す刀にて婆惜が首を只一刀に斬て落し、遂に招文袋を取て、彼書簡を燈の下にて火中、直ちに樓を下りて來りける處に、彼閻婆は女が今人を殺すと呼りたる聲を聞て、實に何事を做出しけるにやと、忙しく起て馳來り、乃ち梯子の上にて、宋江に撞當りしかば、閻婆先問て云、汝兩人竟夜何事を爭ひ給ひぬるぞ。宋江が云、汝が女甚だ無禮なるに依て、我彼を殺しぬ。閻婆

打笑て、押司は常に一寸の蟲をだに殺し給はぬ人なるに、いかんぞ肯て人を殺し給はんや、必ず戯れを云給ふことなかれ。宋江が云、我實に婆惜を殺しぬ。汝若これを信ぜずんば、樓の房局に入て屍首を見よ。閻婆が云、我尚信じがたしとて、遂に房局の戸を推開きこれを見ける所に、鮮血の内に屍首ありければ、閻婆大に驚て云、苦しやな是を如何せん。宋江が云、我はこれ大丈夫なれば、決して逃ることをせず、いか樣とも汝が心の欲する所に從ん。閻婆が云、我女元來押司の心に背き惡しき所多かりしかば、押司是を殺し給ひぬるも理なり。只恨らくは我晩年に及で一人の女に別れしかば、今より誰かあへて我を養ふべき。宋江が云、此事何の憂る所あらん、汝もし我を饒さんには、我多く金銀財寶を送て、汝を豐に養育べし。實に汝が心いかんぞや。閻婆が云、若果してかくのごとくんば我深くこれを感心すべし。只急に屍首を葬るべきに、押司これをよき樣に行ひ給へ。宋江が云、是最易し、我陳三郎が家にて棺椁を調へ、汝に與へん、汝先自ら屍首を棺椁に收よ。此外に又十兩の銀を送るべき間、諸事の使用に供て、急に屍首を葬るべし。閻婆が云、押司肯てかくのごとく惠み給ふならば、屍首を葬さんこと尤も易かるべし、只宜しく夜の明ざる内に棺椁を調へ、屍首を收なば、左右の近隣屍首を見る人なく、事いよ〳〵穩ならん。宋江が云、汝が言極て然り、汝疾紙筆を拿來れ、我書簡を修へて汝を陳三郎が方に遣はして、棺椁を賒しめん。閻婆がいはく若書簡を遣し給はゞ必定事延引に及ぶべし。願くは押司自ら往給ひ、早々棺椁を取寄給へ。宋江が云、汝が言所尤も其理あり。我今汝と俱に行べければ、牢く門を關せとて、遂に樓を下り門外に出ければ、閻婆自ら門を關して兩人縣前を望んで馳ける處に、此時天色猶未明にして、街の人家未だ起ざりしか共、縣門は已に開けしなり。

閻婆大に鄆城縣を鬧しむ

宋押司は閻婆と俱に縣門の前に至りしに、閻婆俄に宋江を牢く揪へ人を殺害したる賊こゝに有と呼れば、宋江大に驚き、急に閻婆が口を掩んとせしを、頭を搖て掩しめず、又一連に二三聲呼りしかば、縣前に在合ふ下官ら、數人馳來て是を看れば、宋江なりしかば、下官皆閻婆を勸めて、汝口を閉よ、宋押司は人を害する人物にあらず。汝若事あらば、靜にこれを述よ。閻婆が云、宋江は實に人殺しの兇身なり。列位我が爲に此を捉へ、我と俱に知縣相公に訴て給り候へ。原來宋江の人となり、究て仁善なれば、官軍上下愛敬して、滿縣の人宋江を讓ざるは一人もなき故、此時下官ら都て宋江を捉ず、却て只逃さんと欲しける處に、想ず彼唐牛兒糟姜を擔て此所に來りけるが、閻婆が宋江を捉へ、只顧鬧ぐを看て、怒あらく、賊老婆昨夜我を打けるが、今朝は汝また、宋押司を捉て苦むること甚だ遺憾なり。我今此處に於て、昨夜の回打をなさずんば、更に何れの時をか待べしとて、乃ち糟薑を藥賣の老王公が凳の上に卸し置き、忽ち飛がごとくに跑來て、大いに罵て云けるは、賊老婆汝何ゆゑ押司を捉へ苦ましめまゐらすや。閻婆が云、汝必ず率爾に來て、宋江を逃すことなかれ、若逃さば

汝が命を我に償ふべきぞ。唐牛兒は前後の事を知らざりしかば、此言を聞て大に怒り、何ぞ我が命を汝に償はんやとて、彼閻婆が手を取て痛く柝き、猶拳を揑て閻婆が面を散々に打ちける處に、閻婆大いに苦で遂に手を放ちければ、宋江は不慮に閻婆が手を脱れ、其闘しきに乘じ、遂に逃げ去ぬ。閻婆急に唐牛兒を揪へて哭呼はつて云けるは、宋江昨夜我娘を殺たるに、汝は何ゆゑ彼を逃したるや。唐牛兒是を聞て忽ち大に駭て云、我いかんぞ宋押司の人を殺されたることをしらんや。汝必ず我是を知て逃したると思ふことなかれ。閻婆又彼下官らに向て、大に呼つて云、列位我爲に人を殺したる賊宋江を捉てたび給へ、もし然らずんば、累列位に及ぶべし。下官らは原來宋江が情を蒙りし者共なれば、敢て宋江を追求んとするは一人もあらず。下官一人閻婆を引、餘の下官共は都て皆唐牛兒を捕へて直に鄆城縣へ引渡しぬ。知縣は人を殺したることを聞て、忙しく廳上に出ける處に、諸の軍卒ら、唐牛兒を堦の下に引出す。知縣これを見るに、一人の老婆左りの方に跪づく。又一人の漢子右の方に低頭す。知縣問て云、人を殺したるとはいかんぞや。彼老婆答て云、我姓は閻と申者にて、一人の女を持ぬ。名を閻婆惜と申、宋公明の妾なりしを、昨夜、女、宋江と俱に樓上に酒を酌娛で居し處に、此の唐牛兒直に我家に至て大に鬧し我を罵悪口致しぬ。尤も左右の近隣盡く知る所なり。今朝宋江已に回りけるが、何故かしらず、頓て又來て女閻婆惜を殺す。此ゆゑに我宋公を址て、縣前に至りし處に、又唐牛兒來て擅に我を打罵り、竟に宋江を放逃し候なり。願くは相公明らかに是を決斷し給へ。知縣これを聞て、乃ち唐牛兒に向て、汝何ゆゑ人を殺したる兇身を放逃せしや。唐牛兒謹で云けるは、某曾て前後の緣故は知らざれども、昨夜不圖宋押司を訪ふに、此老婆が家に至り、乃ち宋江を相伴して酒を酌んとせし處に、此老婆何の故もなく、安りに某を羞辱、剩へ拳を以て痛く打けれども、某是を忍びて回れり。今朝某又街に出て糟薑を賈ひて居ける處に、此老婆宋押司を捉へて縣前にあり。只顧爭をなして闘しかりし故、某站停りてこれを勸開けるに、宋江自ら走り逃去て候。某毛頭宋押司彼が女を殺されたることを、露ばかりも存せず候。望らくは相公是を察し給へ。知縣大いに怒て云く、汝此のごとく胡亂の言をいふや、宋江は是信行の君子、いかんぞ人を殺さんや。閻婆惜を害したるは、必定汝なるべしとて、遂に左右に命じて唐牛兒を絆めけり。かゝる所に、張文遠來つて、宋江が閻婆惜を殺したると聞き、心中に憤り、乃ち閻婆惜が爲に一通の狀子を修へ、遂に知縣に告て死人閻婆惜が屍を、點檢べしと願ひければ、知縣是を許し、則ち當地の里正及び許作等を閻婆惜が家に遣して、彼屍を點檢めける所に、死人の傍に一挺の壓衣刀ありしかば、里正先此壓衣刀を拾取、彼閻婆惜が殺されたる刀の痕等委しく是を見屆け、乃ち死人を棺椁に納めて、近邊の寺中に寄置、諸人再び縣裡に回て、點檢たる照依詳かに訴へたり。知縣は原來宋江と尤も親しかりけるゆゑ、いかやうともして、宋江を救はんと欲し、乃ち罪を唐牛兒が身に推干け、再三唐牛兒を怒り罵て白狀せよと問ければ、唐牛兒が云、某かつて前後の事を知候はず。願くは

相公辜なき者を罪し給ふことなかれ。知縣が云、汝夜中に閻老婆が家を鬧しむるは、私の寃ある故なり。婆惜を殺したるは、必定汝が所爲なるべし。唐牛兒が云く、某昨夜彼が家に行て宋押司を訪ひしは實に一盞の酒を求ん爲なり。豈私の寃有て行申さんや。若是を信じ給はずんば、彼老婆に其動靜を問給ふべし。知縣が云く、いかんぞ白々と抵賴や、我今痛く汝を拷問せん、必悔ることなかれとて遂に左右に命じ策せければ、恰も虎狼の如き下官共、忽ち唐牛兒を拉倒し、痛く五十餘棒打ぬる所に、唐牛兒聲を放て喊しが、其言は猶初申所と少も差ざりし。知縣は元來唐牛兒は閻婆が女を殺せしにあらざるは、老早明らかに知るといへ共、只一昧に宋江を救はん爲、この唐牛兒を拷問せり。知縣、先左右を呼で、彼に頸枷を枷させける處に、彼張文遠廳に上り、乃ち知縣に告て申けるは、唐牛兒が申所始終相同じ、況や閻婆惜を殺したる壓衣刀は紛なき宋江が常に帶したる秘藏の壓衣刀にて、同僚の輩これを識認たる者多し。願くは先宋江を捕へて問給ふべし。然らば立處に其兇身知れ申さん。知縣は深く宋江を助けんと欲せしかども、張文遠に再三再四訴へられ、今は已に人の耳目遮り掩ふこと能はず。遂に下官に命じて宋江を捕へしむ。下官が命を承り直に宋江が居宅に到つて搜しみるに、宋江ははや逃去て、家内に在ざりければ、下官ら商議して云けるは、我輩手を空しくして回らんより、隣家の輩數人を捉て歸るべしとて、頓て隣家數輩を擒て、遂に知縣の廳前に引出し、乃ち知縣に告て云けるは、兇身宋江は已に家を棄逃去りし故、隣家の數輩を捉へ回て候。此時張文遠知縣に向て縱ひ宋江逃失たり共、彼が父宋公ならびに弟宋清共に宋家村に居住す、宜しく彼等を捕へ其日數を限り、乃ち下官等に從はしめ、俱に宋江を尋ねしめ給へかしと申しける。今般宋江を捕へ得るや否、後卷を見て詳ならん。

二編卷之十

朱同義をもつて宋公明を釋す

却説、鄆城縣の知縣は宋江を助けん爲、たゞ罪を唐牛兒が身に負せ、已に日數經ん間に、又方便を以て唐牛兒を赦さんと圖りけるに、料らず張文遠頻りに閻老婆を引いて、只顧哭き告げしめけるゆゑ、知縣も今は大法に就いて止ことを得ず、乃ち下官兩三人を宋家村に遣し、宋江の父宋太公及び其次男たる宋清を急に呼び來るべしとて、乃ち一通の文書を與へけり。下官等卽日遂に宋家村に馳せて、直に宋太公が館にいたる。宋太公自ら是を迎へ、草廳に延請うて客座に就しめ、宋太公已に主席に座しければ、下官等彼文書を取り出してこれを與ふ。宋太公是を見了て云ひけるは、某世々此村に居住して農作を業とし、某が代に至るまで先祖の遺業を破らず、唯宜しく分を守つて渡世を營み申所に、我嫡子宋江は幼きより意驕り、意傲り、第一親に事へて不孝の徒なり。彼向に官に仕へんと申せしゆゑ、我再三これを制しけれ共、彼毫髮も某が諫を容ひず、已に家を出て縣裡に馳往きしゆゑ、某其時當地の官府に彼が不孝のことを訴へ、既に親子の緣を斷て、則ち官府より賜はりたる執憑の文書をも、今に某が身邊に所持せしむ。某はたゞ次男宋清と俱に農作を務めて、今日の渡世を營み、宋江とは多年水火を交へず、況んや家内に往來することなければ、其後は彼が面を見たることだにあらず。彼今大罪を犯したりとも、某が身に干ることと候まじ。彼必定這樣の事を惹出だして、親類にも禍を蒙らしむることあらんと料り知りぬるゆゑ、彼と緣を斷て其節官府より執憑の文書を申受け置きぬ、願はくは、列位明らかに是を察し給へ。下官等是を聞いて、是則ち宋江父子が預じめ計を設けて、かくのごとく行ひつるとは知りけれども、原來間宋江が惠みを蒙りし下官共なかりしかば、あへて咎むることもなく、只打笑つて云ひけるは、太公既に親子の緣を斷り給ひて、官府の文書あるならば早く取り出て見せ給へ。某ら是を寫抄して知縣相公に見せ申べし。太公則ち文書を取り出して下官らに寫さしめ、頓て又酒食を備へて下官らを欵待、乃ち白銀十餘兩を取出して下官等に送りければ、下官らこれを受けて太公に謝し、遂に別れて縣裡に回り、則ち知縣に見えて云ひけるは、宋太公は數年以前に宋江と親子の緣を切り、則ち其時の官府より執憑の文書を賜はりぬ。某ら已に白紙に寫して持參せり。このゆゑに宋太公を捕ふること成りがたし。是世間一同の法なれば力なし。知縣此言を聞いて私に心中に悅び、既に前官より執憑文書を出だし置きたるとならば、宋太公は是則ち他人なれば、尤も太公が干ることにあらず。只宜しく一千貫の賞錢を以て近州遠郡を普く觸を廻して、宋江を捉へしめん、此外曾て行ふべきことなし。彼張文遠又閻老婆を挑唆て再三訴訟せしめければ、閻老婆乃ち頭を披髮を亂し、頻りに廳前に哭倒れて告けるは、宋江は明かに是弟宋清が働にて藏し置きぬ。願

はくは相公我爲に仇を殺してたび給へ。知縣怒つて云く、宋江は父太公ならびに弟の宋清、已に數年以前に宋公とは親族の緣を切つて、分明に前官より賜ひし文書ある上は、いかんぞ能く此事を宋太公宋清に問はんや。汝必ず妄りのことを申すことなかれ。老婆これを聞いて、益〻流涕して云ひけるは、宋江は是孝行第一の人なるに依て、世間に皆孝義宋郎と諢名せり。豈敢て親子の緣を斷ことあらんや。彼の執憑の文書といふは、必然假の文書ならん。只望むらくは相公明らかに決斷し給へ。知縣が云く、前官自ら印を押したる公文に豈假のことあらんや。閻婆是を聞いて、大いに狂ひ哭き、再三再四知縣に告げて申しけるは、人命のことは天よりも大いなり。相公若し彌〻わが爲にこれを決斷し給はずんば、いかにせん、我直ちに州裡に行きて府尹相公に訴ふべし。我女故なくして刄の下に身を喪ひ、其死最も苦しめり。斯く太平ならざる世といふとも、仇を眼前に見ながら何ぞよく是を安穩ならめしんや。此時張文遠又廳前に進み出で云ひけるは、知縣相公もし彼が爲に仇を捕へ給はずんば、恐らくは州裡に赴きて知府相公に訴へ申すべし。知府相公萬一彼が爲に當地に於いて、仇人を搜し出ださるゝことあらば、恐らくは相公答へ給はん詞は有るまじきか。凡そ事は小きに起つて大いなるに至る。況んや是は人命の公事なり。只宜しく三思を加へ給へかし。知縣は原來其理あることを知るといへども、一向に宋江を助けんと欲し、聊事を曲て支吾さんとしけるに、今彼閻老婆並に張三に再三訴へられ、更殊州裡に訴訟せんと云ひしを、心中にやゝ恐れ、遂に止ことを得ず、即日一封の文書を修へ、乃ち朱同、雷横兩人の頭領を呼んで云く、汝兩都頭急に人數を引いて宋家村に馳行き、宋江もし隱し在らば搜し捉へ歸るべしとて、文書を與へらる。兩都頭鈞命を受け、文書を取りて先づ役所へ來りける。かくて兩都頭は兵四十餘人を引いて、遂に宋家村に馳せ來り、宋太公が館に至りて斯くと告げければ、宋太公忙しく門外に出て相迎へけるに、都頭が云く、太公某らを恨給ふことなかれ。則ち知縣相公の命に依て來りしことなれば、某等私の所爲にあらず。太公の嫡子宋押司今人を殺して此邊に隱れ居らるゝとなり。定めて太公是を知り給ふらん。宋公が云く、兩人の都頭聞き給へ、彼逆子宋江は已に親子の緣を斷て、彼が事に於ては善惡を論せず、某が干る所にあらず。是故にこそは、前官より文書を申受けたり。夫より以來數ケ年を經れ共、曾て我館の近邊にも來らず。某は獨次男宋清とともに、僅の田畑を耕して營をなし、宋江とは食を同じうせざれば、豈よく彼が事を知らんや。朱同が云く、某上司の命を請けて來たるゆゑ、太公の言に從ひがたし。唯宜しく家内を一搜し搜して回りなば、知縣の命を背かざる道理なり。太公怒し給へ、家内を搜し申さんとて、則ち三四十人の兵に館を圍ませ、朱同、雷横に對して云ひけるは、我は前門を守り申さんに、足下は先づ内に入つて搜し給へ。雷横これに同じ、遂に内に入つて四方八面普く半時ばかり搜し索て、再び前門に馳せ出て、朱同に對して云ひける、我遍く搜し索めしかども宋江實に此内にはあらず。朱同が云く、我曾て疑ふ所あつて心を安んぜず。雷都頭は兵等と共に此門を守つて待給へ。我は親ら詳かに搜し見て

宜しく知縣に報ずべし。宋太公が云く、某下愚たりといへ共、頗る官府の法度を知れり。いかんぞ敢て罪人を家内に藏し置き申さんや。朱同が云く、這は是人を殺したる大罪なれば、鬆寛になし難し。太公必ず誤つて我緊しきを怨給ふことなかれ。凡そ人の命のことに於て、其兒身を搜すには、何方にても類例かくのごとし。太公が云く、某何ぞ都頭を怨むる所あらんや。只隨意に家内を嚴に搜し改めて疑ひを散し申されよ。朱同が云く、雷都頭は太公を守つて、此處に待ち給へ。必ず妄りに宋太公を放し給ふな。我は又一搜し搜し來らんとて、直ちに家内に進み入りしが、私に佛堂の前にいたり、此所に又一つの門有るを堅く關、内より鍵を下しあるを固辭開きて、香華を供置く卓を把つて側らに搬れば、其下に又一片の板あるを、揭起して乃ち此所をみるに、一つの窖あり。窖の内に一條の鈴の索あり。朱同是を把て拽ければ、鈴の聲忽ち響て、瞬目間もあらぬに、窖の内より一人の漢子現れ出る。朱同これをみるに、則ち宋公明なり。時に宋公明と顏を見合せ、大に驚き只呆れたる許りなり。朱同が云く、押司必ず我此處に至りしを恨み給ふことなかれ。我常に押司と交はり厚き故、押司遂に我に放心し給ひ、昔酒の上にて我に語り給ふは、我親の佛堂の下に一つの窖あり。窖の上には一片の板あり、一脚の卓を居てこれを掩ふ。此ゆゑに家人等も又知る者罕なり。汝若し萬一の急難あらば、我に知らせよ、我彼窖の内に藏し難を救はんと告げ給ひぬ。我是を聞いてより以來、已に數年を經たれ共、猶隱々に此言を記えり。是によつて、我老早押司此内に隱れ給ふを知れり。今日知縣相公雷横と某に命じて、押司を捉へんとの事なれ共、其實は知縣相公も、何とぞ押司を助んとの意最も深し。只怨らくは張三只顧閻老婆を挑唆て、再三知縣相公に訴へしめ、相公もし嚴しく宋江を搜し捉へ給はずば、州裡に往きて、知府相公に訴へ申さんとて、哭狂ひ、幾度か狀子を呈るゆゑ、知縣相公も已ことを得給はず、某兩人に仰て太公の居宅を搜し見よとのことなり。恐らくは雷横人を救ひ得ること屆まじく思ひ、彼を賺し門前に待たしめ、某は直ちに此處に入つて押司に見え申、此處は尤も身を躲すに好といへ共、身を安んずるに足ず。若し人此窖あることを知つて、此所を搜さば、何を以てか是を遮り給はん。只宜しく別に計をなし給へ。宋江是を謝して云く、都頭の厚恩誠に身を沒まで忘がたし。我も已に此所を出て何方になりとも逃行んとこそ思ひつる。若し都頭に救はれずんば必定縲絏の恥を受くべきに、某いかなる僥倖にや多く都頭の憐みを蒙むる。朱同が云く、何爲慇懃の言に及び候はん。唯しらず、押司はいづれの所に身を倚んとは圖り給ふぞや。宋江が云く、我熟これを想ふに、身を倚べき地三個所あり。第一は是滄州横海郡の小旋風柴進が館なり。第二には青州清風寨の小李廣花榮が處なり。第三は是白虎山の孔太公が家なり。此孔太公は二人の男子あり、嫡男が名は毛頭星孔明、二男の名は獨火星孔亮と申す。此兄弟の者は前年當地に至りて某に相見えり。此三箇の内、何れの方に到つて好からんと、躊躇未だ決せざるなり。朱同が云く、此内何方へ成りとも疾く心を決し、今晩打立ち給へ、必ず延引に及んで自ら誤ち給ふことなかれ。宋江が云く、某敎に

隨がひ、今宵早速落ち行くべし。只官司のことは偏に都頭を賴み申さんづる間、宜しく發落給ふべし。若し賄賂の爲なんどに、金銀緞帛等の物使用に候はゞ、忌諱なく父太公にこれを索め給へ。朱同が云く、これらのことは總て某が身に干つて辨し候はん。必らず心機を費し給ふべからず。只一刻も早く旅粧を完へ發足し給へ。宋江が云く、晩に至つて急に打ち立ち候はん。都頭益〻康健にして、公役を務め給へ。若し緣絶ずんば再會の期をこそ相歡び申さんとて、遂に別れを告げて、只管留戀げに朱同を顧みて再び警の內へぞ藏れける。朱同は此時彼板を取つて警の口に蓋し、猶又卓を以て其上を壓へ、遂に館の門を開いて忙はしく奔出で、乃ち雷都頭に向つて云ひけるは、家內遍く搜し盡すといへども、宋江は見えず。只宜しく宋太公を引いて縣裡に回るべし。雷橫此言を聞いて暗に思ひけるは、朱公は原來宋江と交はり尤厚し。いかんぞ反つて太公を捉へんと云ふや。此言故意顚倒して云ふに疑ひなし。彼もし再び此言を云はゞ、我宜く太公を饒して、一つの情を顯すべしと圖り、乃ち朱同と共に兵共を呼集め、盡く草堂に進み入らしむ。宋太公此時急に酒食を設けて、諸の人を欵待ければ、朱同が云く、必ず酒食を備へ給ふことなかれ、某急に宋清を請うて共に縣裡に回るべし。雷橫が云く、宋清は何ゆゑ見え給はぬや。太公がいはく、某事を命じて街に遣はしぬ。彼は今日の騷動を微塵も知り申すまじ。扨宋江がことは某老早赶逐したる者なれば、我爲には他人よりも猶疎し。那厮がことに於ては、某が關るべきことにあらず。已に前官より賜ひたる公文にも、向後宋江が身の上のことに於ては、善となく惡となく、都て某が管ふまじき事共を分明に書載あり。朱同が云く、太公の言定めて詐は有るまじけれ共、只其文書ばかりにて、親子にあらずと云ふ分說立がたし。巴不得太公宋清兩人を請うて、縣裡に同往致すべし。若し然らずんば、某知縣に見えて述ん詞なし。雷橫これを聞いて先づ云ひけるは、朱都頭須く我いふ所を聞き給へ、宋押司此度罪を犯されたることは、必定脫がたきこと有りてこそ、彼婆惜を殺されし物ならん。され共未だ死罪に決定したるにもあらず、太公は又已に親子の緣を斷給ひ、前官の印の押れたる公文を所持ある上は、分說又立たざるにもあらず。我輩も平日宋押司と交り厚し、何かの事を顧みて、權く且太公を宥しまゐらせん。朱同是を聞いて想ひけるは、我は是雷橫が疑はんことを恐れてこそ、故意太公を縣裡に同往せんとは云ひつるに、雷橫反つて此のごとき懇の言を云ふは、十分の幸ひなりと悅び、乃ち雷橫に答へて云ひけるは、雷都頭既に斯の如く懇情を施し給はんとならば、左も右も足下の良議に從ふべし。宋太公此一言を聞いて大いに悅び、深く兩都頭を謝し、又酒食を設けて、二人の都頭及び三四十人の兵共まで、別して慇懃に欵待、乃ち二錠各二十兩和の二百目の銀を取出して兩都頭に送りしか共、兩都頭萬千是を辭し受けざれば、宋太公乃ち其銀を分ち、諸〻の兵共に與へけり。兩都頭は執憑の公文を乞出して、これを一紙に寫し、遂に宋太公に別れ、再び縣裡へ歸り、乃ち知縣に見えことを詐て云ひけるは、某等宋家に至り、家內前後左右遍く兩次まで搜しぬれども、宋江は更に見えず。宋太公は是重病に犯されて、旦

夕の命も危し、宋清は已に前月より、他國に出て未だ回らず。是ゆゑに唯親子斷絶の執憑の公文を寫し來り候。知縣が云く、既にかくのごとくならば、今更急に事を決斷しがたし。唯好近州隣郡に觸て宋江を捕へしむべしとて、卽日文書を以て所々方々に一々觸をぞなしにけり。扨縣裡には原來宋江と親しき人々多かりけるゆゑ、盡く相湊りて再三再四張三に諫言を加へ、必ず閻老婆が爲に挑唆をなすことなかれと示しければ、張三諸人の諫言に背きがたく、遂に諫に從ひ漸々怒りを休にけり。朱同自ら若干の錢財を湊めて、彼閻媽に與へて、必ず州裡に往きて訴ふることなかれと宥める處に、老婆も頃日米錢に缺用て酷だ燃眉し時なりしかば、錢財を得て心中に喜び、容易傾承をなしける。知縣原來宋江を助けん存念深かりし處に、彼老媽遂に朱同が惠みを蒙り諫言を容ひ、是より縣裡に至つて哭訴ふることもあらざりしかば、知縣大いにこれを喜び、則ち彼唐牛兒に罪を干け、輕々と二十棒を策ちて城外五百里外に追放せり。彼宋江は原百姓の家なるに、いかんぞ能く家内に大いなる窖を設けぬるやと尋ぬるに、宋の徽宗皇帝の時分には、官をなすは易くして吏をなすは難し。其仔細は官をなす徒は、盡く皆奸佞の大臣等媚諂賄賂を献りて官をなすに易し。宋江がごとき吏となつて押司の職を勤むる徒は都て己が器量を以て其職に就故に吏をなすは難し。其比は別して諸州諸郡の官府權威甚だ猛かりしゆゑ、凡そ押司以下の役人等縱ひ小き過たりとも、萬一これを犯す時は若し知府知縣の心に合はざる者なれば、間其罪にあらずして、其罰を被ることあり。所以に宋江これを恐れて預じめ彼窖を設けて、不時の禍を脫れんと圖りぬ。又父母兄弟まで連累を蒙らしめんことを恐れ、乃ち數年以前に、宋太公を官府に遣し、詐りて宋江が不孝と訟へしめ、親子の緣を斷り則ち彼執憑の公文を乞受け置きし遠き慮なり。宋の時は諸州諸縣に於て、預じめかく暗なる生路を准備置く者極めて多かりしとかや。此日宋江は又窖を出て、父太公弟宋清と共に商議して云ひけるは、我向に若し朱都頭が救ひを蒙らずんば、終に縲絏の恥を請けんに、誠に朱都頭が厚恩骨髓に徹りて感激せり。我今速に宋清と共に里を去て難を免るべし。天若し憫みを垂給はゞ、必ず寬恩大赦の時節に遇うて罪を免され、立歸つて再び親子對面を遂げ、家を安んじ業を樂しむべし。願はくは恩父我爲に、金銀を朱都頭が家に送て、乃ち彼を賴み給へ。又上下の役人等が方へ賄賂をなさしめ、又は金銀米錢を閻老婆が方へ惠み給ひて、彼が再三官府に訟へんことを休めしめ給へ。太公が云く、必ず這些ことを念頭に懸ることなかれ、我自ら是を辨ぜん。汝は唯弟と俱に道中恙なく急に落行べし。若し何れの所にても、身を安んじて早く書簡を寄せて我憂を慰よ。宋江等兄弟兩人謹で父の命を蒙り、乃ち旅粧を調へて、諸事全たかりしかば、父子三人餞別留別の席を交へて酒を酌み、漸四更の鐘も四方に響きて人音稀なりしかば、宋江宋清已に旅の打扮を催しぬ。宋江は綠毯の笠を戴き、身に皂緞の衣を着し、腰に紫線の縧を繫、足には八塔の鞋を穿ぬ。宋清は又家人の模樣に出立、背脊に包裹を背すでに宋江宋清共に、草堂に至つて父太公を拜していはく、恩父自ら心を慰め給ひて、必ず某らがことを以

て尊慮を患し給ふべからず。太公が云く、汝二人が行向は青山萬里の長途なれば、必ずしも自ら身意を惱すことなかれ。父子三人及び家人に至る迄、こと〴〵く皆涙を洒がざるはなかりけり。古語に、悲は生別離より悲きはなしと云ひしも、斯時のことならめ。宋江等兄弟二人は、遂に父太公に別れて住慣ぬる祖先の遺宅を踏離れ、故郷の雲を腦後に顧て、客路の霧を眼前に望み、頻りに哀をぞ催しけり。宋江先づ宋清に商議して云ひけるは、我輩今何れの方へ投べきや。宋清が云く、某聞く宋州横海郡の柴大官人は則ち是大周皇帝の嫡孫として、譽れ高き貴人なり。況んや此の人義を重んじ財を輕んじ、尤よく流人等を救ひ給ふとなり。昔の孟嘗君は好んで人を救ひしとなれども、又多く柴大官人に賽ることあるまじ。我いまだ對面はせざれども、只よろしく彼人の家を賴むべし。宋江が云く、我も老早彼人のことを心中に測りかくこそ想ひぬ。彼人と我と常に書簡の往來は疎からざれ共、緣熟せざるにや、未だ對面を遂げず。幸ひに此度は彼人を訪ふべしとて、兄弟遂に商議を決し、直ちに滄州を望んで進發す。

横海郡に柴進客を留む

偖も宋江兄弟は、夜は泊り曉れば行き、山に登り水を渉り城下を經て村中を過り、兩人疲れを忍びて急ぎしかば、不日に滄州の界に至りける。先づ郷老に問うて、柴大官人の住所地名を聞き直ちに其門前に至り、急に家人に向つて問ひけるは、柴大官人は貴宅に居給ふや。家人答へて、主人は此兩日は私用にて別宅に逗留して居らる。宋江が云く、別宅は是より幾多の路ありや。家人是を聞いて、先づ貴客の姓名はいかん。宋江が云く、我は是鄆城縣の宋江なり。家人又云く、及時雨宋押司にはあらずや。云く是なり。曰く主人常に押司の大名を稱すること年月深し。今日偶來臨を惠み給ふに、主人在宅せざること殘念の至りなり。然れ共某押司を導いて、尊歩を移させ申さんとて、二客を引いて約莫三時許りして彼に至り、家人則ち宋江兄弟に對して、貴客暫らく亭の上に待ち給へ。某主人に告げんと遂に門内に馳入ける。兄弟亭に登つて俟つ處に、少頃彼柴大官人五六輩の家人を從へ、自ら忙しく走り出て亭に上り、乃ち宋江を見て地上に拜伏して云ひけるは、某久しく押司を仰ぎ慕ふに、今日何の幸ひにや、駕を枉給ひ、某渴想の懷を安んじ慰め給ふ事、誠に某一生の悅び何ぞ是にしかん。宋江これを聞いて、同く地上に跪づきて答へけるは、某匹夫今日敢て貴宅に伺候し、反つて尊顏を冒しぬ。柴進急に宋江を扶け起して云ひけるは、昨夜燈火の報あり、今朝喜鵲の噪ありけるに、果して押司の光臨を蒙りぬ。某平生押司を慕ひ奉つるの誠、遂に天に通じて今良緣を賜ひ想はず嚴威を覩奉ること、某襁褓の内を出て善惡の別ちを辨てより以來、今日のごとき幸ひは夢にだに曾てこれを得ざるなり。宋江料らずも今柴進が斯く慇懃なる動靜を見て大いに悅び、則ち舍弟宋清を呼んで柴進に見えしむ。各禮畢りしかば、柴進左右に命じて宋江が行李を後堂の西軒の下に搬運ばしめて、則此處に歇處を設けゝり。柴進宋江が手を携へて廳上に至り、賓主席を分つて、座已に定まりければ、

柴進宋江に問うて云く、押司は鄆城縣に居給ひて、公事繁多なると聞きぬるに、いかんぞ尊暇を得給ひて、此間に駕を惠み給ひしぞ。宋江答へていはく、某大官人の大名を聞くこと、猶雷の耳に轟がごとし。況んや數度書簡を惠まるといへ共、たゞ恨らくは出ては則ち公役に逼り、入ては則ち私務に纏はれ、曾て寸暇あらざりしゆゑ、貴宅を訪ふことも能はざりけり。然るに某今日大事を惹出し、四海廣しといへ共身を倚に處なし。千難萬苦の中に於て、大官人は原來孟嘗君が志ありと、乃ち擅に來つて餘蔭を蒙らんことを願ふのみ。柴進が云く、押司宜しく尊慮を安んじ給へ。遮莫十惡の大罪を犯し給ひぬるも、既に我館に入り給ふ上は、少しも怕れ給ふことあらじ。自から誇つていふには、あらざれ共、當世の官軍等誰か敢て某を讓らざらんや。宋江これを聞いて大いに悅び、彼閻婆惜を殺たること一々詳かに語りければ、柴進呵々と大いに笑つていはく、這等の小事何ぞ道に足らん。縱ひ朝廷の大臣を殺し府庫の財物を奪ひ給ふとも、某又よく押司を藏さんに、豈怕るゝ所あらんやとて、終に宋江兄弟を請うて沐浴なさしめ、又新らしき衣服を送つて舊衣服を更めしめ、再び後堂に移りて酒宴を催し、柴進再三宋江を請うて上座に就しめ、宋清を請うて其次に就かしめ、己は則ち主座に就。三人座定まつて、許多の家人酒を篩肴を添て、左右に侍り奔走す。柴進自ら盞を執て兄弟を勸めて云く、必ず心を寬げ酒を酌み給へ。宋江深く謝して盃を擧げ、酒も數巡に及びしかば、三人各胸中のことを語つて少しも隔意なし。此時天色已に晩ければ、燈燭許多設けて座外を照しぬ。宋江柴進に對して云く、某深く大官人の厚款を感じ、自ら强て酒酩酊に及べり。願くは盃を收め給へ。柴進が云く、今暫くの夜飲を娛み給へとて、乃ち宴を換盃を更めて、酒又數巡に至りしかば、夜も初更に近づいて漸鐘の聲耳に轟きぬ。此時宋江起つて淨手に行かんとす。柴進忙しく、一人の家僕に燈を提させて、東の廊下の盡頭なる所に導せ、家僕客を引いて前面の廊を繞り出て行きける所に、宋江已に七八分の醉あつて、脚步稍穩ならず。斯かる處に一人の大漢子瘧を患で、廊下の邊にありけるが、柄附の火盆に火を多く設けて囘烘居ぬ。此時宋江此人を看しかども、火盆に柄あることを知らずして、不圖かの火盆の柄を踏ければ、忽ち掀翻て、其火盡く彼の大漢子が面上に飛散けり。此時彼の大漢子大きに駭き、猛然一身に汗を出し、瘧の抖は止しが、是より其病竟に治しぬ。已にして彼大漢子大いに怒り、急に宋江が衣の襟を揪へて、吼罵つて云ひけるは、汝何奴なれば、敢て來つて我を弄戲る。宋江も火盆を踏翻したるを見て、同じく大いに駭き、更に其分說べんじがたき所に、彼燈を提たる家人も、忙しく彼漢子に向ひ、此客は是我主人のため第一の上賓なり。今火盆を踏翻し給ひしは、本火盆に柄あることを知り給はざる故なれば、必ず此客にたいして無禮をなし給ふな。彼漢子が云く汝一向彼を上賓と云ふ。我來りし初は、家內擧つて我を上賓と稱しぬ。然るに柴大官人頃日我を別してうとんせり。諺にも、人千日好ことなく、花百日紅なることなしと云ひしも、げに最理なり。我今此者に面を燒れ豈よくこれを忍びんやとて、已に拳を擧げて宋江を打たんとせしかば、彼家人も

急にこれを勸解として稍鬧しかりけるに、忽ち一個の人兩三人に燈籠を提させ、飛ぶがごとくに馳來る、是則ち柴進なり。宋江にたいして云ひけるは、押司何ゆゑ此所に在つて鬧給ふや。彼家人先づ宋江が火盆を踏翻したる次第をかたれば、柴進聞いてから〳〵と打咲ひ、彼大漢子にたいして云ひけるは、汝此名高き押司はいまだ識認ざりけるや。彼大漢子が云く、天下に押司たる者其多きこと斗を以て量ん。其なかに我國四裔つゞうら〳〵の邊境邊地迄、誰あつて名を知らざる者なきは鄆城縣の押司宋公明のことなり。此者は何國の押司たりとも、いかんぞ宋押司の萬が一にも及ばん。柴進益咲て汝果して宋押司を識認れるや。彼大漢子が云く、未だ其面は識らざれども、世上の人彼を尊で及時雨と稱す。このゆゑに我其名をきくこと久し。況んや是宋公明は義を重んじ財を輕んじ、專ら人の危きを扶け、人の困らるゝをすくひ給ふ。是乃ち天下にかくれなき英雄なり。此人を除てべつに當世なだかき押司あることをしらず。柴進が云く、汝なにの好處を以て宋押司を天下の英雄とはするや。彼漢子が云く、宋押司の好所豈すべてこれをかたりつくすことを得ん。宋公明は且是、仁をなすに首尾あり、義をなすに始終あり。誠に當世第一の君子なり。我今病の瘥るを待ちて訪ひ行かんと欲す。柴進が云く汝今宋押司に見えたく思ふや。彼漢子が云く、まみえたきことは最方寸に逼れり。柴進此時宋公明を指さして、彼漢子に告げて云く、遠くは則ち十萬八千里、近くは則ち眼前にあり。彼及時雨宋公明は便此押司のことなり。彼大漢子が云く、實に是便ち宋公明なるや、我いまだ猶信じがたし。

武松柴進が宅ゐて
宋江小肇て面會ス

宋江が云く、某乃ち宋公明なり。足下何ゆゑ某がことを斯吹噓し給ふや。彼大漢子是を聞いて、乃ち睛を定めて、良久しく宋江を打望んで居たりけるが、忽ち地上に拜伏して云ひけるは、今日いかなる吉日にて押司を拜し奉るや、却つて夢かと疑れぬ。宋公が云く、某何の幸ひに斯足下の愛敬を被るぞや。彼大漢子が云く、某先に押司を識認ずして多く無禮をなしぬ。願はくは廣く是を恕し給へとて、再び地に跪づく。宋江忙はしく扶起して云く、足下の高姓大名はいかん。柴進が云く、此人は是清河縣の人なり。姓は武名は松と號す。某が家に逗留せらるゝこと、凡そ一年ばかりなり。宋江が云く、世上の人皆武松と云ふ名を傳へ稱するを聞き及べり。想はず今日此處にて相遇ふこと、幸ひ尤甚し。柴進今日偶然して豪傑相聚ること、是等閑のことにあらず。共に席を同じうして、互に心事を語るべし。宋江是を聞いて大いに悅び、自ら武松が手を携へて終に再び後堂にぞ至りける。此時宋江舍弟宋清を呼んで武松に遇しめ、柴進又自ら武松を邀て座に就かしめ、宋江も又急に武松を延て上座を讓りければ、武松大いに辭し、自ら下つて第三位の席に座しける。宋江燈下に在つて、武松が形を窺ひみるに、身軀凛々として相貌堂々たり。兩眼の光は星のごとく、雙眉の濃ことは刷に似たり。耳太く鬚長く、其風は又萬夫も敵すべからざる勢ひあり。宋江是を見て、心中甚だ悅び、則ち武松に問うて云ひけるは、足下は又何等のこと有つて、久しくこゝに在りや。武松が云く、某向に清河縣に於て、酒の後不圖彼所の機密と相爭ひ、乃ち怒に乘じて只一拳を以て打ちければ、彼れ忽ち眼を

吃して地上に倒れぬ。某只これを見て、彼已に死したりと思ひ、遂に彼所を逃出て直ちに此邊に至り、多く柴大官人の大恩を蒙り、はや一年あまり此館に滯留し、其後又世上の人の傳へ云ふを聞くに、彼機密は其時幸ひに隣家の者共藥を灌ぎ、厚く介抱を蒙むり再び甦りしとなり。故に某今故郷に歸り兄を尋ねんと欲する所、想はず瘧を病で回ること能はず、心甚だ鬱悶に逼りしに、今彼廊下にて押司不圖火盆を踏飜し給ふを見て大いに駭き、忽ち冷汗多く出けるが、果して這疾全く癒ることを得たり。是則ち押司の過ちにて、却つて我救ひを蒙れり。宋江聞き終りて大きに喜び、自ら又盃を執て相勸め、其夜三更に至つて宴遂に罷りければ、宋江則ち武松を西軒の下に留め、床を同じうして歇みけり。翌日柴進又羊を殺し牛を宰しめ、美々しく酒宴を設け愛待けり。毎日かくのごとくして、幾日も過しければ、宋江自ら若干の銀を武松に與へて、衣服を調へしめんとせしかば、柴進これを聞いて再三再四其銀を宋江に還し、早速一櫃の緞子花紬綸紗等を取出し、家内の針工に命じて、客三人の衣服を縫しめけり。頃日柴進が武松を十分愛せざるは、いかなれば原武松が初め來りし時は、殊更重く欵待けれ共、其後は武松慢に酒を飲んで動不動醉狂をなし、擅に拳を下して家人共を打ちける故、一家中の從僕等盡く武松を嫌ひ、毎日柴進が前に出て、詳かに武松が不行跡を告げしかば、柴進これを聞いて殆んど悅びず、漸〳〵其管待慢りぬ。然れ共此度宋江甚だ武松を愛し、朝夕一所に在つて酒を酌み憂を語り、心情ともに相合ひければ、武松甚だこれを感じ、其後は曾て撒酒風することもなく、只慇懃に宋江が左右に侍り從ふ。此時柴進を初めとし、諸の家人共武松が性を改め、心の誠を守るを見て、各奇異の思ひを催しけり。既にして半月餘り過しけるが、武松は故園の情切にして、急に清河縣に回り兄を訪らはんと欲しける處に、柴進宋江再應是を留めければ、武松が云く、某故郷を去てより以來久しく兄が消息を聞かず。是故に一回歸りて兄を探望たく思ふこと頻りなり。願くは明らかに是を察し給へ。宋江が云く、足下實にかくのごとくば最留がたし、異日もし暇を得給はゞ再び來つて參會せらるべし。武松聞いて深く感謝す。柴進又若干の金銀を武松に與へ路の費に當しめければ、武松厚謝していはく、誠に大官人の惠を蒙ること重疊にして、心に銘じ骨に鏤ことのみなり。其夜酒宴を設け、宋江兄弟と倶に武松に酒を勸め別れを惜みけり。翌日武松旅裝を扮へ、已に宋江柴進に別れを告げければ、柴進又起身を祝して飲酌を催し、乃ち一領の紅綢の襖子を送つて、武松に着せしむ。武松是を謝し畢て、遂に別れ出ければ、柴進、宋江、宋清も共に門外に出て相送る。此時宋江一包の銀を武松に與へて云ひけるは、是乏少の薄儀たれども、聊か以て餞別の誠を表す、只宜しくこれを笑納せらるべし。武松これを見て、再三大に感謝して拜收せり。宋江則ち柴進に對して云ひけるは、我は今武松を送つて路口に出づべきに、大官人は宜しく館に在つて待ち給へ、少刻回り申さんとて、宋江兄弟遂に五六里送り到りしかば、武松が云く、願はくは押司は是より回り給へ。柴大官人嘸待久しく思ひ給ふらん。宋江が云く、猶幾ばくの路を送りて別るべしとて、再び閑話をなしつゝ、路を行き

ければ、覺ず又二三里計馳過ぎぬ。武松此時依々戀々として、宋江が手を携て云ひけるは、押司只願遠くおくり給ふことなかれ。諺にも君を送ること千里、終に須く一別すべしと、古き詞あり、只宜しく此處に於て別れ申べし。宋江是を聞いて、乃ち對面の村を指さして云く、彼所に幸ひ酒店有り、我倘彼酒店まで送り、宜しく汝に勸めて更に三杯の酒を盡すべしとて、三人又手を携て遂に酒店に至り、各〻席を求めて座しければ、酒肆の厠僕まづ茶を捧げぬれば、宋清先づ僕に命じて云ひけるは、汝速かに酒肉を設け來れ。家僕これを聞いて、早速酒肴豐に具へ、乃ち三人を請うて酒席に就かしめ、宋江等三人酒席に移り、已に飲酒を催して各々陽關の感に勝ざりぬ。漸々日も黄昏に至りしかば、武松が云く、天色已に晩けるに、押司愈〻某を弃たまはずんば、幸ひ今某が八拜を請け給ひて義を結び盟を誓ひ、乃ち兄弟の約を定めて此處より快く別れ給ふべし。宋江是を聞いて大いに悅び、卽時に兄弟の契を結んで、武松が八拜を受けにけり。宋江又一錠十兩和の百目の朱提を武松に送る。武松再三辭して云ひけるは、長兄も同じく旅泊の事なれば、自ら金銀を用ひ給はん所多からんに、某敢て是を拜受せんや。宋江が云く、汝必ず是等のことを想ひ慮つて、此朱提を辭することなかれ、若し果して是を辭することあらば、我決して兄弟の盟を約ぶまじ。武松今は辭することを能はず、拜謝して其銀を受けにけり。宋清再び酒肆の厠に問うて、乃ち酒肉の價を償ひ、三人ひとしく酒肆の門外に出しかば、武松只願涙を洒て宋江兄弟に別れ、頓て故鄕の方へと赴きけり。宋江は宋清と酒店の門前に立停り、

戀々として遙に武松が形の見えざるまで打望み、兄弟再び身を回して柴進が館に急ぎしかば、はや五六里至る所に、柴大官人は兩人の家僕に二匹の馬を牽せ、自らも馬に乘りて、直ちに此處に馳て出迎ふ。宋氏兄弟是を見て大いに悅び、各轡を並べて打乘、柴大官人の館に歸りけり。又武松は各〻に立別れて後、其後三十里和の五里を馳て旅宿に歇り、翌日又早天に旅店を打ち立ち、路すがら心中に想ひけるは、天下の人宋公明のよく人を救ふを以て、及時雨と稱しけるよし、寔に其稱するごとし。我幸ひに這樣の大丈夫と、兄弟の盟を結しは、末賴母きことなりと、歡ぶこと限りなし。已に十餘日を馳て陽谷縣の地に到りしは、午の刻ばかりなるが、此所より縣裡へは尙遠かりしかば、先づ酒食を求めて飢渴を充んと欲ひ、則ち酒肆を尋ねて徘徊しける處に、對面の方に一軒の酒店有つて、門前に一根の簾を立つ。五つの大文字あり、三碗不レ過レ岡と五字なりけり。

武松此酒肆に入つて大酒し、行先途中猛虎に遇て勇力を顯し、吼虎と鬪ひ竟に打殺すより、兄武太郎が妻、密夫と合體し、武太郎を毒殺するゆゑ、嫂ならびに事に關る者、悉く害し弃、其外武松が强勇種々、此次三編目の内に委しく出づ。

三編卷之一

景陽岡にして武松虎を打

武松は横海郡の柴大官人の館を辭し、故郷に回り兄武大郎を訪んとて道を急ぎ、陽谷縣の界迄來り、酒肆を尋ね酒食を用ひんとする處に、大文字の旗を立たる酒肆を見かけ忙しく馳入つて呼ばはつて云ひけるは、主早く酒を昏で我に賣れ。主是を聞き、早速酒を具て武松が前に拿來る。武松急に杯を執て、はや一盃を飲乾、則ち主に向つて云ひけるは、此酒甚だ氣力有つて海量の好むべき味なり。別に佳肴あらば與へんや。主が云く、此處には原來珍しき肴なし。唯一色牛肉のみこれあり、これを用ひ給はんや。武松が云く、夫は極て好肴ぞ、疾拿來れ。主聞いて二斤の牛肉を切りて大盤に盛て捧來る。武松これを肴にして、再び一盞を酌み乾して云ひけるは、此酒極めて味狠き美酒なりとて、又一碗を酌み乾し、酒是に盡たれども、主重ねて酒を篩ざりければ、武松大きに呼ばはつて云ひけるは、僅に唯三碗の酒を與へ、再び酒を添ざるはいかんぞや。早く來つて酒を篩。主が云く、牛肉を用ひ給はゞ尙一向そへ來り申さん。武松が云く、我先づ酒を用ひん。早く酒を添よ。主が云く、牛肉を用ひ給はんとならば、早速これを添へん。酒のことは再び添へ申まじ。武松が云く、我價をかくこと有るまじきに、何故再び酒を賣らざるぞ。主が云貴客は何ぞ門前に立て置きたるを見給はざるや。分明に三碗不レ過レ岡の五大字を揭たり。武松が云く我も讀たれども、いかなるいはれをしらず。主が云く、我此酒は村酒といへども、却つて老酒の滋味あり。是故によく人を醉しむ。凡そ旅客此酒を三わん飲むときは、忽ち大いに醉て、此まへの岡を過ること能はず。是によつて十人に七八人は唯好一二碗を飲んで三碗を飲む人は極めて少なり。若し三碗の外に飲む時は、立處に大に爛醉す。岡を過らんはさて置き、此門外に於て醉倒るゝ者多し。是則ち三碗にして岡を過ぎずと云ふことなり。武松冷笑て云ひけるは、唯かくのごとき謂のみならば、我是を信じがたし。我今已に三碗をのみけれども、かつて醉はざるはいかにぞや。主が云く、我此酒は透瓶香共、又は出門倒とも名づく。本此酒じ味にきありといへ共、又かくべつに香ふゆゑ、初め口に入るとき極めて飲易し。然れども遂に飲み了つて、門を出づるときは、則ちゑひ倒るゝを以て出門倒と名づく。其香ひ甚しきを以て透瓶香と名づくるなり。武松が云く、汝かくのごとき妄りの言を云はんより、再三三碗を篩來れ。我是を飲んで汝に見せん。主武松が少しも醉はざるを看て、又三碗を與ふ。武松飲んで大いに賞美云ひけるは、此酒尤よし。汝一向に篩來つて與へよ。主が云く、貴客必らず此酒を過し給ふことなかれ。若しゑひ倒れ給ひなば、是を療治せん藥なし。武松が云く、汝何故かくたはことを云ふや。汝もし蒙汗くさを用ゆることあらば、我まさにたふるゝことも有るべし。然れ共我鼻有つて、よくこれをかぎ出ださん。何ぞべつに怕るゝ

ことかあらんや。宜しくつぎ來れ。主今は止むことを得ず、又一れんに三わんを與ふ。武松又是を飲み畢つて、再び牛肉を食し、猶一向主を呼んでつがしめければ、主又三碗をつぎぬ。武松これをひといきにのみほし、口中益々渇きしかば、彌〻飲まんことを思ひ、且懐中より銀を取出し、主に與へて云ひけるは、酒肉の價此銀にて足るべきや。主が云く、此尚多く餘りあり。貼錢を與へ申さんや。武松が云くつりせん更に望まず。唯宜しく酒を與へよ。主が云く、貴客彌酒を望み給はんとならば、盡數五六碗の酒を與へんが、恐らくは是を飲み給はんこと難かるべし。武松が云く、盡數五六わんの酒あらば、一てきも剩さずつぎ來り與へよ。我是をのんで見すべし。主が云く、貴客のごとき大をとこ若し醉ひ倒れ給はゞ、唯五六人の力にては扶け起さんこと難かるべし。武松呵々と嗤ひ、倘我汝に扶け起さるゝことあらば、誓て大丈夫をなすまじ。主猶これを信せずとて酒を出さゞりしかば、武松大いに焦燥て、雷のごとく呼はつて云けるは、我汝が酒を白々飲にあらず、何ぞ再三我怒を惹出すや。若し果して我意に背くことあらば、此の店を微塵に踏碎して、立他に後悔をなさしめん。主これを聞いて、武松が狂ひ出さんことを恐れ、則ち又六碗の酒を篩與ふ。彼又時をも移さず盡く飲果して、忽ち身を起して云く、我かつて一點も醉す、向後彼籤を門前に立つることなかれ。三碗にして岡を過らずとは、實に可笑ことなりとて、飛ぶがごとくに跑出す。此時に主相續て走り出で、大いに呼はつて云ひけるは、客まさに何れの方に往き給ふぞや。武松足を踏住て云く、我汝に酒の償は已に濟したり。又何事有つて我を呼ぶや。主が云く、我は是一片の好意を以てせん。貴客先づ我家に回りて官司より掛置たる榜を見給へ。武松が云く、官司の榜を見て何の益かあらん。主が云く、前面の景陽岡には今一つの猛虎あり。晩に及べば必らず出でて人を害す。頃日已に二三十人の豪傑を咬殺せしゆゑ、官司專ら獵戸に命じて彼虎を捕ふといへども、未だ是を得ず。此邊の人家には都て官司より榜を掲給ひ、往來の旅客に虎あることを知らしめ給ひ、唯是巳午未三時の間のみ過る。其餘の時刻には岡を過ることなし。況んや單身旅する人は白日にも過らず。唯大勢を待合せ、一同に岡を過るなり。今は是未の末申の初めの時分なれば、必ず岡を過り給ふことなかれ。若し萬一我が言を容ひ給はずんば、必ず一命を傷れ給はん。今宵は先づ此里に歇り給ひて、猶明日同行を待つて二三十人一所に岡を過り給へ。武松是を聞いて冷笑ひ、我は是清河縣の者にして、此景陽岡を過ること凡そ二十餘度に及べども、曾て虎あることをしらず。汝必ず詐の言を云うて、我を嚇すことなかれ。縱ひ虎ありとも我又是を怕じ。汝無益のことを云はんより、速かに立歸れ。主が云く、我は是好意を以て貴客を救はんと欲す。汝もし是を信じ給はずんば、且我家に來りて榜を看給へ。武松が云く、我曾て虎を恐れず。汝我を留んとするは、必ず半夜に至つて我性命を害し乃ち此行李等を取らんと圖るらめ。主が云く、我は是一片の善意を以て虎有ることを告げけるに、反つて是を惡意とし給ふは、大いに不禮なり。此上は兎も角も、客の心に任せ給へとて遂に己が家に回りけり。武松は此時行李を拴たる棒を取つて手に提

直ちに景陽岡を望んで馳上り、漸々四五里ばかり過ぎて、岡の下に立ちし處に、此邊に一つの大樹有りけるが、其樹の皮を刻て、白き處に兩行の文字あり。武松頗幾許の文字を識りぬ。急に首を擡て是を看るに、其文に曰く、近因二景陽岡大蟲傷レ人、但有二過往客商一、可下於二巳午未三個時辰一結レ夥成レ隊上過レ岡、勿二請自悞一とぞ書き付けたり。武松これを看了て呵々と打笑ひ、乃ち心中に想ひけるは、是都て彼酒店の主が詐の計ならん。かく書誌して往來の旅人を嚇し、すなはち己が家に一宿なさしめて、必ず事を圖るならん。よし遮莫我此棒だに手に提ば、岡の上に何の恐れかあらんとて、直ちに進んで岡に上り來る。此時すでに申の刻なりしかば、日も漸々西山に傾ぬ。武松は酒興に乘じてひたすら岡を望んで上り來り、纔半里ばかり路を馳て、傍に一つの山神の廟ある所に至りぬ。武松卽ち廟門の上をみるに、一張の榜に官府の印あるを貼ぬ。其榜の文に云く、陽谷縣爲下這景陽岡上新有二一隻大蟲一、近來傷二害人命一、見今杖二限各鄉里正并獵戶等一打捕、未レ獲、如有二過往客商害性命一不レ便、各宜知悉と書記しぬ。武松此官府の印ある榜を見て、まさに自ら岡の上に虎あることを全く信じ、幾乎再び酒店に回らんと欲して、遂に身を回らしけるが、忽ち心中に想ひけるは、我若し今回ること有らば必定彼等に笑はれん。是大丈夫の恥べき所、決して歸り難し。只此棒だに持たば縱ひ鐵石の虎なりとも、終によく微塵に打碎んものをと、又勇を奮て只願足に信せ馳上る。此時又頻りに酒の醉出上つて殆ど熱し覺しかば、則ち笠を脊梁に負、棒を小脇に挾で岡の上に馳上りし處に、日もはや山の端に沈で忽ち暗し。時は十月の天氣にて日短く夜長うして尤も晩るに易し。自ら獨言に呼ばはり云ひけるは、いかんぞ虎あらん。人みな聞き怕して岡に上らず。我何ぞ是を怖んやとて、又幾歩を徐しかば、醉はいやましに發し、只踉々蹌々と、一歩は高く一歩は低く、天を下に見地を上に見て漸〻樹林の内に進み入りぬ。此所幸ひに一つの大いなる青石ありければ、頓て棒を傍に建置乃ち身を飜して石の上に打倒れ、只快く一睡せんと思ひし處に、忽ち一陣の恠風起り沙を走せ石を飛ばしむ。諺にも龍現て雲从ひ、虎出づれば風從ふと云ひけるに、今果して風の生ずるは虎の出づべき驗なり。此怪風已に過し處、樹林の背後大いに響く聲有つて、吊睛白額の大虎狂ひ吼て跳來る。武松是を見て、忽ち石の上より跳下り、かの棒を搶取石に傍て控へたり。かの虎、早く武松を白眼望んで大いに馳り吼て跳蒐る。武松原來眼明かに手快き勇夫なれば、虎の來るを見て急に身を閃し棒を劈して虎の背後に繞り出づ。虎又爪を豎腰を紐武松に飛びかゝる。武松再び閃りと避て傍に跳開く。彼虎兩ど迄武松に避け開かれ大いに恚狂うて霹靂の如く吼り進みければ、山をも岡をも震ひ崩すかと疑はる。武松又身を回して左の方に跳搬尙眉間に棒をかざし、暗に畜生脚を覩透し方に好武藝の秘術を盡さんと相伺ふ。凡そ虎の人を拿には只一搬の内に其人をうるに、已に今三度至るまで武松に躱れ閃されしかば、虎の勢ひまづ其半を沒せり。然れ共彼虎は尋常の虎にあらざる故、再び大に怒り吼つて電の如く跳

かかる。武松此時其圖をみすまし、棒を双手に握つて平生の勇力をつくして打けるに、忽ち大にひゞくこゑあつて傍の松の木に打著、枝をつらねはをたいして二つに打折りぬ。彼虎も又原來眼明かにして武松が打つてかゝるを見て急に躱れぬる故、其棒の餘つひに松の樹に著しなり。武松慌て是をみるに、其棒も又半より打折りたり。武松猶少も怯ず棒の末を手に拿牙をかみ眼を瞋し虎を瞧れば、虎是を見て大にたけり再び身を躍して武松に跳かゝる。武松又身を蹇て右の傍に繞出乃ち十歩ばかり引退いて、棒を地に打捐忽ち大手を開いて飛びかゝり、つひに彼虎が双のみゝをしかととらへ押ければ、虎は雷の如く吼て急に掙扎んとせし處に、武松勇力を出し半點も鬆寛ざりしかば、彼虎漸々疲しをみて、武松右の足をあげ虎のみけんを望んで一向にけたりければ、彼虎又忽ち大いに吼て前足のつめを以て頻りに地上を抓、遂に一つの土坑を穿けり。武松是をみて幸ひの事に想ひ、力に信せ虎の嘴を土坑の中に押入れ勢ひに乗じて再三踢事十脚計、彼虎剛力に踢られ眼を眩し今は氣力つきて掙扎事あたはず。武松此時左の手を以て頭をかたく揪へ、右の手にて鐵鎚のごとく拳を握り、縱に平生の力をいだし只顧續打におよそ五七十拳打ければ、虎も今は大に苦み、めはなみゝの裡等より鮮血涌流れ遂に息絶、吼る聲を止め間もなく斃けり。誠に武松平生の神威を振ひ胸中の武藝に仗て、斯猛き大虎を暫時の間に殺しけるは古今稀有の勇夫なり。此時虎死たるを見て手を放ち、再び松の樹の下に行きて彼折棒を拾ひ取り、若し死にきらざる事もやと又二三棒打了り乃ち心中に想ふ樣、我此虎を拖て岡を下り彼酒店に行て今宵一宿せんと、双手を擧虎を拖り起さんとすれども、恰も萬斤の重き如く寸歩も拽がたし。元來有名の大力なれども先より鬪て氣力を使ひ、四肢も疲軟今此死虎を拏起る事難かりしなり。武松又青石の上に坐し熟々思ひけるは、天色已に暗くして四方の光景冷じくぞ覺えける。若し又一つの虎出來ることもあらば、我此疲にいかんぞよく敵し得ん、しかじ先づ明日の沙汰にすべしとて、石を下り林を出で岡を下り再び下を望んで半里ばかり過ぎし所に、枯草の叢し裡より兩匹の大虎飛び出ぬ。武松是を見て大に駭き騷ぐこと限りなけれども、暗に心を取りしづめ、我命竟にこゝに罷るべし。是天命の時節なりとてまたよく窺ひ望みけるに、かの二つの虎忽ち立ち起て人のごとく奔走す。武松是を怪しきことに思ひ睛を定めて克くみるに、是則ち兩個の人虎のかはの衣服を着し、手に五股叉を持ちぬ。かの兩人の者武松を見て大きに駭き、兩人ひとしく聲を發、今こゝに來るは何者ぞや。汝が身邊に機器をたいせず只獨この岡よりくだれる。じつに汝はこれ人にてはよもあらじ。武松が云く、汝兩人は又何者ぞ。かの者共云く、我輩は當地のかり戸なり。武松が云く、汝今こゝに來るに虎のかはを着するはいかなるいはれぞ。彼等が云く、客は未だこのをかのうへに大虎あるをしらざるや。今此景陽岡の上には、夜夜彼虎人を傷ひ、かり戸も已に七八人害せられぬ。往來の旅人を傷害せしは其數をしらず。此故に當縣の知縣相公より公文下つて、當村の里正より我がごとき獵人に命じてこれを捕へしめ給ふ。然れ共かの虎勢ひ猛くして近づくこと能はず。徒に毎夜此邊に在つてかくのごとく相伺ふ。今宵も總て十餘

人の輩こゝに埋伏して、虎の至るを待ちぬ。客岡を下つて來りしゆゑ、却て虎ならんと疑ひしなり。客は實に何等の人なれば、今時分に岡を經て來り給ふ。かつて虎には遇ざりしや。武松が云く、そも我は是清河縣の者にて、名を武松と號す。今岡の上林の邊にて大虎に遇ひぬるゆゑ、我此拳を以て彼虎を打殺しぬ。兩人の者これを聞いて大いに呆れ疑て云ひけるは、いかんぞよくかゝることを得んや、此言信じがたし。武松が云く、汝等もしいよ〳〵信せずんば、我衣の上を見よ。猶依然として血を濺ぬ。兩人が云く、汝は如何して此虎を殺しぬるぞ。武松此時虎を殺したる始終の働、詳かにかたり聞けしかば、兩人半は喜び半は愕然、乃ち彼十餘人の者共を呼び集けるを。武松此等をみるに、各手には鎗、棒、刀、弓矢、鳥銃等を拿て來りぬ。武松則彼兩人の獵戸に問うて云ひけるは、此數人は何ゆゑ岡を上つて虎は打たず、空しくこゝに在るや。兩人が云く、かの大虎極めて猛き故岡に上ること能はず。唯此所に埋伏し、遠矢に射取んとのみ圖りぬ。汝は是いかなる勇力なれば、容易那大虎を殺し給ひしぞ。乃ち彼數輩に虎を殺したるを語通せしを、一人も信ずる者なし。此時武松諸人に對して云ひけるは、汝等これを疑はゞ、今我其所につれ行きこれを見せん。諸人是を聞いて曰く、すでに斯くのごとくば、總て客に從ひ行きて看んとて、早速五六把の炬松を點し、盡く武松に從ひ再び岡を上り來る。武松已に林の邊に至り、彼死虎を指さして諸人に見せしめければ、諸人これを見て、覺ず聲を放て天に歡び地に喜び云ひけるは、かくのごとき猛き大虎を只一人の力を以て打殺せしこと、寔に天神にあらずんば、誰かよくこれをなさんや。其内より一人は先づ此地の里正の家に注進に馳せ行きぬ。又諸人此死虎を緊と縛り、乃ち五六人にこれを擡せて岡を下りける處に、七八十人の鄉夫はや此邊に出迎ふ。乃ち一乘の轎に、武松を請うて乘らしめ、直ぐに里正が館に擡來りしかば、里正は自ら門前に出迎へ、卽ち武松を延て草堂に至りぬ。鄉夫各々かの死虎を舁て、草堂の前に至りけり。斯くて村中惣て三四十の獵人等盡く來つて、武松に相見て問ひけるは、豪傑の高姓大名はいかん、又何國の人にて何國へ行き給ひ、幸ひ此處を過り給ふや。武松が云く、某は是當地の鄰郡清河縣の者にして、姓は武名は松と號す。此度滄州より古鄉に歸らんとして、今日此邊の酒店に立倚り大いに酒を飲みて岡に上りし所に、乃ち此大虎に遇ひ、これを打殺し候とて、始終一々に語りしかば、諸の獵戸共これを聞き、大いに感じて云ひけるは、足下は眞に是世に罕なる豪傑なり。もし此のごとき豪傑にあらずんば、誰か能く彼虎を殺すことを得んやとて、やがて酒食を設けて武松を欵待ぬ。武松は虎を殺して大いに疲しかば、速かに歇んと思ふ處に、里正すでに歇所を設け、請うて歇ましむ。武松悅んで、其夜は里正が館に歇みけり。翌日は里正人を縣裡に馳て、虎を殺したる次第具さに口詞を寫し、知縣相公に訴ふ。此時武松も又草堂の上に出たりしかば、里正ならびに村中の鄉老共、多く食を調へて武松を管待ぬ。武松諸人と坐を列ね、一々對面をなし、頓て盃を擧げて飲酌を始めけり。諸人が云ひけるは、彼虎が害せし人誠に其數をしらず。今日幸ひ豪傑此所に至り給ひ、遂に此虎を殺して害を除き

給ひぬること、第一村中の人民都て其禍を蒙り、第二には往來の旅人悉く其禍を免かる。豈これ豪傑の賜にあらずや。武松これを謝して云く、思ふに是何ぞ某が力のなす處にあらん。すべて列位村中の福を賴んで某不慮に彼虎を殺しぬ。諸人又暫く武松に酒を勸め、盃已に收りける處に、陽谷縣の知縣相公より使者來りて、則ち武松に對面し、頓て武松を請うて轎に乘らしめ、又彼虎をも轎の前に擡せ、直ぐに陽谷縣に迎回りければ、當所の人民等は、一人の豪傑景陽岡にて虎を殺したると聞き、盡く先を爭うて馳せ來り、街に充見物す。武松轎の內に在つてこれをみるに、貴賤雲霞のごとくに相集り、肩を擦背を挨、直ちに虎を迎へて見物し、其騷動すること始終鳴を止ざりけり。既にして武松知縣が衙門の前に至りしかば、頓て轎を下り、廳前に進み入れば、下官らも又彼虎を擡て同じく廳前に至る。此時知縣は武松が猛き模樣を看、又彼錦毛の虎を見て心中に想けるは、若し此大漢子が勇にあらずんば、誰かかくのごとき大虎を殺すことを得んやと、暗に是を悅び、乃ち武松を呼んで廳上に登らしめければ、武松謹で廳前に拜伏す。此時知縣問うて云く、虎を殺したる勇夫は汝よな。汝いかがしてかゝる猛虎を一人の力を以て殺したるや。武松答へて始終一々相告げしかば、廳上廳下に坐を列ねたる數多の役人等、一々此言を聞いて、いづれ凡人の所爲とは思はれずと、皆衆舌を振て驚きけり。知縣大いに感悅し、乃ち盃を執て武松に酒を賞す。武松謹でこれを飯み了りしかば、知縣又村中に觸て、賞錢一千貫を輳め、則ち是を武松に褒美す。武松が云く、某此度村中の福ひを賴んで不慮に彼虎を殺しぬ。原某が力の能にはあらず。何ぞ敢て擅に官府より褒賞を受んや。某聞けることあり、村の獵戶等相公の命を奉つて、虎を殺さんとて多日多く錢財を費し候と。願はくは此賜を彼等に分ち惠み給はんや。然らば某深く相公の仁心を感ずべし。知縣が云く、汝已にかく思はゞ、宜しく汝が意に任すべし。武松大いにこれを謝し、早速彼一千貫の賞錢を諸獵人等に分ち與ふ。知縣これを見て、心中に深く武松が忠厚仁德なるを感じ、則ち武松を擡舉て職を授け、當地に留置んと思ひ、則ち武松に對していはく、汝は原是清河縣の人ならば、我此陽谷縣とは誠に咫尺の間を隔るのみ。我今汝を此處に留んことを願ふ。よつて都頭の職を授けんに、汝肯て當地に留まりて職に就かんや。武松拜謝して云く、若し相公肯て某を擡舉給はゞ、某愚なりといへども、又敢て犬馬の勞を献らん。知縣是を聞いて大いに悅び、隨卽に押司の職をなす。當番の役人を呼んで商議を決し此日武松を擡舉て步兵都頭となしぬ。かの里正幷に諸の獵人ども、悉く來つて武松を賀し、一連に五六日喜びの酒を酌みけり。是より武松は陽谷縣に在つて已に數日を過し、只顧心中に思ひけるは、我もと故鄕に歸りて兄を探望んと欲しけるに、想はず此處にて都頭となり尤譽を國中に蒙りしかども、未だ兄に遇はざるゆゑ、全く心を安んせず。近日好便を求めて消息を通ぜんと圖り、其日は先づ閑に乘じて縣前に走り出で、此彼を繞り當地の風景を賞めけり。時に武松が背後に人有つて呼はりけるは、武都頭は今日發跡を遂て、いかんぞ我を見外にはするや。是誰ならん次を見るべし。

王婆賄を貪て風情を說（其上）

武松は後背を顧るに、今詞を掛しは兄武大郎なりしかば、忽ち地上に拜伏して罪を謝し、頭を擡云く、已に一年餘り對面せざりしゆゑ、日夜心に懸り憂しに、先恙なきこと何よりの福なり。只しらずいかなることにて、此地に至り給ひしや。武大郎が云く、汝故郷を出て若干の月日を過したるに、何ぞ一封の書簡も寄ざる。我あるひは怨みあるひは想ひぬ。武松が云く、いかんぞ怨み想ひつし給へるや。武大郎が云く、怨みしは、汝清河縣にて醉狂の上人を打倒して、故郷を逃しに依て、官司より我を責て汝が行向を問るゝこと凡一月餘り、其事明白ならず、大いに苦みを受ぬ。這ぞ汝を怨しなり。又近き比我妻を娶れり。然るを後生輩、傍若無人に我家に踏入て我を欺き侮り、大に狼藉を働きぬ。汝あらば誰か敢へてかゝる無禮をなさんやとて汝を想ひぬ。是故に我清河縣に住居して安んずることを能ず、當地に移來て、今已に借宅の躰にて貧き營をなす。扨此武大郎と武松とは一腹一生の兄弟なれども、其形其志し大いに同じからず。武松は身の長八尺に餘り、相貌堂々威風凛々としてしかも兩臂に千百斤の氣力を有ちぬ。若かくのごとくならずんば、いかんぞよく彼大虎を殺す事を得ん。又武大郎は長四尺に滿ず。其形極めて賤くして醜し。清河縣の人皆武大郎かく身の長矮きを以て、諢名をつけて、三寸釘谷樹皮と呼慣せり。又彼武大が娶たる妻は、其比清河縣にて一人の富貴人有りけるが、許多使女の内、一人の家生の使女に潘金蓮とて、二十許なるが顏色頗る美なり。彼富貴人數度調戲をなせども、彼使女原其家の老管家に情を通せんと思ふこと舊久し。故に曾て主人の意に從はず、剩本妻に斯と告しかば、夫婦是より色を變じ相爭ひ、若干日曾て睦じからず。より主人大に怒り、彼女を怨み心中に圖りけるは、當地第一の醜き男を選み出し、彼潘金蓮を配せて其仇を報せんと武大郎を選み出して、多く金銀を武大郎に與へ、乃ち彼使女潘金蓮を以つて武大郎に嫁し、果して大いに潘金蓮を耻辱めり。此沙汰四方に聞えて、人皆希有の思ひをなせり。乃ち彼後生者ども盡く來り、再三武大郎を消遣けるとなり。彼潘金蓮は原來色佳女なりけるに、形鄙しき武大郎に嫁しぬれば心大いに悅ずして旦暮に是を愁ひけり。武大郎此時武松に語て云ひけるは、我清河縣より此所に移り、別に定さりし家業もなきゆゑ、只餅を賣りて過活とす。今日も已に街に出てこれを賣んと欲しぬ。我向に街に在て諸人の云ふを聞しに、景陽岡にて虎を打殺したる武氏の勇士、既に今當地に留つて都頭の職を賜りぬと、其風說專らなりしゆゑ、われ已にこれを察し、武氏の勇士とは汝ならんと、七八分料りしに、果して汝なり。まづ宜しく我家にて過し別離の憂をも語り慰むべしとて、遂に武松を導て私宅に赴き、直に紫石街を望んで馳來り、則ち一間の茶坊の間壁に至て武大郎門を敲しかば、内より一人の女出で彼蘆簾を揭げて門を開き、乃ち迎て云ひけるは、丈夫今日は何ゆゑ早く歸り給ひしぞ。武大郎が云く、我弟武松に遇しゆゑ、半途より誘引せり。汝宜しく對面すべしとて、乃ち武松を引て内に入り、三人坐を列ねて、武松慇懃に阿嫂にまみえしかば、武大郎まづ妻に告て云けるは、頃

日諸人專ら沙汰しける、景陽岡にて大虎を打殺し、新に都頭の職をなしぬる人は、乃ち此我弟此武松なり。妻これを聞て急に向ひ前で云けるは、叔々敬ふ語なり何の幸ひに今日兄弟再たび參會し給ふぞや。武松も則ち答へて云ひけるは、嫂々敬ふ言なり何故かく慇懃に座を起給ふやとて、忽ち跪き地上に拜をなしければ、彼妻自ら武松を扶け起して申けるは、叔々這樣に拜をなし給ふは、却て我を苦しめんとの事なるや。我いかんぞ安りに拜を受て宜からん。武松が云く、嫂々は是れ我兄に從ひ給ふ人なれば、わが拜を受け給ふとも、何の不是かあらんと、終に拜をなしにけり。彼妻又云ひけるは、前日我も人の云ふを聞つるに、一人の豪傑景陽岡にて大虎を打ち殺し、則ち此日其人も縣裡に來るとて、見物の貴賤恰も蟻のごとく湊ひて、此前を奔走す。我も幾許か見たかりしか共、世間の想像を恥て出ざりし所に、豈知らんや、彼豪傑と云しは、叔々の事にてありしよな。今日こゝに至り給ふこそ、我夫婦の福なり。先づ樓に上りて今日は宜しく終日語り給へとて、遂に武松を引て樓に登りけり。武松此女をみるに、眉は初春の柳葉に似て、常に雨を恨み雲の愁を含み、顏は三月の桃花のごとくにて、暗に風の情月の意を藏しぬ。尤も玉貌妖嬈として芳容窈窕たり。此時三人樓に上て坐已に定まりしかば、彼の妻まづ武大郎に對して云ひけるは、我暫く叔々に陪して待べし。丈夫急に酒食を設け來り給へ。武大郎が云く、我も斯こそ思ひつれ。武松まづ心を寛げ待るべし。我少刻回て共に一盞を傾んとて、遂に樓を下りけり。彼の妻熟々武松が人物を看て心中に想ひけるは、わが夫武大郎と此武松とは、原同胞の兄弟なるに、なんぞかくのごとく雲泥のたがひありや。此弟武松は身の長八尺に餘り、人品殊に爽なり。我もしかやうの男子に嫁しなば、嘸悅ばしからんに、彼兄武大郎は身の長四尺に滿ず、人物更に醜惡なり。我いかなる報ひにて、彼漢子には嫁しけるぞや。何とぞ此武松を諫めて此處に移さしめ、遂に我一點の情をも通ずべきものをと、虛華地に悅び、乃ち滿面に笑を帶して、武松に問うて云けるは、叔々當地に至り給ひてより以來二十日あまりにもなるべきや。武松答へて云く、某當地に至つて今日方に十八日に及びぬ。彼妻の云ふ、叔々今何れの處にか居住し給ふぞや。武松が云く、未だ宅をも借ざるゆゑ、知縣相公の衙門の內に居住いたす。彼妻が云く、叔々かくのごとくんば、定めて不自由にあらん。武松が云く、某獨身のことなれば、別に不自由の事もなく、却て朝夕心安し。況んや某が手下の雜兵ら常に來つて我に事ふ。故に我自ら手足を勞することなし。彼妻が云く、雜兵等いかんぞ能く心を用ひて叔々に事ふることあらんや。願はくは、我家に移りて一所に住し給へ、然らば我自ら食物を調へ、朝夕是を進め申さん。是尤も雜兵等が手に觸たる食物より猶も清からん。武松が云く、嫂々の懇請感謝に勝ざるなり。彼の妻又問うて云く、叔々は年幾ばくになり給ふや。武松が云く、某徒にはや二十五歲に及びぬ。彼の妻が云く、叔々今年二十五歲ならば、我に三歲長じ給ふなり。叔々此度は何れの處より當地には至り給ひぬるや。武松が云く、我故郷を出てよりは、滄州に一年あまり逗留し、一向兄のことのみ心に懸りしゆゑ、不圖滄州を出て兄を探望んとせし處に、想ず

此處にて對面を遂ぬ。彼妻が云く、我等夫婦此處に搬來し事は、尤も其緣故多し。我叔々の兄に嫁してよりは、人皆夫の愚直なるに乘じて、一向我等夫婦を欺負申せし故、清河縣の住居なりがたく、遂に此所に移り來れり。向に若しかくの如くなる强勇なる叔々家にあらば、誰かあへて我夫を欺く徒あらんや。武松が云く、我兄は半點も某に似たる所なし。唯よく老實を守り給ふ。是却て大いに可なり。彼妻が云く叔々何故かく顚倒したる言をいひ給ふぞや。諺にも人剛骨なければ、安身牢からずとこそ申なり。我平生快性なるに依て我夫のごとき愚直なる人を見るに忍びざるなり。武松が云く、我兄のごときは事を惹出して嫂々に憂ひを掛ることなし。何ゆゑ是を嫌給ふやと、未だ云ひも罷らざるに、武大郎ははや酒肉を調へて家に歸り、卽ち樓に上り妻に對して云けるは、汝は樓を下り酒肉を備へ來らんや。彼妻が云く、我夫はなに故かく世事を知り給はざるや。我叔々に備待してこゝにあり、いかんぞよく樓を下らんや。武松が云く、嫂々何の慇懃のことを云ひ給ふぞ。事あらば宜しく樓を下り給へ。彼妻此時武大郎に對して、我夫宜しく速に間壁の王婆を央て酒食を具へしめ給へ。武大郎これを聞き、乃ち王婆を傭來て酒食を具しめ、自ら運びて樓上に持ち來り、三人坐を對して已に飲酌を始めけり。彼妻武松に向て云けるは、今日叔々初て至り給へ共、何の欺待もこれなく、怠慢の至りなり。武松是を謝して云く、嫂々何ぞかく隔心の言を云ひ給ふや。彼の妻また兩眼に情を含で、只顧武松を看ければ、武松又此躰を見て心中悅びず、只頭を低れて一言半句も說話することなかりけり。酒已に數盃巡りしかば、武松乃ち別れを告て、深く夫婦の欵待を謝しぬ。武大郎が云く、汝何ぞ早や歸らんと云や、尙酒を酌で黃昏に歸るべし。武松が云く酒已に足ぬ。再び來つて訪ひ申さんとて、遂に樓を下りければ、武大郎夫婦も同く下りて相送る。那妻が云く、叔々近日必ず我家に移り給へ。若移り給はずんば、又もや夫婦他人に欺かるゝ事あらん。我預じめ一間の歇み所を設けて急に相待べし。武大郎これを聞て、大に悅んで云く、我妻が云ふ所大に可なり。武松汝肯て我家に移り來らば、誰かよく夫婦の者を欺き侮る者あらんや、願はくは早くに我家に移來て、我等夫婦が身心を安んぜしめよ。武松これを辭すること能はずして云けるは、既にかくのごとくんば、今晩早速に移り申さんや。彼妻が云く、若今晩移り給はゞ、別して宜しからん。早く回て早く來たり給へ。我ら夫婦專ら相待ち申さん。武松は此時兄の家を辭して直ちに縣裡に來り、則ち知縣相公に見て云く、某が同胞の兄、幸ひ今此地の紫石街に居住す。某今晩より彼の家に移り住せんと欲す。願くは速に命を奉つて移り、兄へ悅ばせ申たし。知縣の云く、汝か願ふ所は乃ち孝悌の事也。我何ぞ是を許ざらんや。宜しく早々移るべし。但し毎日自ら怠ずして縣裡に來り、公役を勤めよ。武松頓首してこれを謝し、乃ち有合の家財を盡く雜兵に持せて、其夜武大郎が家に搬りけり。彼妻武松が移りしこと、恰も半夜に金玉を拾ひし思ひをなし、天に悅び地に悅んで滿面に笑を含ぬ。乃ち一軒の房裡を設け、武松を歇ましむ。武松も大に悅び、各其夜は休みけり。翌日彼妻忙しく起て、面を洗ひ口を漱ぎ、又武松に請て同じく面

を洗はしむ。武松これを謝して、乃ち縣裡に馳、其朝の役を勤、直ちに五ツ時に至て再び立歸りぬ。此時彼妻手を洗ひ甲を剔、別して毎よりも風流に粧ひ、自ら食を設け、武松を請て吃せしむ。武松は原來直性の人なれば、阿嫂が自ら奔走するをみて、意頗る安んせず、再三慇懃に謝しにけり。彼妻又自ら一盞の茶を捧げて、武松に與ふ。武松忙しくこれを取て云けるは、嫂々自ら斯る手を下し給ふことは、某大いにこれを忍びずして坐立安んせず。縣裡より一人の雜兵を呼寄申さんに、諸事これに命じ給ふべし。彼妻が云く、叔々は何ゆゑかくの如き慇懃の言を云ひ給ふぞや。原是一家の骨肉なれば、我縱ひ叔々に事るに、何の不可なるかあらん。若し彼雜兵を呼び寄せ給ふとも、是をつかふことと能はじ。彼輩は皆鄙き徒なれば、朝夕の飲食をなすとも、大いに醃臜からんなれば、我亦これを見るに忍ぶまじ。叔々必ず彼輩を呼給ふことなかれ。武松が云く、雜兵等が做ことは尤も清かるまじけれ共、我いかんぞ敢て嫂々を勞せんやとて、又公役に因て其日再び縣裡へぞ往にけり。

此篇事長ければ、次の卷へわたりて二十四回目の文なり。

三編卷之二

（其下）

武松は兄が家に同居し、既に五六日を過しけるに、武松一疋の緞子を阿嫂に送りければ、彼妻これを得て、顔に笑を含んで云ひけるは、叔々心あつて送り給ふ物を、若し辭することあらば、反て無禮ならん、この故に姑くこれを受取ぬとて、限なく悅びけり。武松は武大郎夫婦と一所に在りて、毎日縣裡に伺候し、我が職を勤め、あるひは遲く歸り、ある時は疾く歸り、其時刻さらに定まらずといへども、阿嫂少しも勞を辭する顔もなく、ねんごろに飲食を具へて、武松に進めければ、武松心中にこれを安からずぞおもひける。阿嫂時々武松が心を窺ひしかども、原鐵石の心にて、少しも動ずる景色なし。光陰箭の如く、はや一月餘りを過しける。時節まさに十一月の天氣になりて、連日寒風緊く起り、彤雲四下に遍く布、又一天紛々揚々として大雪降り、世界都べて銀を敷きたるごとくなり。翌日武松早朝より縣裡に參りて、直ちに日中に至りけれども、未だ歸らざりしかば、武大郎心中に待佗居ける處に、彼妻武大郎を責て商賣に出しければ、武大郎已ことを得ずして、營の爲に街にぞ出で行きけり。此彼妻間壁の王婆を央うて酒肉の類を買調へ、今日は巴不得武松に三盃を勸めて情を敍んものをと

虛華地に悅び、乃ち簾の下に立て、武松が回るを待暮す。此日武松は雪の裏を過りて、亂瓊碎玉を踏て歸りしかば、阿嫂簾を揭げて嘸縣裡も寒冷つらんに、いかんぞ回り遲かりしや。武松がいはく、今日は縣裡にて早飯を食し、又朋友に酒を勸められしかども、何としてか快からず覺えけるまゝ、直に座を起ちて歸りしなり。阿嫂が云く、叔々且よろしく向火給へ。武松これを謝して、爐火の邊りに座しければ、阿嫂自ら前後の門を關て酒肴を携へ、武松が前に來る。武松則ち問うて云く、我兄は何方に行き給ひて、未だ歸らざるや。阿嫂が云く、我夫は毎日街に出て商賣を營み申さるゝなり。我且叔叔と三盃を酌ん。武松がいはく、兄の回らるゝを待て共に酌給へ。阿嫂心極めて忙しかりしかば、いかんぞ能夫が回るを待んや、早速酒を盪て自ら杯に篩、則ちこれを武松に送つて笑を含み情を露して云けるは、叔々此盃の酒を飲み給へ。武松が云く、嫂々必ず慇懃の事をなし給ふなとて、則ち其盃の酒を乾しければ、阿嫂又滿々と篩いで、武松に再び勸めけり。武松これを謝して、唯賭氣に飲乾し、又此盃に酒を篩で阿嫂に送り、則ち慇懃に勸めければ、阿嫂これを喜んで飲乾し、遂に武松に問うて云ひけるは、我前日人の傳へ云ふを聞ば、叔々は縣前に一人の妾を養ひ置き給ふと、未だしらず此事實なるや。武松が云く、嫂々必ず外人の言を聞き給ふことなかれ。某原來色を好む輩にあらず、何ぞ妾をもとむべきや。阿嫂が云く、叔々の言は尤も君子に似たれ共、只恐らくは口と心と應ずまじ。武松が云く、嫂々もしこれを信じ給はずんば、我兄に問ひ給へ。阿嫂が云く、叔々の兄何ぞよくかくのごとき艶事を知らんや。若し是らのことを曉らば、いかんぞ餅商賣を致さんや。叔々且心を寛げて酒を酌給へとて、一連に三四盃を篩で、武松に勸め、己も又二三盃飲しかば、愈春心發動自らこれを忍びず、只顧戲れ言を以て、武松を伺しかば、武松これを七八分推察し、只頭を低て自ら慚愧に堪ざりけり。阿嫂又酒を盪て來らんとて、已に爐火の邊を立ければ、武松は只火筯を撥て火を弄し、心大に悅ばず。阿嫂頓て又酒を携へて、武松が前に來り、乃ち右の手を伸して武松が肩脾を推て云ひけるは、叔々只這些衣服を着し給ふのみにては、何ぞ此の寒氣に堪給はんや。武松これをみて殆快よからず、只頭を低口を閉て、尙更火筯を撥り居たりし。阿嫂は武松が答へざるを見て、急に火筯を奪ひ取て云ひけるは、叔々火を弄し何の戲をなし給ふぞやとて、一向笑を含で媚にけり。武松は此光景を見て大いに怒りけれ共、只聲を出さずして在ければ、かの阿嫂欲心倍熾んにして、武松が心中怒るをもしらず、乃ち盃に酒を篩で、これを一口二口飲了り、猶五六分の酒を剩して武松に送り、叔々此酒を飲み給へ。武松此時忽然として大いに怒り、阿嫂が持ちたる酒を奪取りて地上に打捨、猶聲を勵して云けるは、嫂々何ぞかくのごとき羞耻を識らざることをなし給ふぞや。我はこれ道を知り義を守る大丈夫なり。彼風俗を敗り人倫を沒する徒とは等しからず。嫂々重ねてかく、恥なきことを云ひ給ふな。もし我言を容ずして尙戲れをなし給はゝ、我縱ひこれを忍ぶとも、我が此擧は曾て嫂々を許すまじ、唯宜しく自ら恥を知り給へ。阿嫂之を聞て、忽ち面色紅うして、急に盃を收

て云けるは、我は是一時の戯にこそ、斯云ひけるに何ぞ是を眞とし給ふや。實に拙き人の心底かなとて、一向武松をぞ怨みけり。此時はや未の刻もさがりしかば、武大郎も已に商賣を完了て立歸り、乃ち門を敲きければ、妻忙しく門を開きて武大郎を迎ふ。武大郎これを見るに、兩眼に涙を含で顏色すべて紅かりしかば、武大郎これを怪て問けるは、汝何ゆゑに顏に怒れる色ありや。妻が云く、我夫本愚なるゆゑ、人を呼び入れて我を欺しめ給ふなり。武大郎が云く、誰か來つて汝を欺きしぞ。妻が云く、我今日武松が雪を踏て歸たるを見て、心中に憐み、自ら酒食を具へて管待ける處、武松人なきに乘じて只顧我に調戯ぬ。是ゆゑに我是を憤れり。武大郎が云く、我弟は原來かくのごとき不義を做者にあらず、必ず聲を高めて隣家の輩に笑はるゝことなかれとて、直ちに武松が房裡に入つて、乃ち武松に對して云けるは、汝は食を吃しけるや。我汝と共に酒食を用ひんに、房裡を出て外面に來れ。武松是を聞しかども一聲をも答へず、唯默然として居たりけるが、忽ち身を奮起して、門外に馳出しかば、武大郎聲を高めて再三留けれ共、武松更に耳にも入ず混一縣裡を望で走り行ぬ。武大郎則ち妻に問うて云けるは、武松只顧縣裡を望んで馳行は、是何の意ぞや、我は偏にこれを憂るなり。妻罵つて云く、彼がごとき禽獸何ぞ憂とするに足ん。彼今縣裡に往くは、自ら恥てこそ避行らめ。彼必定己が行李を運び搬て、縣裡に移ることあらん。これ幸ひ惡魔を出す道理なれば、却て悅ばし。我が夫もし彼と一所に居たく思ひ給はゞ、早々我に一紙の休書を與へ給へ、我則ち此家を出づべし。其跡にて彼を呼び入れ給へ。武大郎これを聞いて再び一言も返さず、只心中に憂へけり。斯る處に武松一人の雜兵を引て、再び立歸り、我行李等收拾て雜兵に挑せ、又忙しく縣裡を望て走り行く。武大郎これを見て同じく赶行、乃ち武松に對して云けるは、汝は何ゆゑ早縣裡へは移行ぞ。武松が云く、長兄必ず是を問ひ給ふことなかれ。若是を云ふ時は、大に家門を汚すのみ。只我に任せて移らしめ給へ。武大郎是を聞いて再び問ふことをなさず、遂に私宅に歸りけり。此時彼妻は猶喃々吶々と武松を罵り、汝ごとき不義の徒、若し久しく我家に在らば、遂に我命をも害することあらん。汝今縣裡に移り行こと、是天の保佑なり。汝今都頭の職をなすとも、久しからずして必ず誤ることあらんとて混一怒罵りしかば、武大郎此體を見て悅ず、只顧武松が事をぞ思ひけり。武松は其日より知縣相公の衙門裏に移りて、毎日怠らず公役を勤けり。彼妻再三武大郎に示して云けるは、武松は是人として鳥にだにもしかず、必ず渠を訪ひ給ふことなかれ。若し一度にても彼を吊ひ給ひなば、我早速夫婦の緣を斷て離別致すべし。武大郎元來愚直の者なれば、今妻に嚇されて、曾て武松を訪らはざるこそ拙けれ。當縣の相公は任に到りてより以來已に二年餘りになりしかば、多く金銀財寶を蓄ゆるが、私に東京の親類の方へ預け置かんと思へども、等閑の者に命じて東京へ送らば、必ず途中にて盗賊の難有んを恐れ、何卒壹人の豪傑を求めば、是を監押として財寶を東京へ送り遣さんと圖りける處に、忽ち武松がことを思ひ出し、心中に悅び、即日武松を呼んで商議して云けるは、我近日東京の類親へ一荷の禮物を送

らんと思ふに、途中心許なければ、もし汝ごとき豪傑を監押たらしめば、道中恙なからん。汝もし辛苦を辭せず我爲に東京に往かば、我又重く恩賞を行はん。武松が云く、某多く相公の大恩を蒙る。何ぞ敢て辛苦を辭することあらんや。某未だ東京へ行かず。原來東京の風景をも一見致したく思ふ折節なれば、某も苟に願ふ處なり。若禮物全く調ひなば、則ち明日發足致すべし。知縣是を聞て大いに悅び、則ち酒食を以て且武松を賞しけり。扨武松は知縣の命を受て廳上を退き、乃ち二人の雜兵を街に馳て酒肴を調しめ、直に紫石街に來つて、武大郎が家に至る。此時武大郎も已に餅を賣り完了て同く家に歸り、武松に對面しぬ。武松は兩人の雜兵に命じて酒肴を具へしむる。彼阿嫂は一度武松を怨みけれども、其餘情未だ絕す居たりしに、武松が來りたるを見て、心中に想ひけるは、彼又今こゝに至るは、定めてわが事を想ひ出してこそ來るらめ、我且慢々と彼を圖るべしと私に悅で亦復風流に粧ひ、急に門前に出て、武松を迎て云けるは、叔々は何故絕て音信不通にはなし給ふぞ。われ常に心に懸りぬるゆゑ、頃日は叔々を我家に邀へんとこそ思ひし。今日は何の幸ひに、我ら夫婦を訪ひ給ひしぞ。武松が云く、我今急事有て夫婦の人に告知せ申さんため、特々伺候を遂ぬ。阿嫂が云く、已にかくのごとくんば、樓に登つて語り給へとて、武大郎と共に武松を引て樓に上り、三人已に坐定まりければ、彼雜兵酒肴を具へ樓の上に携へ來る。武松頓て盃を取て、武大郎と阿嫂に勸む。阿嫂は只顧に武松を看て情を通せんと欲しければ、武松早く此體を察すれ共、更に怒もせず、又悅もせず、只武大郎を勸め、酒を酌しめ盃數巡に至りしかば、武松又大盃を出し、酒を滿々と篩ぎ、是を手に持武大郎に對して云ひけるは、某俄に知縣相公の命に依て、東京に上らんとす。明日は急に發足せしむ。遲き時は二ケ月、早くは四五十日の內に歸るべし。このゆゑに我特々來つて、長兄に一言を告んとす。長兄は原來人となり懦弱なるゆゑ、我もし當地に在ずば、恐らくは外人に欺れ給ふことあらん。明日より縱ひ商賣に出で給ふ共、必ず遲く出て早く歸り給へ、又外人とともに酒を酌給ふことなかれ。毎日早く門を閉て、是非口舌等を免れ給へ。若し猶人有て欺き侮ることあり共、只是を忍て爭ひ給ふべからず。我歸りなば、必長兄の爲に理論すべし。長兄若し彌我が言を容ひ從はんと思ひ給はゞ、此大盃の酒を飲乾て誓とし給へ。武大郎是を聞て卽ち盃を取て云ひけるは、我弟云ふ處極て然り。我敢て一々汝が言に從はんとて、遂に其酒を飲乾けり。武松又再び其盃に滿々と篩ぎて阿嫂に對して云けるは、嫂々は原來乘き人なれば、某多く言を用ひて示し申に及ぶまじ。唯我兄は人となり愚にして、諸事拙き人なれば、全く嫂々の助を賴のみなり、嫂々若しよく家を堅固に守り給はゞ、兄曾て憂ひ給ふこと有まじ。豈聞ずや、古人の語にも、籬牢ければ、犬入ずと云ふことあり。那阿嫂これを聞て、忽ち面を紅めて大に恥、乃ち夫武大郎を罵て云けるは、汝いかなることを人に告げて、斯我を欺しめけるや、我は是女の中の男なり。見がたき事聞がたきことを、聞き見するに忍びず。我武大郎に嫁してより以來、蟻だにも屋の內に入れず。然るに籬牢ければ犬入ずといひぬるは、

是明かに我を譏るの詞なり。這樣胡亂なる言は他人に對して云ひ給へ。我かつて斯のごとき套語を聞きたることなし。誠に悔氣事共なり。武松是を聞て呵々と打笑つて云けるは、若嫂々の宣ふ言のごとくは、我等兄弟少も憂ること有まじ。唯宜しく口と心と相應し給へ。今嫂々の言我能心に記しぬ。彌〻其言に差なくんば、誓の爲に此酒を飲給へとて、彼大盃に篩持たる酒を阿嫂におくりければ、阿嫂盃を推開て、直に樓を下り梯子の半に至つて、聲を放ち涙を流し云けるは、汝はこれ聰明伶利の人なれば、長嫂を敬ふことは原來知りつらんに、何ぞかくのごとく無禮をなすや。我向に武大郎に嫁せし時、曾て叔々あることを聞ず。頃日汝我が家に來て、はや多く事を惹出すは、是道理に於て何ぞや。重ねて我家の事毛頭も管ふことなかれと、大に哭て梯子をぞ下りけり。武大郎、武松は猶樓の上に有て幾ばく酒を勸め、盃已に收りければ、武松則ち武大郎に別れを告て、樓を下りしかば、武大郎は頻に戀々として、武松に對して云ひけるは、汝必ず早く回り、我心を安んせしめよとて、覺ず兩眼に涙を洒ぎけり。武松此躰を見て、心中に忍びかね、長兄必ず憂ふべからず。我更に早く回るべし。明日より商賣に出で給はずして唯朝夕心を安じ、懷を寛げ宿に居給へ、毎日の使用は我自ら送るべし。武大郎は猶依々として門前まで送り出で、一向別れを歎きけり。武松又云く、長兄必ず我云ひしことを忘れ給ふ事なかれ。頓て又再び對面致さんとて、二人の雜兵と倶に縣裡へぞ歸りける。翌日武松は已に旅裝を調へて、知縣相公に見えし處に、知縣はや一輛の車に貨物を載、兩人の精兵

并に兩人家僕を武松に從がはしめければ、武松謹で知縣を辭し、都て五人遂に陽谷縣を離れて東京へぞ急ぎけり。扨又武大郎は武松に別れてより此來、毎日妻に罵られしかども、氣を忍び聲を呑で爭ひなさず、心の内に只武松が云ひし言を守り、商賣も常よりは早く完了て家に回り、便ち彼簾を取て前後の門を關し、唯安々と家に座して、他出することもなかりければ、妻此樣子を看、心大に焦燥て武大郎が面を指さし罵て云ひけるは、汝愚夫何ぞかくのごとく事を曉ざるや。日色猶天空の裡にあるに、はや門を關すは是世間の法にあらず。必定人皆我家を笑つて、いよ〻汝を愚なりとすべし。汝尤も聰明ならざるといへども、何ぞ弟を恐れてかくのごときに至るや。武大が云く、若世間の人我家を笑ば、唯よく笑はすべし。弟ながら武松が云しこと、都て皆是非を免るゝことの金言なり。我いかんぞこれを容ひざらんや。妻是を聞いて、武大を白眼罵つて云ひけるは、汝懦弱なりといへども、同く是男子なり。何ぞ自ら主意をなさずして人の下知を受くるや。武大が云く、我決して武松が言を守るべし。彼が云ひし所、我が爲には皆金玉の詞なり。汝必ず邪の言をいふことなかれ。妻これを聞て、益々怒を含一連に十餘日只願夫を罵りしかども、武大郎は是を耳にも聞き入ず。毎日只晏く出ては早く歸り、彼前後の門を緊く關して、武松が諫言を守りける。彼妻初の間は毎日武大を罵りしかば共、其後は罵り疲れて、自ら靜り、約莫武大が回る時分に至れば、妻先づ自ら彼簾を除て門を關す。武大郎之を見て、暗に悅びけり。已に五六日經る程に、冬も漸々暮んとして、天氣陽に回り日の色頗

る暖なり。當日彼妻武大郎も頓て回るべき時分と思ひ、自ら門前に立出て簾を取んとしける處に、其簾の外に一人の漢子過ぎりけるが、事正に出來すべき時節到りけるにや、彼妻が手に持たる簾、思はず手の内より滑落て、彼漢子これを罵んと欲し、頭を回し眼を瞋して是をみるに、一人の女風流に粧ひ、門前に立ち出て在けるが、忙しく罪を謝して云けるは、奴家今覺ず簾を取落して官人を犯し申しぬ。願くは只罪を免し、怒を息め給へ。彼漢子かゝる風流の女を看て、俄に怒色を更め笑を帶み、乃ち腰を曲て云けるは、夫人何ぞ慇懃なる分説をなしたまふや、縱へ頭を傷ふたりとも何の苦しきことかあらん。此時間壁の王婆、店の内より是を見たりけるが、忽ち聲を揚て云けるは、誰人か官人を打ぬるぞや、誠によくも打れたる者かな。那漢子呵々と打笑ひ云ひけるは、這は是夫人の我を打ち給ひたるにあらず、我却て夫人を驚しめけるなり。願はくは夫人此罪を免し給へ。彼女も又笑を含て云けるは、望らくは官人實に恕し給へ、もと是奴家不意に出たる過ちなり。彼漢子又打笑て、頻りに眼色を以て彼女を眄み、遂に其所を立去しかども、尙七八遍頭を回して看送りぬ。彼女は自ら簾を收め門を關し、閑に武大郎が歸るを待居けり。扨その簾に打れたる漢子は、原是陽谷縣に於て隱なき破落戸なり。乃ち縣前に居住して生藥舗を開き、其家最も富饒なり。然れ共此漢子幼きより奸佞の生質にて、又よく拳頭棒をつかふ。彼以前は貧き者なりしが、近年暴に多く金銀を撰て富隆えり。元來佞者なるゆゑ、常に財物を散じ縣裡の官吏に賄賂を送り諸役人どもにも盡く交を結で甚だ勢ひありしかば、滿縣の人民ら彼を怕れざるはなかりけり。那漢子が覆姓は西門名は慶と號す。人皆彼を稱し西門大郎とも云ひ、又錢財あるゆゑ西門大官人とも稱しぬ。此日西門慶直ちに王婆が茶坊に入つて座しければ、王婆戲れ咲て云く、大官人先には頭を打れ給ひしが、其痛み定めて今に禁難からん。西門慶も又打ち笑て云けるは、彼女は實に誰が妻なるぞや。王婆が云く、彼は是閻魔大王が姉にて、五道冥官が女武大官が妻なり。彼を問ひ給ふは何故ぞや。西門慶が云く、汝又戲を云ふや。實に彼女がことを告知らせよ。王婆が云く、大官人何ぞ彼を知り給はざるや。彼が夫は毎日縣前に徘徊して餅を賣る漢子なり。西門慶が云く我是を猜せり。彼女は必定棗糕を賣る徐三が妻なるべし。王婆これを聞き、手を搖つて云ひけるは、彼が夫もし徐三ならば、すこしは相應すべけれ共、彼が夫は尙徐三よりも醜し。大官人再びこれを猜し給へ。西門慶が云く、銀擔子李二が妻ならん。王婆頭を搖て云く、若李二ならば是誠に好一對の夫婦なり。西門慶が云く、然らば必ず花胳膊陸小乙が妻なるべし。王婆大に笑つて云く、陸小乙もし彼が夫ならば、又是相應の夫婦なり。大官人再び心を留て猜し給へ。西門慶が云く、我實に猜しがたし、知ず何人の妻なるにや。汝速に告知せよ。王婆哈々と打笑ひ云ひけるは、我宜く渠が夫の名を云うて、大官人を笑はしめん。其人は是餅を賣る武大郎なり。西門慶之を聞て覺えず聲を放て大に笑ひ云けるは、武大郎と云ふは、人都て三寸釘谷樹皮と諢名を附たる武大郎がことならずや。王婆が云く、便ち其矮漢なり。西門慶大に歎息して云けるは、彼のごとき美女、

いかんぞ武大郎ごとき、醜男に嫁しけるや。王婆が云く、古より諺にも、駿馬却て痴漢を馱て走る、美妻常に拙夫を伴て眠ると云ふことあり。世間には儘かくのごとき配合多し。西門慶笑ふこと良久しうして、再び王婆に諂うて云ひけるは、汝が兒子は誰に隨つて何國に往けるぞや。王婆が云く、我兒子は數年以前一人の商客に跟て外鄉に出けるが、其後久しく音信不通なるゆゑ、其死生をも知らざるなり。西門慶が云く、汝何ぞ兒子を呼回して我に跟ざるや、我格別に情を掛て使ふべきに、近日好便あらば必ず書簡を以て呼回せ。王婆が云く、若し大官人兒子を擡舉給はらば、是莫大の幸ひなり。近近幸便を索て呼廻し候べし。西門慶が云く、兒子回りなば早速我に知らせよとして、遂に店を立て出にけり。王婆は又茶を煮て客も來るらんと待ける處に、約莫一時餘り過て、彼西門慶又來て王婆が店の簾の下に座して、武大郎が門前を望み見る。王婆此時一椀の梅湯を棒げ、西門慶に飲しむ。西門慶飲み畢て云けるは、王婆が此梅湯は做得て味最美なり。汝が家に尚幾ばくの梅湯有や、若餘りあらば我少しこれを所望すべし。王婆故意聞き誤りたる體にて云けるは、我一生媒をなしけれども、未だ餘る美女あらず、若あらば所望に應すべし。西門慶が云く、我は是梅湯のことをこそ問けるに、汝は却てこれを媒となす、大いに差へり。王婆打笑て云く、梅と媒とは本同韻なるゆゑ、我は只媒を做を問ひ給ふかと聞き誤りぬ。西門慶が云く、汝果して媒をなさば我爲に能るべき媒を做あたへば、我重く汝を謝すべし。王婆が云く、媒をなすことはわれ素より老在行なれば、天下に双びなき媒をもなすべけれ共、恐らくは大官人の夫人これを知り給はゞ、我此皺臉の皮を剝給ふことあらん。時に西門慶が云く、我妻は原來賢女なり。極めて能く人を用ゆ。既に今幾ばくの妾を求めて我身邊に侍せしめけれ共、第恨らくは、心に合ふ者一人もなし。若し我がために汝美なるを東西に看著なば、早速我に告げ知らせよ。王婆が云く、我前日一人の美女を見置きけれ共、恐らくは大官人のこゝろに合ふまじ。其容貌は尋常ならずといへども、只怨らくは其年少からずして、花期の昔も遙なり。西門慶が云く、其年僅の差ある共、果して汝が云ふごとき上品ならば、何爲其年を論せんや。王婆が云く、那女は戊寅の生れにて今年九十三歳なり。西門慶大いに咲て云く、汝這狂婆子いかんぞ此のごとき戯れ言をいふやとて、已に座を立て、門外に馳出けり。此時天色漸暮ければ、王婆は則ち火を點じて門を關んとしける處に、彼西門慶又來りて、簾の下に座をなし、乃ち武大郎が門前を一向望みければ、王婆が云く、大官人和合湯を用ひ賜はんや。西門慶がいはく、是れ尤好らん。汝早く拿來れ。王婆すなはち一盞の和合湯を與へ吃せしむ。やゝ久しく座し、遂に又簾の下を立て王婆に對して云けるは、我猶明日來たるべしとて、其夜は私宅に歸りけり。翌日早天に王婆門を開いて外面をみるに、彼西門慶又門前に在て、一向奔走す。王婆心中に想ひけるは、此西門慶いかんぞ此のごとく心忙しきや。われ少計を施し、彼が錢財を分ち取んものをと悅んで、乃ち座して茶を煮んとしける處に、西門慶はや王婆が店に來りて、簾の下に座をなし、只願頭を傾けて武大郎が門前を窺望む。王婆はこれをしらぬ

體にもてなし、只風爐を搧ぎ茶を煎じ居けるが、西門慶乃ち店の内を望んで呼りて云けるは、王婆わが爲に茶を拿來らんや。王婆此時打笑て云けるは、大官人は此連日此邊には見え給はざりけるが、今日は何かたの風が吹て我店には至り給ふや、宜しく内に入つて茶を用ひ給へとて、乃ち濃々と薑茶を煎じて、西門慶に與ふ。西門慶茶を吃して、同じく戯れて云けるは、我去年の春、此店に至てより以來、終に此邊に來らざりしなり。汝宜しく我に相伴し茶を吃せんや。王婆が云く、我若し相伴致さんは、却て興有まじ。只獨自ら吃し給へ。西門慶又問うて云く、此間壁の武大郎は常に何を以て業とするや。王婆が云く、官人何ぞ早く是を忘れ給ふや、彼は毎日餅を商うて活過とす。西門慶が云く、誠に我も彼が賣ふ餅は、名物の譽高きことを聞き及べり。我今彼に問うて、四五十の餅を誂へんと欲す。しかし武大郎宿に在るべきや。王婆が云く、大官人彼が餅を買んと思ひ給はゞ、彼少刻街に出て賣を待て買ひ給へ、なんぞ必しも親自彼が家に尋ね行給ふことあらんや。西門慶が云く、汝が云ふこと尤然り。後刻街に於て買ふべしとて、遂に店を立ちて出ければ、王婆は尙簾の邊に在つて、彼の西門慶を見るに、一向武大郎が門前を窺ひ望んで、一遭は西に往き又一遭は東に來り往來す。已に七八遍して再びまた王婆が茶坊に入りて坐をなす。王婆又戯れて云ひけるは、大官人數月此邊には、消息もなかりけるが、今日は難得に來臨を惠み給ふよ。西門慶是を聞いて大に咲ひ、乃ち懷中より一兩十匁許の銀を取出し、王婆に與へ云けるは、汝權くこれを收めて茶錢とせよ。王婆が云く茶錢には多く餘れり。いかんぞあへてこれを收んや。云く、汝必ず多少を論ずることなく、且宜しく是を收よ。王婆暗に喜悅して思ふ樣、此者はや敗れの端を露はしぬ。我慢々是を釣んと圖り、乃ち銀を收めて云けるは、大官人は頃日心中に一ッの事有つて、甚だ火急給ふ色見ぬ。云く汝何を以てこれを猜しけるや。王婆が云く、諺にも門を入るとき榮枯のことを問ふことを休よ。顏容を觀着して便ち得ると云ふことあり。況んや我數十年善惡のことを經ゆゑ、縱ひいか樣の蹊蹊ことたり共、只一猜にこれを差しむることなし。西門慶は此時我れ實に心中一ッの事あり。汝此ことの根本を猜せんや。王婆打ち笑て、これを猜せんこと豈難からんや、只一猜にこれを着て見せ申さん。耳を側だて聞き給へとて、乃ち忙はしからず慢ならずして云けるは、大官人此兩日頻に此邊に徘徊し給ふは、必定前日大官人の頭巾を打ち邪たる、此隔壁の那人を慕ひ給ふに決定せり。我此猜いかん。西門慶これを聞き、大いに悅で云ひけるは汝誠に智は隋何に賽、機は陸賈に强れり。我實に彼の日、隔壁の人に不圖頭巾を打れ、遂に那人を見初てより以來、魂魄自ら蕩々として春路に迷ひ、更に足を入るべき處なし。汝肯て我爲に一ッの計を施さんや。王婆笑て云く、我多年茶を賣といへ共、今日の過活とするに足ず、是故に專ら這等のことを挈視て、過活の助けとす。何ぞ大官人の命に遵ざらんや。西門慶が云く、汝もしいよいよ此事を成就なさしめば、我汝に十兩の銀を與へ、汝が死ん時の棺槨を買しめん。王婆が云く、這等のことをなすには、捱光と申て、光を捱に五ッの件を以てす。此捱光と云ふ二字は尤難し。然れ共

この五の件だに全うするときは、尤も易し。其第一は潘安仁なりが容貌、第二は貨を惜ず、第三は鄧通が富貴、第四は衣の裏に針有りて身を刺ごとき苦みを忍ぶ。第五は毎日多く閑暇あらんことを要す。この五の件もし果して全からば、此事幸襯申べし。若し又此の五ッの件一ッも缺ることあらば、成就極めて難からん。寧索乾淨に休給へ。西門慶が云く、我實に此五の件渾て克すべし。第一我容貌只潘安にこそ如ずとも、也將就にして十分醜事あるまじ。第二は我家に有所の資寶驢に馱して行なふとも吝まじ。第三は我蓄鄧通に及ばず共、使用を欠べからず。第四は我尤もよく忍の一字を守る。縱ひ此身を割るゝとも敢て動ずることあらじ。第五は我極めて閑暇あり。もし然らずんばいかんぞ能く再三かく此邊に來ることを得ん。汝只宜しく我が爲に神妙の計を盡し、これを成就なさしめよ。然らば我重く汝を謝すべし。王婆が云く、大官人此五の件皆全しとのたまへ共、我知る、只一ッのこと畢竟妥貼申すまじ。西門慶が云く、汝まづこれをいへ、只一ッの事妥貼まじとは、しらず何等の事なるぞ。王婆が云く、我今分明にこれを申さんに、大官人宜く聞き給へ、凡此捱光と云は尤難きことなり。十分に光を涯ときんば事必ず成就せん。然れ共十分に光を捱と欲するときんば、其費九分九釐に至て僅其一釐を欠と云とも、又成就しがたきことあり。官人元來慳客主顧にて、妄りに銀を使ふことを怖れ給はん。我今妥貼まじきと云しは、只此一事なり。大官人果してこれをいかん。西門慶が云く是甚だ易きことなり。汝何を以て難きとするや。若し金銀を使ふべき所あらば、全く汝が調度に任すべし。豈これを慳むことあらんや。王婆が云く、大官人もし果して此のごとくんば、我且一ッの計あり。若これを行ふときんば、大官人忽ち那人と一座に於て對面叶ふべし。只知らず、大官人肯て我に從ひ給ふべきや。西門慶が云く、此事のみに於ては我好惡を揀ばず都て汝に從ふべし。汝早く臥龍が計ありや。王婆打ち笑て云く、今日は已に晩ぬ。且貴宅に歸給ひて、半年或ひは三ヶ月を過して再び來り給へ、其時宜しく商議すべし。西門慶これを聞いて、忙はしく地上に跪て云ひけるは、王婆老菩薩何ゆゑ斯る無慈悲のことを云ひ給ふや。願くは我迷ひを早く救ひ給へ。王婆是を聞いて呵呵と笑ひ、大官人扨々慌て給ふことかな。愈堅く忍の一字を守り給へ。我此計は是第一の上策なり。只武成王の廟に入らんことこそ能ふまじけれ共、端的に孫武が女兵に敎へし計、十たび捉へて九たび著るよりも猶強れり。我今日大官人に語て聞かせ申べし。那人は原是清河縣の大家より出たる上品ゆゑ、別してよく針線をなす。大官人今一疋の白綾、一疋の藍紬、一疋の白絹、並に十兩の絲綿を調へ、我に與へ給へ。然ら共我彼が家に往きて那人に對して云ふべきは、我幸ひに一人の施主有つて、一套の壽衣の衣料を賜ぬ。然れ共未だ縫ざるゆゑ、近々縫せんとす。願くは夫人我爲に曆本を開きて黃道吉日を擇出し給はれかし。然らば急に裁縫を央うて、これを縫しめんと語るべし。此時那人囉唣ことを嫌うて悅ざる景色あらば、此事則ち休め給へ。彼人もし萬一に我汝が爲に縫べきに、必ず裁縫を僱ひ給ふことなかれといはゝ、則ち是れ光あり。其時我れ彼人を我家に請て縫しめん。然

るを彼もし我家にて縫べきに、壽衣を這首へ持參せよと云はゞ、此事則ち休め給へ。彼人若殆
悅び則ち我家に來つて縫べしと云はゞ、便ち是二分の光あり。彼もし彌我家に來つて縫べき時は必
ず酒肉を設けて欵待べし。第一日には大官人必ず來り給ふことなかれ。第二日に彼れ若し我に對し
て、汝の家は不自由にて事調難し、宜しく我家に持參して縫しめよと云はゞ、此事乃ち休給へ。彼
若し次の日同じく我家に來て縫ば、乃ち是三分の光あり。此日も又大官人來り給ふことなれ。第三の
日は午の刻前後に、大官人毎よりも格別に粧うて我店に來り給へ。則ち咳嗽の聲を以て相圖をすべし。
此時大官人は門前に立住て云ひ給ふべきは、頃日は世事に纏れて、此邊にも來らざりし。愈王婆は
恙なきやと呼り給へ。時に我走り出て、大官人を迎へ則ち延て房裡に入れ申べし。若し彼人大官人の
内に入り給ふを見て、急に己が家に逃回らば、我又是を留んこと能ふまじければ、此事便ち息給へ。
彼若し大官人の入り給ふを見ても、曾て其身を動すことなくば、乃ち是れ四分の光あり。大官人已に
座し給ひなば、我又彼人に對して云ふべきは、這官人は則ち是れ我に壽衣を惠み給ひぬる施主也、
誠に希有の善人かなと、多く大官人の好所を吹噓すべし。大官人は又彼女が針線を讃歎給へ。彼若頭
を低て一言の答へにも及ばずんば、此の事則ち休給へ。萬一彼言を開いて返答することあらば、乃ち
是五分の光あり。我此時また大官人に對して云べきは、此夫人一片の善意を以て、我爲に手を下して
此を縫給ふ、誠に有難き存念なり。われいかなる僥倖にや、想ず兩人の施主を得たり。一人は銀を出

し、一人は力を出し給ふ。就中此夫人の手に經給ひぬる壽衣を着して冥途に赴かば、必ず其の功德
によつて極樂淨土の諸佛諸菩薩盡く途中に出て迎へ給はんこと、何の疑ふことかあらんや。我れ夫人
を欵待て、豫じめ此恩を謝せんと思へども、唯恨くは力のこゝに及ばざることを、願くは大官人我に
替つて東道となり給ひ、宜しく此夫人を欵待てたび給はゞ、猶此上の厚恩齒を沒るまでこれを忘るま
じと云うて、深く賴み申べし。時に大官人朱提を我に與へ、酒食を求めしめ給へ。彼人もし此躰を見
て、忙しく座を起て回ることあらば、我又是を扯住がたからん。此事乃ち休給へ。若渠此光景を見て
も猶身を動すことなくんば、乃ち是六分の光あり。我はかの朱提を取て門を出んとする時、則ち彼人
に對して云ふべきは、我は是酒食を求て來らんに、夫人宜しく此官人に陪して談話し給へと、大抵に
挨拶して出べし。彼人これを聞て、もし身を起して己が家に避往ば、是又支り難かるべき間此事便
ち休給へ。彼若牢く座を離ずして返答に及ばゝ、是七分の光あり。我已に酒食を具て搬び出ん時、又
彼人に對して云ふべきは、夫人且生活を收拾給ひて、一盃酌給へ、難得に此官人我に替て東道となり
給ひぬ。夫人必ず辭し給ふことなかれと、慇懃に詞を盡すべし。此時彼人苦に辭し、別を告て回るこ
とあらば、此事則ち休め給へ。彼もし口には辭し回んと云へ共、更に身を動すことなくんば、乃ち是
八分の光あり。彼已に大官人と座を對して酒を酌、興遂に闌に至らん時、我故意酒盡たりと告て、
再び大官人に酒を沽しめん。我に答へて云ひ給ふべきは、若酒盡なば一向求め來れと命じ給へ。こゝ

に於て我酒を買に行躰にもてなし、急に前後の門を關すべし。大官人彼と兩人房裡に居給ふ時、かの人もし大に焦燥て跑歸ることあらば、則ち此事休給へ。彼もし我に任せて門を關させ、少しも焦燥ことなくんば、乃ち是九分の光あり。已に九分は調るべし。唯殘る一分の光却て大に難し。大官人彼人と共に房裡のうちに居給ふ時、只よろしく多情の詞を以て、彼が心を柔げ給へ。必ず忙はしく手脚を動して事を誤り給ふことなかれ。若し大官人忍の一字を忘れ給ひて、自ら計を敗り給ふぞならば我決して此挈襯を休べし。大官人彼とともに酒卓に傍て、酒を酌給ふ時、詐て彼一對の筯を衣の袖にて拂ひ落し給ひ、故意慌忙しくこれを拾ひ取躰にもてなし、且手を伸てかの人の脚に礙り給へ。此時彼もし鬧ことあらば、我又來りて宜しく妥すべし。然れ共此望叶ふまじければ、此事便ち止め給へ。若彼脚をも縮めず聲をも做ずんば、乃ち是十分の光なり。彼もし心なくんば、いかんぞよく此に至らんや。即ち此を名て捱光と申す。十分の光を捱と云ふの意なり。此上のことは大官人の心に有るべし。唯しらず此の計はいかん。西門慶一々計の次第を聞て天に悅び地に喜で云けるは、王婆汝が胸中には、萬卷の書を藏けるや。かくのごとき神妙奇特の計、譬陳平張良たりともいかんぞこゝに及ばん。愈愈我爲に違變なく力を盡せ。王婆が云く、我斯保管上は心を安んじたまへ。大官人たゞ約し給ふ十兩の銀を忘れ給ふことなかれ。西門慶が云く、汝必すこれを憂ひ慮ることなかれ。未だ知ず、此計は何れの吉日を卜して行ふべきぞや。王婆が云く、幸希今日は黃道吉日なれば、急にこれを行ふべし。我今武大郎が未だ回らざるに乘じて、急に彼が家に行き宜しく詞を盡し、彼人を我家に賺し倚せんことを調へ申さん。大官人は早く彼白綾寺の衣料を求めて來り給へ。西門慶が云く、若し汝愈計を行ふならば、是殊更悅ばし。我少停衣料を調へ來るべしとて、たゞちに街へぞ馳行けり。是ぞ事の權輿を廣ぐるにて、竟には多くの人に苦難をかけ、四人の命を斷つこと次卷より追々委し。

三編卷之三

鄆哥忿ずして茶肆を鬧しむ

西門官人は街に馳て紬絹舗に至り、白綾、藍紬、白絹ならびに十兩の好綿を調へ、これを包袱にして、一人の家僕に持たせ、再び王婆が店に到りしかば、王婆頓て包袱を請取西門慶を店の内に俟しめ、遂に後門を開けて、間壁の家に入れば、潘金蓮は王婆を迎へ、樓に上り兩人座已に定まり、王婆先いはく、夫人は何ゆゑ頃日我家に見え給はぬや。彼女が云く、這兩日は我何とやらん身心快からず、是故に數日汝の家に看望ざりしなり。王婆が云く、夫人の家に曆本あらば、我に借て裁衣日を見せ給へ。彼女が云く、汝何の衣服を裁給ふや。王婆が云く、我今年は覺えず身體疲れ動不動病起發る。齡もはや七旬に近ければ、冥途の旅出も遠かるまじ。よつて預じめ壽衣を製んと思ふ。それに付き て夫人聞き給へ。今の世にも又善人は有つて、即ち此近邊に居住ある一人の財主、前月我店に來り給ひて、我今年殊に疲れたると聞き給ひ、則ち壽衣にせよかしとて、二三色の疋頭に十兩の絲綿を添へて施こし給ひぬ。我今年は氣力も大いに衰へぬるゆゑ、其砌にも早速縫しめんとしけれども、折節裁縫等生活の忙しきを以て日を延ばし今日に至れども、猶忙はしき由云うて、未だ我爲にこれを縫ず。

よつて甚しく憂ふること數日なり。よもや近々には來りて裁縫もあらんと、さてこそ日を尋ねに來りしなり。彼女咲て云く、我汝が爲に縫はんと思へ共、恐らくは心に合ふまじきをいかゞせん。もしわが縫ひたるをも嫌給はずば、急に縫整て進らせん。王婆此言を聞いて、忽ち滿面に咲を含んで云ひけるは、若し夫人我爲に手を下し給はらば、我死すとも必ず其好所を得べし。我久しく夫人針線の妙手たることを聞くといへ共、只憚りを顧て敢て賴まざりけり。彼女が云く、汝何ぞ慇懃のことを云ひ給ふや。彌我に縫はしめ給はゞ、黃道吉日を擇で手を下し申べし。王婆が云く、夫人我爲に縫ひ給ふならば、夫人は誠に是一點の福星、何ぞ必ずしも日を選ことを用ひん。況や前日一人の主顧我店に來られけるゆゑ、我是を問ひけるに、たしか明日は、黃道吉日とやらん申されぬ。然れ共我未だ曆本を見ざるに依つて、曆本を借てこれを見んと思ひしなり。幸ひ福星の夫人手を下し給はんに、何ぞ日を選ことをせん。彼人が云く、我聞く壽衣を裁は別して黃道吉日を用ふるとなれば、則ち明日と定め給へ。王婆が云く、既にかくのごとくば、明日より針の起すべし。願はくは夫人我家に來て縫ひ給へ。彼女が云く、汝の家にて縫はんとも我家にて縫ふとも、何ぞ別に拘束ことあらんや。王婆が云く我亦原來夫人の針工を看たく思へば、希くは必ず我家に來つて縫ひ給へ。彼人の云く彌さることあらば明日朝飯後より至るべし。王婆大に悅び、再三感謝して遂に私宅に歸りけり。扨彼西門慶は、王婆が回りたるを見て忙はしく其首尾を問ひければ、王婆詳かに告げしらせ、則ち第三日に來り給へと約を定

め別れけり。翌日早天に王婆先づ房裡を清めて、芳茶、美饌、新果等を相調へ專ら彼人の來るを待ち居たり。當時間壁にて武大郎は食事已に終り、則ち彼の餅を荷うて街の邊に出しかば、彼人は前門を關し、後門より出て王婆が家に來りぬ。王婆大きに悅び、則ち延て房裡に入り、壽衣の衣料色々を取出し、彼人に渡すの所、忽ちに裁てはや縫かゝりしかば、王婆再三聲を放て賛美し、我凡そ六十餘年餘多の針線を見れども、未だかつてかく高手の針線をみず。誠に夫人は裁縫の棟梁ならんとぞ譽にける。彼人已に日中の比まで縫ひければ、王婆頓て酒食を饌へこれを進む。彼人辭すること能はず、暫く先づ生活を遏て酒飯を用ひ、其後又生活を做て方に武大が回る時分に至りしかば、則ち王婆を呼んで衣料を收拾させ、明日再び來るべしとて遂に又後門より回りけり。此時彼武大郎も商賣を完了て回りしかば、妻は門を開いてこれを迎ふ。妻が顏色紅きを見て問ひけるは、汝何れの所にて酒を飲みけるや。妻答へて則ち隔壁の王婆、今日より彼が家にて壽衣を縫はせけるゆゑ、我先に彼が家に往きし處、日中の比ほひ酒食を以て我に進めし間、我これを用ひて顏色紅し。武大是を聞いて云ひけるは、汝何を以て彼が酒食を用ゆるや、我夫婦彼を賴こと毎度なり。必ず彼に錢財を使はしむることなかれ、汝若し明日も又往くことあらば、豫じめ錢を携て往き、酒肉を買調へて宜しく彼に進め、今日の禮を回すべし。諺にも、遠き親類は近き隣家に如すと云ふことあり。必らず隣家の情を缺ことなれ。若し彼れ再三辭退に及んで、我返禮を受けずんば、汝明日より彼が家に往かずして、衣料を我家に取よせ是を縫ふべし。妻これを聞き、いかにとも只明日の光景に憑すべしとて其夜は共に歇けり。

扨彼王婆は計を設けて、彼人を我家に賺し寄せ、心中にこれを悅ぶこと限なし。翌日朝飯後に、武大は已に商賣に出ければ、王婆自ら急に武大が家に至り、彼人を請うて再たび已が家に迎て、又房裡の內に於て生活をなさしむ。漸々日中に至らんとする處に、かの人烏目一貫文を取出し、これを王婆に與へて云ひけるは、我今日汝の爲に一酒一肴を調て共に觴を飛ばさん。王婆是を聞いて夫人是何の道理ぞや。我憚りをも顧みずして夫人を勞するのみならず、いかんぞ顚倒のことをなし給ふや。我夫人の管待を受くることあらじ。必ず我爲に心を費し給ふことなかれ。彼人云く、汝必ず是を辭し給ふこと有るべからず。これ乃ち我夫再三我に命じて、汝を慰んとす。若し是を辭し給ふことあらば、乃ち衣料を我家に持ち回りてこれを縫ふべし。王婆是を聞いて云ひけるは、大郎何ぞかくのごとく心を費し給ふや。我若し汝夫婦の好意に背ば、却つて不可ならん。權先づこれを收て、酒肴を求めんとて遂に烏目を取にけり。王婆又私に心中に想爲、もし少しにても彼女が心に背くことあらば、必ず計の害となるべければ、宜しく慇懃に欵待んと思ひ、彼一貫文の錢を請たる上に、又己が錢を加へ酒肴菓子等を買調へ、丁寧を盡し彼女を欵待し、再三今日の席の東道をなしたることを謝しにけり。およそ世間に女十人の內八分は、精細者ありといへども、人よく計を儲て墮坑に落す時は、かの精細女も遂に其計に中つて坑に落るなり。況や武大郎が妻のごとき、慾心深き淫婦をや。扨王婆は酒食を以

て彼人を欵待し、其日も同じく何事なく回しけり。第三日に至つて王婆先づ彼人を邀へて、我家に來り、則ち彼衣料を取出し生活を催しければ、彼人又是を縫ふこと已に午の刻に至りぬ。此時西門慶は別して風流に粧ひ、直ちに王婆が店の前に至つて一聲相圖の咳嗽をなし呼ばはつて云ひけるは、我頃日は世事に纏れ、久しく此邊に至らざりし。王婆は彌〻恙なきや。王婆故意是を曉ぬ體にて、店の内より答へけるは、斯懇に我を問ひ給ふは誰人ぞや。西門慶が云く、汝何ぞ我聲を聞き識らざるや。此時王婆忙はしく門前に出、西門慶を見て云ひけるは、我は只他の客ならんと想ひしに、原是壽衣の施主、我爲の大主顧にてありけるよな。大官人は是幸ひの時に來り給ふもの哉。我今彼壽衣を縫はせ候に、且内に入つてこれを看給へとて、遂に西門慶を延て房門の内に入り、乃ち彼人に對して云ひけるは、此壽衣を惠み給ひぬる施主は、則ち此官人なり。西門慶先づ彼人を見て、慇懃に禮をなしければ、彼人も又忙はしく禮を回しぬ。王婆則ち西門慶に云ひけるは、我此壽衣先月より今迄、一向裁縫を央て縫はしめんと思ひけれども、裁縫等皆生活の忙しきを以て、これ縫はざりし所に、幸ひ此夫人、我爲に手を下しこれを縫ひ給ふ。最高手の針線なり。大官人宜しく是を一覽し給へとて彼壽衣を取りて西門慶に見せしむ。西門慶再四これを見て大きに賛美て云ひけるは、此夫人いかんぞかくのごとき奇妙の針線を傳へ給ひしぞ。恐らくは天帝の宮中にも斯神妙の針線はよもあらじ。彼人笑を啣で云ひけるは、大官人虛く譽給ふことなかれ。西門慶王婆に問うて云く、這夫人は誰人の

夫人なるぞや。王婆が云く、大官人是を猶し給へ。西門慶が云く、我神明ならぬ身の、いかんぞよく猶し著ることを得ん。王婆呵々と打笑つて云く、此夫人は便ち是我隔壁の武大郎の妻なり。西門慶が云く、偖は武大郎の美婦よな。我もと武大郎とは識荆なり。彼人は常に街に出て、商賣をなし、能く錢を撰て善家を利する人なり。況や其性質究て好。かやうの人に嫁し給ふも又是れ夫人の福なり。王婆が云く、我平常這人夫婦の内間を見るに、其睦しきこと水魚のごとし。彼女が云く、我夫は愚癡儒弱の鄉巴老なり。大官人是を笑ひ給ふことなかれ。西門慶が云く、夫人の言差へり。古人の語にも柔軟は是身を立つるの本、剛强はこれ禍を惹の胎と云ふことあり。武大郎のごときは是、老實三昧の君子なり。王婆是を聞いて、早速其言を接て云ひけるは、大官人の宣ふごとく、武大郎は元來性格よき人にて世人擧てこれを吹噓。西門慶呵々と打笑ひ、遂に三人坐を列しかば、王婆又彼人に向つて、夫人は此官人を識り給ひぬるや。彼人が云く、我いまだ識らず。王婆が云く此官人は是當縣の富貴人にして、知縣相公も常に來往し給ふ。乃ち大名を西門大官人と申て、幾萬々貫の錢財を保てり。今已に縣前に居住して生藥鋪を開き給ふ。夫人も幸ひ識荆となり給へとて、再四詞を盡しけり。西門慶は私かに彼人が十分の情思を見て、心大いに擾亂せり。王婆又西門慶に對して云く、今日大官人もし來り給はずんば、我も又大官人の貴宅に至つて邀へ來ることも有るまじきに、しらずいかなる因緣にて、今日不圖こゝに至り給ひしぞ。我何の僥倖にや、想はず兩人の施主を得ぬ。一人は錢財を出し給ひ、

一人は又力を出し給ふ。就中此夫人の手に經ぬる壽衣を着して、冥土に赴ば必ず其功德に仍て、極樂淨土の諸佛諸菩薩盡く影向まし〳〵途中に我を迎へ給ふべし。我今夫人を欺待して、豫じめ此恩を聊謝し度く思へども、只恨らくは力此に及ばず。もし大官人此老婆に替て東道となり、宜しく此夫人を欺待給ひなば、此上の高恩齒を沒る後迄も貽らん。只しらず大官人肯て東道となり給ふべきや。西門慶此言を聞き、王婆が思ふ所尤理なり。我今汝に替り東道とならんこと何よりも易し。我爲に酒食を求めて來るべしとて、則ち銀を取出して與へけり。彼人是を見て必ず生受のことをなし給ふなと、口にては云ひけれども、其身は更に座をも動す。此時王婆銀を取つて座を立ちしかども、彼人又身を動さず。王婆則ち彼人に向つて云く、夫人暫く此官人に陪して座し給へ。我少停回るべし。彼人これに答へて免し給へと許にて、又曾て身を動かすことなし。西門慶眼を欺ずして、一向彼人を看けれは、彼人も亦暗に西門慶が人物の風流なるを見て已に方寸を亂しけり。須臾して王婆は酒肴を調へ來り、乃ち是を具へて、房間の內酒卓を設け、かの人に向つて云ひけるは、夫人且生活を收拾給ひて、一盞を酌給へ。彼人が云く、汝自ら大官人に陪して酌み給へ、我豈あへてこれに當らんや。王婆が云く、今日は是大官人我に替て、夫人を欺待給ふに、何ゆゑ是を辭し給ふや。願はくは且生活を休て共に一盞酌給へとて、遂に彼人を延て酒卓の邊に座をなさしめ、已に三人飲酌を催しけり。西門慶自ら盃に滿々と酒を篩て、彼人に送つて云く、夫人我爲に此酒を乾給へ。彼人謝して云く多く大官人の厚意を蒙るとて遂に盃を取つて未だ飲みも乾ざるに、彼王婆が云く、夫人は原より酒量大いなりと聞き及びぬ。只心を寬げ酌み給へ。西門慶又王婆に對して云く、汝我に替つて宜しく夫人を勸めんや。王婆これを聞いて、又盃を執て相勸め、酒已に數巡に至りしかば、王婆又酒を盪て來らんとて、已に座を立ちぬ。此時西門慶かの人に問うて云く、夫人の春秋は幾ばくぞや。彼女が云く、我年は徒には や二十三春を過しぬ。西門慶が云く、我年慚らくは夫人に五歲の兄なり。彼人が云く、大官人の貴き庚を以て、我が賤き庚に比給ふは、是何ぞ天を以て地に比し給ふに、等しからんや。王婆これを聞き打笑つていはく、此精細夫人唯よく針線の高手のみにあらず、又よく諸子百家のことに通じ給ふよな。西門慶が云く、此のごとき佳人焉ぞよく求ることを得んや。武大郎は是命中に福分大いなり。我實に偏向んことを欲す。王婆が云く、大官人の左右に許多の佳人有りといへども、只恐らくは此夫人に及ばん者一人も有るまじ。西門慶が云く、果して汝が云ふごとくなり。我只命の薄き故にや、未だ一人も我心に合ふ者を求めず、朝夕之のみ患ひとするなり。王婆詐て云く、大官人の先夫人は聰明怜悧にして、而も其容貌類を出群を拔んで給ひぬ。西門慶も同じく詐て云く、若し我先妻がごとき者あらば我何ぞ此のごとく心を焦さんや、今我左右に七八人の妾ありといへども、都て家內のことを務めず唯よく座を安んじて喫ふのみなり。彼人問うて云く、大官人の尊夫人果給ひて、幾ばく年に成りぬるぞや。西門慶が云く、我先妻は是聰明他に超て怜悧人に勝れ、諸事我に替つて家を齊へけるが、惜らく

は不幸にして早世し、已に三年に及びぬ。諺にも人の妻なきは、屋に梁なきがごとしと云ふことありけるが、果して我今妻なきゆゑ、家内已に七顛八倒しぬ。是故に我心を慰めんが爲、毎日街に出て奔走す。若し家に在るときは萬千の憂愁免るゝことなし。王婆がいはく、我つら〳〵大官人の先夫人のことを思ふに、容貌聰明最他に超絶ひしといへども、實に針線のこと、此夫人には及ばせ給ふまじ。西門慶がいはく、針線のことは日を同じうして語るべからず。且先妻が容貌も、いづくんぞ此夫人に及ぶことを得ん。王婆が云く、大官人の愛妾に張惜々李嬌々とて、兩人の美色あることを聞き及べり。此人等は又如何ぞや。西門慶が云く、此らの輩は本外宅に養ひ置きしかども、久竟恩愛を續者にあらず、只これ一時の興をなすのみなり。彼李嬌々は去年の秋七月に本宅に引取今更後悔限りなし。かれ若し聰明の者なれば、老早晩妻ともなすべけれども、唯惜むべきは家を利の器量なし。王婆が云く、若し大官人の心に合ふ者あらば、貴宅に至つて告げ申さんに、別に妨げ有るまじきや。西門慶が云く、我兩親は已に沒しぬ。今誰か敢て我身の上のことに妨をなす者あらんや。汝若し我心に合ふべく思ふ者を看中りなば、急に來つて我に告げよ。王婆が云く、我今云ひしは戯言なり。大官人の心に合ふべき者豈よく急にこれあらんや。西門慶が云く、王婆云ふことなかれ、我心に合ふべき者兩人はしらず、一人はあるべし。然れ共因緣薄うして、これを娶らざるのみ。王婆是を聞き呵々と打笑つて云く、兩人の施主に又新めて酒を勸めんずれ共、酒已に盡ぬ。又大官人これを續給はんや。西門慶が云く、もし果して酒盡きなば、汝只顧酒を調へ來れ、何ぞ再び問ふことを用ひんや。王婆これを謝して又彼人に向ひ、夫人は宜しく我に替つて、大官人に陪して座し給へ、我逐付酒を求めて回るべし。彼人これを辭し、酒は定めて足らんに、何ぞ又酒を求め給はんや、願はゝは盃を收め給へと、口にては云ひけれども、其身は更に動せざりける。王婆は遂に房間を出て、前後の門を關し、乃ち店の角に座して麻績て居たりけり。扨西門慶は、彼人と共に房間の裡にあり。頓て王婆が計によつて一對の筯を袖にて拂ひ落しけるに、已に因緣到來したるにや、かの筯幸ひ武大郎が妻の脚の邊りに落ちかゝる。西門慶急に是を拾ひ取る體にもてなし、彼人が尖々と文佳なる小脚に碍りけれども、彼人これを曉らず顏にて微し笑を含しかば、西門慶これを見て、心の内に金を鳴し鼓を擊ち、已に計のごとく行ひて頭を擡げけるに、彼人打笑て云く、大官人は是何の戯れをなし給ふや。西門慶これを聞いて、身を抖ひ顏を紅めて云ひけるは、我は原來夫人を慕ひ想ふこと、方寸に逼て此身を惱せり。願はくは夫人我一點の誠を察し給ひて、廣く恩情を垂、深く愛憐を惠み給へ。彼人此言を聞いて答へて云ひけるは、大官人もし實にかくのごとくんば、我又何ぞ情なからんや。此上は唯長遠の契りを結ぶべしとて、遂に兩人恩愛を相まじへ、此日ぞ乃ち雲雨の始なり。既にして兩人再たび衣を正して座を新めたる處に、かの王婆門を押開て進み入り、乃ち兩人に向ひ云ひけるは、大官人は申すに及ばず、此精細夫人も、又何ぞかくのごとく大膽にして、はや我が眼を誑き給ふや。我早老歸りて已に此事を聞きしなり。

彼人これを聞いて大きに驚き、唯惘然として呆たる許なり。王婆又彼人に對して云く、我汝を請うて壽衣をこそ縫はしめしに、何ぞ却つて此のごときことをなし給ふや。若し武大郎知り給ひなば、我も必定其連累を蒙るべし。しらず早く行きて武大に告げ申さんとて、幾乎に房間を出んとして身を回しければ、彼人大きに慌忙急に王婆が裙を扯住て云ひけるは、願はくは王婆わが罪を免し給へ。もし此事を武大に告げ給はゞ、我此一命つひに休るべし。況や大官人に難を懸申さんこと、我いかん共よく是を忍びんや。西門慶が云く、王婆聲を高むることなかれ。豈聞かずや、窓の外に人あり壁の上に耳ありと云ふことを。王婆これを聞いて打笑ひ、又彼人に對し云ひけるは、我夫人を免しがたく思へども、若し肯て我一つの望を准へ給はゞ、我まさに免し申さん。彼人が云く、一つの望みは扨置いて百千の望をも准へ申べし。王婆が云く、夫人果して我望を准へ給はゞ且今日を始として、宜しく武大郎を誑て毎日約を差へずして、西門大官人にまみえ給へ。もし一日にても我家に來り給はずんば、我早速に武大郎に告ぐべし。彼人が云く、事すでに此に至り何ぞ辭することあらんや。王婆又西門慶に對して云く、大官人我計によつて十分の好事をなし給ひぬ。必ず我にゆるし給ひぬる彼の十兩の銀を忘れ給ふことなかれ。若し萬一約を違へ給ふことあらば、我速かに此事を武大郎に告ぐべし。西門慶が云く、汝必ず心を安んせよ。我決して約を違ふることあらじ。此時三人又盃を新めて、飲酌を催ほし、漸々武大郎が回る時分に至りしかば、彼人乃ち西門慶に向つて、夫武大郎も少刻回るべき

間、早別れを辭するなり。必ず明日又相見え申さんとて、遂に後の門より我が宿へぞ歸りけり。王婆西門慶に對して云く、大官人我が智謀の廣大なること如何。西門慶が云く、汝が計は古の諸軍師にも強るべし。我急に彼十兩の銀を汝に與ふべし。必ず是を憂ることなかれとて、其日は遂に回りけり。扨彼武大郎が妻は、這日を初めとして毎日王婆が家に來り、擅に西門慶に恩愛を相交、怡も漆と膠とのごとくなり。諺にも好事門を出でず、惡事千里を走ると云ふことありけるが、果して未だ半月にも至らざるに、左右近隣悉く此ことを知れり。唯獨武大郎を誑くのみなり。其比又當地に一人の少年者あり。乃ち姓は喬、名は鄆哥と號して、僅に十五歳に成りぬれども、極めて乖巧の徒なり。家内には只一人の老父あり。這鄆哥毎日酒店の邊りに徘徊して、專ら菓品を賈て過活とし、常に西門慶が家に出入して、商賣をなし、又曾て西門慶が憐を蒙れり。此日鄆哥一籃の梨を携て西門慶が家に行き、乃ち是を賈はんと欲して、西門慶を問ひしかども、西門慶は已に他行して家にあらざれば、鄆哥大きにこれを憂ひ、這首那首にて、西門慶は今已に餅賣の武大郎が妻と私情を通じ、專ら茶坊の王婆が家にて會合す。今日も必定王婆が家にあるべきに、汝若し西門慶に遇たくば、彼所に行きて尋ねんや。彼の鄆哥是を聞いて大いに悅び、直ちに紫石街を望んで馳來り、遂に王婆が店に至つて問ひけるは、此處に大官人は至り給はぬや。王婆が云く、大官人とは誰が事ぞや。鄆哥が云く、此店に來り給ふ大官人は、云はず共知り給へ。王婆が云く、大官人は世上に充滿て多し。汝且其姓名を申せ。鄆

哥がいはく、我尋ぬる大官人は則ち西門大官人なり。我今急要有つて來れり。定めて店の内に居給はんに、我自ら入つて見えんとて、店の内に走り入りける處に、王婆急に攔り住め云ひけるは、汝何ぞ妄りに我内に入るや。凡そ人の家には各々内外の隔あるぞかし。鄆哥が云く、我自ら房間の内に入つて、大官人に見えなば、早速出申さんに、我を許して入り給へ。王婆が云く、汝少年の者いかんぞかく大膽のことを云ふや。我家には西門官人とやらんは曾て來られず。汝誤て我が家内に入ることなかれ。鄆哥が云く、王婆は何ゆゑ己一人のみ利を貪るや。少し其汁を分つて我に與ふとも、何の不可なることかあらん。王婆大いに罵て云く、汝我を以て利を貪るとし、又其汁を分ち與へんやと云ふは是何の謂ぞや。我忿りの未だ十分ならざる内に、早くこゝを立回れ。鄆哥が云く、汝は只一滴も外に漏ぬとこそ思ふべけれども、此度の事我悉く是を知れり、我若し直ちにこれを云はゞ、武大郎が怒ることあらん。王婆彼が武大郎の名を云ひけるを聞いて、大きに怒り、汝何を曉りてかくのごとく無禮を云ふや。若し再たび一言を吐出さば、我今汝が大陽の上に痛く拳を中ん。鄆哥が云く、汝は誰なれば妄りに我を打たんや。王婆これを聞いて益々怒り、忽ち鄆哥を揪へて散々に打ちければ、鄆哥原來少年者にして、王婆に敵すること能はず、たゞ頻りに哭叫んで云ひけるは、汝賊婆何ぞかくのごとく我を打つや。我少停汝に後悔なさしめんとて、直ちに街を望んで馳せ行きけり。

王婆西門慶を計畧む

鄆哥は憤りの餘り此形勢を武大郎に知らせんとて尋ね求むる處に、武大郎も餅の櫃を荷て此邊に來りしかば、鄆哥これを見て、乃ち詞をかけて云ひけるは、頃日は武大公に遇ざりしに、愈〻恙なく毎日商賣に出給ふよな。嘸渾家は嫉んで偷を致さるべし。武大郎大いに驚て云く、汝何ぞ妄りに我妻を偷盗にはするや。若し人有つてこれを聞かば、我夫婦は賊をなすぞと云ふべきぞ。鄆哥が云く、武大公は未だ人皆知らぬと思ひ給ふかや。渾家の偷みを致さゝること誰か是を知らざらん。然れ共こゝに一つの事あり。彼偷るゝ人原來約束の上にて、渾家に偷まるゝゆゑ、互に相歡んで或は偷み或は偷まる、何ぞ必ずしも世間の偷と等しからんや。必ず是を恐れ給ふことなかれ。武大郎これを聞いて、心中に其半を猶して云ひけるは、汝が云ふこと甚だ以て怪異なり。我妻に漢子を偷と云ふことかや。我妻に於ては漢子を偷みしことなし。必ず妄りの言を云うて我を羞辱ることなかれ。鄆哥哈々と打笑つて云ひけるは、汝の妻は漢子は偷まるまじけれ共、只能奸夫を偷まるゝなり。汝須く眼を明かにし給へ。武大郎これを聞いて、急に鄆哥を揪へて問ひけるは、我妻が偷む漢子は誰なるぞ。速かに告げよ。鄆哥が云く、我假如告げたり共、汝彼等を傷ひ給ふこと能ふまじければ、却て聞き給はぬこそ強似ならめ。無用のことを問ひ給ふな。武大郎これを聞いて大いに氣騰なし、急に十四五の餅を取出して鄆哥に與へて云ひけるは、汝もし我を憐むの心あらば、彼奸夫が姓名を告げ知らせよ。鄆哥が云く汝もしこれを聞きたく思ひ給はゞ、我に一席の酒を欵待給へ。然らば我これを告げん。武大郎が云く、

汝いよ〳〵酒を酌んとならば、何より以て易きことなり。汝宜しく我に隨て來れとて、遂に鄆哥を引いて一間の酒店に至り、早速酒肴を調へて鄆哥を欵待ければ、鄆哥大いに悅で只顧酒を酌む。武大郎が云く、汝少年者必ず酒を過して事を誤ることなかれ。且急に彼姦夫が名を告げ知らせよ。鄆哥が云く、武大公是を聞かんと思ひ給はゞ、先汝の手を我髮の内に入れて、我が頭の腫たるを摸り看給へ。此腫たるに就て緣故あり。武大郎此時手を鄆哥が髮の内に入れて、摸りける處に、果して頭の上大いに腫たり。武大是を見て問ひけるは、此腫たるに就て緣故ありと云ふはいかにぞや。我ひとへにこれを覺りがたし。鄆哥が云く、我今此緣故を語り申さん。耳を側て好聞き給へ。我今日一籃の梨を賣はんと欲して、西門慶を尋ねし所に、西門慶他行したるゆゑ、我又其跡を慕うて方々尋ね繞りしに、街にて一人の友我に告げて云ひけるは、西門慶今專ら武大郎が妻と私情を通じ、毎日王婆が茶坊に參會す。必定彼所に在るべきに、汝若し事あらば直に王婆が家に尋ね行けと敎ぬ。是ゆゑに我王婆が茶坊に尋ね行き、直ちに房間の裏に入らんとしける處に、王婆大いに怒、牙を咬拳を揑て我が頭を此のごとく打腫しぬ。我深く怨み、早速此事を汝に告げ申すなり。必ず誤てこれを疑ひ給ふことなかれ。武大郎尙疑を含んで云ひけるは、實に這等のことありや、我全く信じがたし。鄆哥冷笑ていはく、汝かくのごとく愚なるゆゑ、彼兩人汝を欺て擅に己らが樂みをなすなり。汝信じがたきと云ひ給ふは、我言を謊と思ひ候や。是尤世上の人多く知る所なり。必ず疑を決し給へ。武大郎これを聞いて云ひけるは、汝が云ふ所一々疑ふにあらず。こゝに一つの事あつて、而も汝が言に相應せり。我妻頃日王婆が家にて、衣服を縫うと云うて毎日往きけるが、其歸るごとに面紅うして酒に醉り。我自らこれを疑ふこと最も深し。既に今世間の人も知る上は、我急に彼西門慶を捉て事を正さばいかん。鄆哥が云く、汝半百の年を保給ひて、何ゆゑ斯く見識なきことを云ひ給ふぞや。彼王婆は原來這樣の事に馴たる者なれば、豫じめ逃路の計を設けてこそ有るらめ。汝もし西門慶を捉へんとして、王婆が家に入り給はゞ、王婆必らず相圖を告げて汝が妻を藏すべし。縱ひ西門慶一人房間の内に在るを見給ふとも、把柄なきことはいはれまじ。汝若し萬一西門慶に對して此ことを云ひ候はゞ、彼必ず汝をいたく打つことあらん。況や彼は常に官司の諸役人に賄賂して、勢ひ有る者なれば、却つて汝を憊懶者と名づけて官司に訴へ告ぐること有るべし。然らば汝遂に無實の罪に陷沈、獄屋に於て飢死し給はんこと、何の疑ひかあらん。必ず誤て事を做壞じ給ふな。武大郎が云く、汝が云ふ處極めて其理有り。唯しらず、いかゞしてか此怨を報んや。鄆哥が云く、我今日王婆に擲れたれば、此恨骨髓に徹り、遺憾尤も甚だし。我一つの謀を汝に示し、共に仇を報ずべし。汝今日宿所に歸り給ふとも、必らず此ことを色に出さずして唯よく常の體にて休み給へ。明日も常のごとく商賣に出給へ。我は豫じめ先街口に出て汝を待つべし。若し西門慶王婆が家に來りなば、我早速汝に告ぐべき間、汝は只街口の邊に徘徊し、消息を窺て控へ給へ。我已に汝に告げ終りなば、西門慶が後に隨て、同く茶屋の内に入

り、彼王婆を散〻に罵るべし。然らば彼王婆必ず又大に我を打たんとすべし。其時我王婆を牢く揪へ放つまじ。汝此便宜に乘じて急に王婆が家に走り入つて、直ちに房間の内に入りたまへ。彼等兩人果して一所にあらば、其時に乘じて捉給へ。しらず此計いかん。武大郎これを聞いて大いに悅び、汝が此計最も絶妙なりとて、數貫文の錢を鄆哥に與へて、明日街口に出て我を待よと云ひければ、鄆哥錢を得て甚だ悅び、我必らず汝の爲に力を併すべしとて、遂に別れて立ち去りぬ。武大郎は自ら酒錢を償ひ、再び酒店を出て宿所へこそは歸りける。彼妻初めの間は毎度武大郎を責りけるが、頃日は己が身に不義有るゆゑにや、かつて武大を呵ることなく、只曲て武大郎が心に應じけり。武大郎已に歸りしかども、其色を露はさず、只常の體にて何のことも云はざりければ、彼妻武大郎が面の紅を見て問ひけるは、丈夫は今日酒を酌給ひけるにや、面の色頗る紅し。武大郎が云く、今日は不圖朋友に誘れて三碗の酒を酌みぬと答へて、其夜は遂に歇みけり。翌日武大郎常のごとく、餅櫃を荷て出でければ、彼女頓て門を關して王婆が家に至り、專ら彼西門慶をぞ待ちにける。扨武大郎は街口に來つて鄆哥を尋ねける所に、鄆哥は老早此邊に出て待ちしかば、武大郎此を見て忙はしく鄆哥に問うて云ひけるは、彼西慶はいまだ來らざるや。鄆哥答へて云く、此時分は尙太だ早し。先づ街に馳て餅を賣り來り給へ。武大郎が云く、汝はよく此處に待ちて西門慶が來るを見よ。我は少刻來るべしとて、遂に街の上に馳往き、凡そ半時ばかりして再び街口に回りて鄆哥に問ひければ、鄆哥答へて云く、西門慶已に今來りぬ。我急に茶店の内に入つて、王婆を關すべき間、我が此梨籠を門の外へ投出さば、是を相圖として早速跑來り給へ、必ず自ら過ち給ふべからず。武大郎が云く、我已に相圖を約しぬる上は、少しも謬ることと有るべからず。汝宜しく事を差ることなかれ。此時鄆哥は梨籠を提て直ちに王婆が茶坊の内に入り大いに罵りけるは、王婆老犬汝昨日我を打ちたるを記ぬるや、我已不得此仇を報ずべきぞ。彼の王婆原來火性の短慮者なれば、此一言を聞いて益〻大きに怒て云く、汝此子猻、我自ら汝を饒しけるに、汝今又來つて我を罵るはいかん。鄆哥彌怒つて曰く、汝は是清天白日に人の妻を賣て不義の利を貪る、老惡無類の毒犬なり。いかんぞかく恥をしらざるや。王婆是を聞き、忽ち其怒氣心頭より起り、忙はしく座を立ちて彼鄆哥を揪へんとせし處に、鄆哥大いに呼ばはつて云く、汝賊婆何ぞ今日も又我を打たんやとて、急に梨籠を門外に投出し、王婆が腰に抱つきたり。時に武大郎相圖の梨籠を見ると等しく、飛ぶが如く門内に跑入しかば、王婆大きに驚き、急に鄆哥を棄て、武大郎を攔り止めんとせしかども、鄆哥腰に纏うて放たざりければ、只聲を揚て武大郎入り來りしぞ、早く躱れ給へと呼ばはりけり。彼女房間の内に在つて王婆が呼ばはる聲を聞き大いに仰天し、先彼房局の戸を閉しければ、西門慶は床の下に躱れけり。武大郎已に房間の口に至りて戸を推開んとしけれども、彼女内より牢く壓へしかば、武大郎これを開くこと能はずして、再三聲を放つて汝等よくも不義の娛をなすよな、早く門を開けと呼ばはりぬ。此時彼女西門慶を望んで云ひけるは、大官人常に武藝に誇り給ひけるが、事

に臨んで是を用ひ給はざるはいかん。西門慶これを聞き、忽ち床の下より爬出て云ひけるは、我曾て恐るゝにはあらざれども、事の急なるに氣を奪れ、思量こゝに及ばざりけり。我今平生の手段を夫人に見すべしとて、頓て門を開けて大に吼罵云ひけるは、武大郎汝必ず率爾に來ることなかれ。若し我が言を用ひずんば、立ち所に後悔至るべきぞ。武大郎之を聞いて大いに怒り、忙しく走り倚つて西門慶を捉へんとせし處に、西門慶早く右の足を飛ばせて武大郎が心寫の上を蹋たりしかば、武大郎忽ち眼を眩して地上に倒れけり。西門慶これを見て急に門外に走り出ければ、鄆哥も此勢ひに怕れ、遂に王婆を捨て立ち去りけり。此時左右近鄰すべて此ことを知りけれ共、西門慶が猛勇に恐れて一人も出合ふ者無かりけり。王婆は武大郎が倒れたるを見て大に駭き、急に扶起してこれを見けるに、顏色土のごとくにして口中に血を吐きければ、王婆忙しく彼妻を呼んで、武大郎が口の中に水を沃入漸救ひ起し、兩人の女遂に武大郎を擡起て私宅に歸り、乃ち樓の上に床を設けて臥さしめけり。翌日西門慶暗に事なきを伺ひ知つて、再び王婆が家に來り、猶又彼女と擅に相娛で、只顧武大郎が死せんことを願ひけり。武大郎は已に五七日臥しけれども、胸の痛ます〳〵盛んなりしかば、自ら大いにこれを苦しみ、彼妻に問うて湯を求むれども湯を與へず、求を求むれども水を與へず、猶更飢渴の憂を加へけり。彼妻は毎日粧を飾りて王婆が家に行き、回るごとに、酒に醉ざることなかりければ、武大郎是を見て毎度大いに怒つて氣を失ひしかども、一人も看病する者なきゆゑ、武大益々大いに嘆じて、

彼妻を呼んで云ひけるは、汝奸夫を求めたること世間の人皆これを知る者多し。我此故に奸夫を捉へんとしける處に、汝彼奸夫をして我胸を蹋しめ、今に至つて生を求むれども生を得ず、死を求むれども死を得ず、苦しみ萬千にしてかくのごとく身心を惱ましむ。汝等兩人尤も樂みをなして快かるべけれ共、若し我死することあらば、我弟武松いかんぞ此仇を報せざらんや。汝も知る如く、武松は是虎を打殺せし勇力の豪傑なり。汝もしよく我を看病して快氣を遂げしむることあらば、武松今回り來るとも、我此事を沙汰すまじ。若し汝我を看病せずんば、我武松が歸るを待ちて、此度の事一々詳かに彼に告ぐべきぞ。彼妻此言を聞きしかども、一言も答へずして頓て又王婆が家に來り、乃ち西門慶に對して、武大郎が云ひしことを具く告げければ、西門慶これを聞いて大きに駭きて云く、我老早景陽岡にて虎を殺せし武都頭が名を聞き及べり。彼はもと清河縣に於て第一の豪傑なり。彼若し我等が做所を聞きなば、終に事の敗れに至るべし。然れ共汝と恩愛の日久しうして、互の想ひ已に骨髓に染徹りしかば、今更緣を斷んこと能ふまじ。只恨らくは何の計を以てか此禍を脫れんや。王婆冷笑つて云く、汝兩人は何故甚だ慌忙給ふや。毛頭我は憂ることなし。西門慶が云く、我專ら計を思案すといへども、尙行はん計なし。汝若し良しき計あらば速かにこれを行うて、我等が禍を脫れしめんや。王婆が云く、兩人は長く夫婦とならんと思ふや、短く夫婦とならんと思ふや。西門慶が云く、長く夫婦となし短く夫婦となすとの義は、いかなる緣故ぞや、汝且是を說いて聞かしめよ。

王婆が云く、汝兩人短く夫婦をなさんと思ひ給はゞ、今日先緣を斷給ひて、武大郎が病氣平復の日を待つて宜しく罪を謝し給へ。然らば武松回り來るとも、一點のこと有るまじ。後日もし武松遠國に出づる事あらば、其時再び來つて情を通じ給へ、是乃ち短く夫婦をなすものなり。若又長く夫婦をなさんと思ひ給はゞ、毎日一處に在て少しも怕れず娛み給へ。我已に神妙奇特の計あり。然れども等閑に敎んこと成りがたし。西門慶がいはく、汝已に臥龍が計あらば、速かにこれを行なうて夫婦全たからしめよ。我等は只長く夫婦をなさんことをのみ願ふなり。王婆が云く、已に各々所存かくあらば、我此計を申すべし。第一此計の內一つの物を用ひん。此一物他人の家には決してあらざれ共、天幸ひに大官人の家にあり。西門慶が云く、たとひ我眼睛を用ひんと云ふとも、我これを剜出し與ふべきに、實にいかなる物を用ゆるや。王婆が云く、武大郎病重ければ坐臥不自由なるに乘じ、手を下すべき間、大官人は早く家に歸りて、砒霜を持參し給へ。夫人は又一服の藥を求め給へ。然らば此內に砒霜を加へて、武大郎を殺し、乃ち其屍を火葬にし、踪跡もなく燒捨なば他日武松歸りたるとも、何の把柄有りてか、一句の言をいはんや。諺にも初嫁するときは親に從ひ、再ひ嫁するときは身に由るとこそ申なれ。たとひ大官人に嫁し給ふとも、武松何ぞこれを攔ることを得んや。凡そ夫の喪は一年にして滿候へば、其內は暗々に我家にて參會し給へ。喪已に滿なば、大官人の家に娶り給へ。是則ち長遠の夫婦にして老を偕にし歡びを同じうするものなり。しらず此計はいかん。西門慶大いに悅んでいはく、王婆が此計は誠に神妙奇特なり。古の語にも生快活を求めんと欲せば、須らく死の工夫を下すべしと云ふことあれば、只よろしく王婆が計に隨つて急にこれを行ふべし。王婆が云く、此計は草を斬て根を除くの道理なり。大官人は早く砒霜を取つて來り給へ。我は自ら夫人に手を下さしめまゐらせて、終に武大郎を殺すべし。若し事成就致さば、必ず重く我を謝し給へ。西門慶が云く、汝を謝せんことは何ぞ汝が催促を俟んや。我自ら能くこれを曉せし間、汝は只心を安んじ計を行ふべし。我少刻砒霜を取りて來らんと、竟に王婆が家を出て私宅へ馳歸りぬ。王婆が計に仍て、遂に潘金蓮其夫を鴆殺する始末、次の卷を見て明かならん。

三編卷之四

淫婦武大郎を藥鴆す

王婆が啜むる計を傾し、西門慶忽ち我家に馳、再び入り來て一包の砒霜を持ち來り、王婆に渡しければ、王婆彼の女に對ひ、藥を用ひん法式を敎へ申さん間、能く是を以て仕おふせ給へ。今武大は深く夫人を怨み怨れば、常の體にて藥を勸るとも、彼反て疑って用ゆまじければ、先僞て淚を流し罪を謝し、宜しく藥をも進め看病したきよしを云ひ給へ。武大もし是を信じ藥を用ひんといはゞ、其時此の砒霜を藥の內に入れて用ひしめ給へ。彼一口用ひて遲疑することあらば、夫人自ら力を盡して、藥を彼が口中へ灌ぎ入れ給へ。毒藥轉る時に於ては五臟六腑都て迸斷るゝごとくならん。然れば必定聲を揚て喊ぶべし。夫人又被を把て蓋ひ、其叫ぶ聲外に漏ず、聞く人なからんやうに計ひ候へ。豫じめ又湯を滾し置き給へ。毒藥發すれば必ず目口鼻より血流るべければ、宜しく布を湯に浸し悉く是を抹ひ取り、一點も血の痕なき樣にしてこれを棺椁に收め、其後火葬して踪跡もなく燒棄なば、是れ爽利ことならずや。彼女が云く、此計究て蘊妙たりといへ共、只恐らくは我事に臨で駭き騷ぐことも有べければ、急に其屍を收拾ること能ふまじ。王婆がいはく、これ何の難きことあらん。其時に至らば

壁を敲き給へ。我其壁の響を聞かば早速來て夫人を助け、共に屍を收拾め申べし。西門慶が云く、汝兩人心を用ひよく做就べし。我明日五更の時分に來つて、消息を求んとて、其日は遂に回りけり。王婆は彼の砒霜を自ら手の內に捻り、これを細末となし、遂に彼女に與へければ、女はこれを取て私宅に歸り、暗に樓に上り武大郎が寢間をみるに、武大郎は病倍重く大に苦しみ居たり。此時彼女床近く前寄只顧淚を流し哭きければ、武大これをみて云ひるは、汝は何ゆゑ斯流涕するや。彼女淚を拭て云ひるは、我向に不圖彼漢子に誑れて、我夫に斯苦みを請しめ申し、今更後悔萬千なり。願くは我が爲に平復して給れ。我れ實に藥をも進めまゐらせんと思へ共、若し疑ひもや有んと推量つて、強申さゞるなり。武大郎頗る悅で云く、汝實に心を改て我に藥をも用ひしめ、看病せんには、我何ぞ汝を恨ることあらんや。縱ひ武松回りたりとも、我決して何事も沙汰すまじ。汝速に心痛の藥を求めて我に服さしめよ。彼女が云く、我夫罪を赦し給ふ上は、我何ぞ怠慢ことあらんや。少刻藥を求めて來らんとて、再び王婆が家に至て一貼の末藥を求め、立ち歸て其藥を武大に見せしめて云く、此藥は是心痛を治するの藥なり。彼大醫の申されけるは、半夜の比此藥を用ひて裀を厚くし一睡せば、果して汗多く發すべし。汗だに發しなば、早速快らんとなり。武大郎悅で云く、汝非を改めてかくのごとく我を看病すること、我家の福なり。今宵半夜に至りなば、怠なく藥を用ひしめよ。彼女が云く我夫心を安んじ歇給へ。我自ら能く怠ること有まじ。此時天色已に暮ければ、彼女頓て一鍋の湯を滾

して、暗に時の至るを待ける處に、はや三更の鐘も四方に響しかば、彼女砒霜を鍾の内に入れ、別に又一碗の白湯を呑直ちに樓に上つて、武大郎に對し云ひけるは、最前の末藥は何れの所にありや。武大郎が云く、我枕頭の下に有べきに、早くこれを取て我に與へ用しめよ。彼女卽ち枕頭の下より藥を取り出して、是も又鍾の内に入れ、其上に又彼白湯を傾入て、銀の簪を用つて攪拌、乃ち是を武大郎に與へければ、一口用ひて云ひけるは、此藥甚だ用ひがたし。彼女がいはく、凡そ藥用ひがたきもの なり。强て用ひなば早速快かるべきに、必ず遲々し給ふことなかれ。武大郎實にもと思ひ、第二口を用んとせし處に、彼女勢ひに乘じ彼一鍾の毒藥盡く武大郎が口中に灌ぎ入れければ、一滴も遺さず咽喉の内に呑下、忽ち大に苦んで云けるは、恠哉此藥を飲と齊しく、五臟六腑迸斷るゝがごとし。苦しやな禁がたしとて、已に一聲叫びしかば、彼女忙はしく被を把て武大郎を蓋ひけるに、武大郎いよいよ苦んで云く、汝何ゆゑ斯我を氣鬱せしむるや。彼女が云く、大醫の申されけるは、褪を厚くし汗を發せしめば、早速快らんとなれば、暫く氣鬱に勝給へ。武大郎益　苦んで叫んとしけれども、彼女又武大が上に跨り騎つて力に信せ壓へければ、武大郎此時僅二聲を喊んで、遂に淫婦が手裡に死にけり。彼女武大郎が動かざるを窺ひ、卽ち被を除てこれをみるに、哀なるかな武大郎は、目口鼻より血を流し牙を咬んで死しければ、彼妻頓て相鬪の壁を敲きける處に、王婆此響を聞き、早速後門に來りければ、彼女樓を下り後門を開き、則ち王婆に對して云けるは、武大郎は已に死しけれ共、果して我手足漸疲れ、屍を收拾ん氣力なし。汝宜しく我を助け早く屍を藏し給へ。王婆が云く、是何の難きことあらん。我自ら是を收拾んとて、遂に衣の袖を捲起て、一桶の湯を呑又一副の布を湯の内に浸して、樓に跳登り、彼被を引開けて、武大郎が面上の血の痕を盡く拭ひ取て、新しき衣服を用て是を蓋ひ、兩人の女頓て屍を擡起て、樓の下に移し、乃ち新しき被褥等を用ひて牀の上に臥さしめ、再び樓に登て、彼血に汚れたる臥具等こと〴〵く櫃の内に藏し入れ、事全く調りしかば、王婆は先己が家に歸りけり。彼女は詐て終夜哭き悲み、直に五更の天になりしかば、西門慶王婆が家に來りて、消息を問ける處に、王婆一々語り、頓て彼女を招き商議しければ、彼女が云く、武大郎は已に死したれば、我身の上のことは獨大官人を賴のみなり。諸事我がために宜しく發落給れ。西門慶が云く、汝何ぞ心を安んせざるや。何事も我都て宜しく發落べき間、少しも憂ることなかれ。王婆が云く、こゝに一つの大儀有りて、我心いまだ安んせず。當地の團頭何九叔は、原來精細者なれば、若武大郎が死骸の明白ならざることを看ば、必定葬らしむまじ。いかなる計較を以てか、此難義を脫れんや。西門慶が云く、此事何の愁る所あらんや。彼何九叔は我常に憐憫を垂たるゆゑ、我が命を背くことなし。我宜しく彼に仰せて屍を葬らしめん。汝兩人心を安んせよ。王婆が云く、已にかくのごとくば、一刻も早く彼に仰せて事を穩ならしめ給へ。西門慶が云く、我自ら往て何九叔に命ずべければ、汝まづ棺椁を求めて屍を收めよとて、則ち十兩和の百目の銀を王婆に與へ、遂に自ら何九叔が家にぞ赴きけり。

此時東方已に白みければ、王婆自ら去て棺椁ならびに香燭、紙錢等を買調へて立歸り、乃ち彼女と共に、香燭を屍の前に供て、只顧伴て哭きければ、左右近隣これを聞て、皆吊問に來り、乃ち彼女に問うて云けるは、武大公は本いかなる病にて早速死し給ひしぞや。彼女哭き悲で告けるは、前日不圖心痛の病を患へしが、日々に重り遂に本復すること能ず、不幸にして昨夜三更の比死し去ぬとて、又雨雨と哭きけるにぞ、諸の近隣皆心中に疑ひけれども、これを問ふ者なく、只勸めて云ひけるは、死する人は是命數なれば、尤も留めがたし、必ず深く悲み給ひて、自ら心を惱し給ふことなかれ。彼妻詐てこれを謝しければ、諸の隣家ども各〳〵私宅に歸りけり。扨西門慶は圍頭何九叔が家を望んで行ける所に、幸ひ途中にて、想はず何九叔に適遇ければ、西門慶暗に悅び、乃ち何九叔を呼かけ、我汝に說話あり、我行く處に來らんや。何九叔が云く、大官人某に示し給はんことあらば、速に從ひ參るべし。西門慶大に悅び、乃ち何九叔を引て一間の酒店に至り、西門慶密事に、先樓の上に坐して、何九叔を呼んで坐せしめければ、何九叔大に讓りていはく、某は是何等の者なれば敢て大官人と座を對し申さんや。西門慶がいはく、汝何ゆゑ隔心の言を云ふや。必ず過て讓ることなかれとて、再三請て座已に定まりければ、酒店の小厮頓て酒食を供へ拿來る。此の時何九叔心中に疑ひて思ひけるは、此西門慶つひに我と共に酒を酌たることなし。今日斯我を欵待は、必定躊躇あらんと推察し、遂に盃を執て酒數巡に及び、西門慶袖の內より一錠十兩和の百目の銀を採出し、何九叔に與へて云く、汝且此銀

尺室脱履鞋

を笑納せよ。明日又重く謝すべきぞ。何九叔これを怪んで云く、某一點も力を盡し功を用ひしこともなく、何ゆゑ此銀を恵み給ふぞ。某殆ど此賜を領納仕がたし。先賜を受けて後命を承らんこと有べからず。西門慶が云く、九叔何ゆゑこれを辭するぞ。先此銀を收めなば其後我汝に一言を語るべし。何九叔が云く、大官人若事あらば宜しく示し給へ、敢て命に隨はん。西門慶が云く、我汝に說話せんと云ひしも、畢竟餘の義にあらず。今紫石街に居住して餅を賣る武大郎と云ふ者死しけるが、少刻汝を請て火葬の事を議すべき間、武大郎が屍首に若し少しのこと有とも、我が爲にこれを穩便に治めて査照を加ることなかれ。何九叔が云く、某は只大事なるらんとこそ思ひつるに、這等の小事、何の利害かあらん。若し此事のみならば、某決して銀を受け申まじ。願くは大官人銀を收納め給へ。西門慶悅ずして云けるは、汝いかなれば、再四辭推に及ぶや。若彌〳〵銀を請ずんば、乃ち是我が賴を受ざる道理なり。汝若果して異心なくんば、速に銀を受けて我心を安んせしめよ。何九叔猶辭せんと思ひけれども、若西門慶が怒を惹出すことあらば、此人ゆゑ官府の役人共へ讒言せられ、不時の難義來らんことを恐れ、遂に已むことを得ずして、彼銀を請ければ、西門慶大に悅び、又盃を取て九叔に勸め、酒已に多く巡りければ、盃を收めて兩人酒店を立ち出で、西門慶重て云けるは、我が今云ひしことは只能く汝が心に收て、必ず他言すべからず。異日又重く汝を謝せんとて、遂に別れけり。何九叔心中に想ひけるは、西門慶故なくして我に十兩の銀を與ふるのみならず、他日又重く謝せんと約しけ

るは、此事多く蹟蹊あらん。且私宅に回り、彼武大郎が家より使の來るを待んと、遂に宿所を望んで一つの街を過し所に、手下の火家二三人來て告げるは、已に今紫石街の武大郎と云ふ者、病死せしゆゑこれを火葬にせんとて、彼家より使來れり。幸是より直に武大郎が家に往き給へ。何九叔是を聞て、すはやと思ひ遂に手下の火家等に引れ、武大郎が家の門前に至りし所に、先達て壹人の火家此處に相待ければ、何九叔先づ彼火家に問うて、武大郎は本何の病に因て死しけるぞや。彼火家答へて云く、武大郎が妻の云ひしを聞に、根心痛の病にて死たるとなり。何九叔これを聞て、遂に武大郎が家に至りければ、王婆忙しく九叔を迎へて云く、我久しく汝を待けるに、何ゆゑ遲く至り給ふぞや。何九叔が云く、某ちと用事有りて遲來せり。嘸待わび給ひつらんと云も畢らざるに、武大郎が妻一身に素服を着し、房間の内より哭出ければ、何九叔またこれを勸て云く、夫人過て悲み給ふことなかれ。死の道は貴き王孫公子といへども、是を脱れ給ふこと能ざるなり。彼妻佯てます〳〵泪を洒て云ひけるは、夫武大郎想ず心痛の病に臥、わづか數日の間に相果申ぬ。我悲み盡く是を云ふべからず。此時何九叔、彼妻が摸樣何とやらん他に異なるを見て、心中に想ひけるは、我日外人の云しを聞きぬるに、陽谷縣に不相應の物三つ有り。第一は永興寺の三門山門と書は非なりとぞ第二には陳員外が破衣、第三には武大郎が妻とやらん語りしを、隱々に記えけるが、果して此妻武大郎には應じがたし。西門慶が我に與へたる十兩の銀には、必定莫大の來歷あらん。我先武大郎が屍首を看んとて、遂に床の前に至て被を揭げ、又褥を開いて暫く屍首を看てありけるが、忽ち阿と叫んで暈倒れ、頻りに口中に血を噴て、面色漸々變じければ、一座に在りし者共大に驚き、各〳〵醫者よ打鍼科よと騒ぎけるが、何九叔が體たとはば三更に油盡て燈熄んとするに似たり、此者の姓命果していかんぞや。次を見て生死を知るべし。

郓哥大に授官廳を鬧す

何九叔眼を眩し倒れ人心地なければ、諸人大に驚きける處に、手下の火家ども急に何九叔を抱起し、醫者よ藥よと甚だ躁ぐ時、王婆が云、まづ暫く騒ぎ給ふことを止給へ。這は是邪氣に中り給ふならん。先急に水を沃ぐべしとて、水を把て九叔が口に灌ぎ入ける處に、漸々氣を得て甦しかば、王婆が云、先宜しく家に回らしめんとて、彼火家兩人に九叔を舁せ、直ちに私宅に送りければ、九叔が妻子等此體を見て大に驚き、且九叔を床の上に臥しめて、其妻一向流涕して云けるは、今朝出給ひし時は欣々然として出給ひしが、何ゆゑかく邪氣に中りて歸り給ひぬるぞ。只宜しく自ら氣を求め給へとて、猶頻りに哭ければ、何九叔微し眼を開て左右をみるに、手下の火家等已に歸つて別に人なかりしかば、九叔則ち妻を近く呼で云けるは、汝憂ることなかれ。我邪氣に中りしは都て詐てなせしことなり。起先に我街の邊にて生藥舗西門慶に遇ける處に、彼再三我を請て酒肆に往、乃ち十兩の銀を我に與へ云けるは、若武大郎が屍首に明白ならざること有とも、査照を加ることなかれと頼みけるゆゑ、我心中怪しみけれども、已ことを得ず領承し、遂に武大郎が家に往て、先彼妻をみるに、其模樣極めて不善

なりしゆゑ、我已に八九分これを疑うて、彼武大郎が死屍を看しに、其面紫色に腫て、目口より血流れ、上下の齒を咬緊牙微し露れ出けるが、必定毒に中て死したるに疑ひなし。我もと卽座に是を正んと思へ共、西門慶が賴を受、十兩の銀を領しけるゆゑ、先これを免して邪氣に中りし計をなしぬ。原來西門慶が賴を辭すべきが、此仁は官司上下に絕ず賄賂して勢ひを得たるゆゑ、讒言せられんを恐れ、止ことを得ず賴をうけ銀をも受納せり。されば共一つの難儀は、彼武大郎が舍弟武松と云者有。向に景陽岡にて虎を打殺し、今當地にて都頭の職をなし、縣裡に住す。其性專ら人を殺すことを好む勇力の豪傑なれば、彼今旅に出たれ共、明日にも歸り來り此ことを知覺せば、暫時に大事となるは治定せり。我是を恐るゝこと深し。妻が云、我も曾て人の云しを聞けるに、後街の喬老が兒子郓哥と云者、前日紫石街にて武大郎と共に好夫西門慶を捉へんとして、大に王婆が茶坊を鬧せしとなり。此度の事、必定此來歷ならめ。若此事を分明に知らんとならば、先手下の火家を遣し、武大郎が妻に喪を出すの日を問しめ給へ。彼もし武松が歸るを待て喪を出さんといはゞ、畢竟惡事有まじ。假令今喪行ふとも、若土葬にせんといはゞ、是又惡事有まじ。彼もし再三火葬にせんといはゞ、必ず惡事有べし。彼いよ〳〵近日に喪を出し火葬にすることあらば、丈夫暗に彼武大郎が身の骨一兩塊拾ひ取り、彼十兩の銀と一つにして藏し置給へ。然らば後日もし事の敗に至らんに、大なる證見とならん。武松もし歸て何ことも問ことなく穩ならば、彼十兩の銀も家內の使用に供へん。是一つながら全き計なり。

何九叔これを聞て大に悅び、家に賢妻あるときは、事敗れずと云古語ありけるが、果して今日のこと汝が計によつて兩全の議調れり。我急に手下の火家を遣すべしとて、則ち一兩人の火家を呼び、これに仰せて我今邪氣に中、武大郎が家に往かたければ、汝ら宜しく我に替つて、武大郎が家に馳、何れの日喪を行ふことやらん速に問來れ。火家等が云、何公は是所勞有ことなれば、必ず這等の事なんどを以て心を費し給ふことなかれ。我輩自ら馳て宜しく葬らしめんとて、遂に武大郎が家に到て、屍首を棺椁に收め、卽ち出喪の日を問けるに、彼妻答て、只三日の內に喪を行ふ。火葬にすべしと云しかば、火家等此言を聞て、再び何九叔が家に來て告しかば、何九叔密に妻を呼で云けるは、汝が云し言一點も差ず。三日の內に出喪火葬せんとのことなり。我其期に至らば、喪を送る體にもてなし、武大が骨一兩塊偸取べき間、假令後日事發るとも、必ず其禍を免るべしとて、夫婦暗に低言けり。扨て彼王婆は武大が妻を幇助て、其夜盡く相調へ、第二日に四人の僧を請て、阿彌陀經を念しめ、第三日早天に彼火家等自ら來て、棺椁を城外に擡出でければ、左右の近隣盡く相送る。彼妻心中には悅びけれども、故意棺椁に引傍て哭悲み、遂に化人場の內に入しかば、頓て棺椁に火を著んとしける處に、何九叔手に一束の錢紙を提て、化人場の內に入ければ、王婆これを見て、彼妻と共に九叔を迎へていひけるは、何公は前日は邪氣に中り給ひたりしが、はや快氣を得給ふは幸ひの至りなり。九叔が云、我前日は不慮に列位の心配に預れり。醫療の効を以て早快方に成りしかども、歩行いまだ意

に任せず。我日外武大公の餅を買しに、其節價を償ざりし故、今此一束の錢紙を武大公の靈前に燒んため、これ迄送り申ぬ。王婆が云、何公は原來老實の人と聞つるに、果して詐ならず。何公彌力を合せて、宜しく火葬をなし給はれとて、遂に火家等を催して火を著しめければ、何九叔は一束の錢紙を燒了りて、則ち王婆に告げていひけるは、汝は武大郎の妻と共に先齋堂の内に入りて待給へ。我は跡に留まりて宜しく火葬を完了候はんとて、遂に王婆と妻とを齋堂の内に遣はし、己は私かに化人場の内に入て、兩塊の骨を拾ひ取り、乃はち傍の池水を汲み、是を洗ひける處に、其骨半は紫の色有て半は黑き色有。何九叔是を懷中に藏し、頓て齋堂の内に來りしかば、王婆深く何九叔を謝して云、今日は多く何公を勞しぬ。尙異日重く謝せん。先回りて休息し給へとて、各別れ私宅へ歸りけり。扨何九叔歸りて、彼骨を紙に包み、其上に年號月日并に喪を送り來りし彼近隣等が姓名を寫し、彼十兩の銀と共に櫃の内に藏置ぬ。扨又武大郎が妻は王婆に計り床の前に武大郎が位牌を設け、琉璃燈に火を點じ、香花等を供て、出入の人の眼目を掩ひ、毎日只樓の上に在て西門慶と俱に心の儘に樂を催しけるが、此より西門慶は家内の事を忘れて、數日武大郎が家に逗留して歸らざりしかば、一家の眷族大に憂、都て西門慶を恨る事限なし。西門慶は已に百念を捨て、唯一味に彼女を寵愛し、外人の曉すをも顧ず。女も又吊來る人も遠ければ、いつしか紅粉を粧ひ、髮簪の錫喪中に似合しからぬ風流を盡し、奸夫に戲れ暮せしは希有の淫婦なり。されば今に至て比隣の家のみにあらず、遠く在者迄誰しらぬはなかりけり。光陰箭の如くにして、又早く四十餘日を過しける處に、武松は東京の事を完了て、已に道中に馳出けるが、何とやらん身心安んせず、夜々の夢惡かりしかば、兄武大郎は恙なきやなど憂ひ思うて、頻りに道を急ぎける程に、三月の初遂に陽谷縣に着て、先縣裡に入、則ち知縣相公に見えて東京の首尾一々詳かに訴聞え、一封の返簡を呈しければ、知縣返簡を披讀して大に悅び、即座に於て武松を賞し重く賜あり。武松拜謝して己が房間に回て、粧束を更め直ちに紫石街を望で來りしかば、左右近隣武松を見て大に駭き、各手に汗を握り低言けるは、此武松は是勇力の豪傑にして然も能是非を決斷すること分明なり。若し彼武大郎が事を聞ば、いかばかりの大事に及んも測知られずとて、皆々舌を揮ひけり。武松は已に兄が家に到て内を見るに、禍子の前に靈牌を設けて亡夫武大郎が位靈と書記しければ、大に愕然想ひけるは、必定我が眼花つらんとて、忽ち眼を睜開て又暫く打望み頓て聲を放て呼りけるは、嫂々何れに居給ふや。武松今日歸りし故、兄に遇ん爲來れり。此時西門慶は彼女と共に樓に在て娛居たりけるが、今武松が呼りたる聲を聞、大に膽を消し、忙しく窓を爬出飛がごとく王婆が家へ逃去んとして、餘り急なれば迫屁と窮尿と下棄て辛くして遁れ、隣の茶坊より走出ぬ。女は慌答へ、叔々回り給ふか、少く相待給へ。逐付來らんとて、俄に水を把て面上の脂粉を洗落し、身の綉服を脫て素服を着し、詐て哭悲樓を下ければ、武松これを見て云く、嫂々且哭き給ふことなかれ。しらず我哥々は何れの時に死給ひぬるや。何の病にて誰人の療治を受、藥を用

ひられしぞ。女が云、汝の哥々は汝に別れ二十日計して後、不圖心痛の病を得られけるが、漸重り申せしゆゑ、種々醫療を盡して看病しけれども、終に驗なく僅か八九日病て死失られぬ。我哀み推察して給はれ。此時王婆も已に來て、妻と俱に詞を盡し、僞りを云ならぶる時、武松阿嫂に向て、我兄は昔より心痛の病氣もあらざりしが、いかんぞ心痛の病にて早速命を終られしならん。王婆が云、都頭あに聞給はずや、天に不測の風雲あり、人に暫時の禍福あり。誰かよく始終無事を保たんや。彼妻又武松に對して、幸ひに此王婆隣家に居給ふゆゑ、我を助けて諸事心を費ひ給りぬ。若し然らずんば誰か肯て我憂を分る人あらん。好々一禮を述て給り候へ。武松が云、兄の屍は何れの地に葬り給ひしぞ。阿嫂がいはく、我女性と云ひ、況や一人のことなれば、其節急に墓地を求ることも能はざりしゆゑ、止ことを得ずして火葬に致せり。武松が云、兄死れて幾七日を經るにや。答て、明後は卽ち斷七日にして四十九日なり。武松良沈吟し、阿嫂に向ひ、我は先宿所に歸り宜しく事を完て再び來らんとて、遂に縣裡に回り房間に入り、一身素服に改め、身邊に又一腰の刀を藏し、乃ち貳人の雜兵を從へ街に行き、靈前の料具、米麵、香燭等を買調へ、直ちに武大郎が家に到て門を敲しかば、彼妻自ら門を開て武松を迎へり。武松兩人の雜兵に命じて羹飯を安排させ、是を靈前へ供て、自ら香を撚り再三拜をなして云けるは、兄の陰魂未だ遠からざるに、我が云ことをよく聞給へ。兄此に在給ひし時は、其性懦弱なりしゆゑ、人皆兄を欺き侮る者多かりし。今日死し給ひぬるとも、其死全く分明ならず。もし他人に殺害せられ給ひしにも有ならば、早速一夢に托て我に告給へ。我兄の爲に仇を殺し、九泉の下を安んじまゐらすべし。必ず靈を現し給へとて、忽ち聲を放て大に哭ければ、左右の近隣此聲を聞て、各哀れを催しぬ。彼妻も伴てともに泪を洒ぎけり。夜も漸々更しかば、武松は靈前に在て睡り、彼妻は樓上に在て睡りたり。武松は心中悲み深き故、只顧歎息して眠ること能ず。忽ち再び起て席上に座しける處に、はや三更の鐘も耳に轟ぬ。武松再三嘆じて云けるは、我兄世に居給ひし時は、人皆其懦弱を侮りけるが、果して今日の死去何とやらん分明ならず。我心焉んぞ能是を安んせんやとて、頻りに疑ひを起しける處に、恠哉靈牌を設けたる床の下に、一陣の冷氣生じけるが、武松覺ず身の毛盡く豎しかば、武松這は恠やと、再び睛を定めて床の邊を望しに、朦朧に人影現れけるが、忽然として又化失ぬ。武松是を見て思ひけるは、今現れたる人影は、慥に我兄の形なり。只しらず是は夢か幻かとて、自ら心を納めて想道、我が兄の死去必然分明ならず。今形を現し給ふは定て寃のことを我に告んとこそ思はれしならん。然れ共兄の陰氣、我が陽氣に壓れ、詞を交すこと能はず、虛しく消え失給ひぬるよな。我もし兄の爲に仇人を搜し殺さずんば、何を以て孝悌の道を行んやとて、獨自ら牙咬をなしける處に、天色漸明かなれば、彼妻樓を下りて靈前に至り、乃ち武松に對して云ひけるは、叔々終夜嘸嘆き給ひつらん。武松が云、嫂々先座し給へ。我哥々は實に何の病にて死し給ひぬるぞ。彼妻が云、叔々何ぞはや忘れ給ひしぞ。夜來も已に語りしごとく、心痛の病を得て死給ひぬ。武松が

云、誰人の藥を用ひ給ひけるや。彼妻が云、隔壁の王婆を賴で心痛の藥を求めり。其藥の剩今になほ所持して玆にあり。武松が云、棺椁は誰を賴で買給ひしぞ。彼妻がいはく、是又隣の王婆を央て買申ぬ。棺椁を擡て化人場に往しは何者ぞや。彼妻が云、當地の團頭何九叔、殊更我を助け三四人の下火家を遣はし、棺椁を舁しめぬ。武松已にかくのごとくんば、都て是嫂々の力なり。我尤もこれを感心すること淺からず。我は且縣に回て來るべき間、瑠璃燈の光を絕し給ふことなかれとて、彼兩人の雜兵を從へ、遂に門外に馳出ければ、彼妻吻と息をぞ繼にけり。武松已に紫石街を離れ、兩人の雜兵に問けるは、汝兩人は團頭何九叔を識認けるや、我いまだ彼に對面せず。兩人の雜兵が云、都頭いかんぞはや忘れ給ひぬるや。都頭向に虎を殺し職を授り給ひし時、彼何九叔も已に來て都頭を賀しぬ。彼は今獅子街の南長遠橋の邊に住す。某ら原來識荆なり。武松が云、汝ら宜しく我を導て彼が家に至らしめよとて、遂に三人何九叔が門前に至りしかば、武松先簾を揭て何九叔家にありやと問けるに、何九叔は武松が來りしを見て、大に驚き騷ぎ、急に武大郎が兩塊の骨と、西門慶が十兩の銀とを袖の內に入て走り出で、武松を迎て云けるは、都頭は前日東京に上り給ひぬと聞けるに、何れの日歸り給ひしぞ。武松が云、我昨日回りぬ。汝に一句の言を問んと欲ひ特々此に到れり。汝我が爲に街の酒肆に來らんや。何九叔が云、あに尊命に遵はざらんやとて、頓て武松に從て一間の酒店に至りしかば、武松則ち九叔を延て內に入、座已に定りける處に、酒肆の小厮はや酒食を具へ携へ出ぬ。何九叔、武松に對して云、都頭何ゆゑ斯慇懃に管待給ふや。武松が云、汝先謝することを止て酒を酌べしとて、已に盃を執て勸めければ、何九叔一連に三盃を酌んで心中には武松が來意を猜しけれ共、敢て聲をもなさずして、只汗をぞ捏りけり。此時武松衣の下より、刀を拔出して手に持ければ、何九叔大に膽を消して、面の色土のごとくに變じけり。武松刀を捻て云けるは、我愚なりといへども、又能仇を報ることを知れり。九叔汝怕ずして、我兄武大郎が死たる緣故一々我に告よ。我決して汝に礙ることなかまじ。我若汝を傷ふならば、誓て大丈夫を做さじ。汝もし一句にても或は包み、もしくは差ふことあらば、今此刀を以て汝が身に三百の窟を明べきぞ。汝既に我が兄を火葬せしとなれば、其屍首をも看つらんに、聊にても躊躇あらば、委しく語れ。若彌遲疑することあらば、卽時に先汝を害し仇とせんとて、已に兩眼を睜開しかば、其勢ひ天神のごとくなり。何九叔此勢ひを看て大いに慄き、乃ち袖の內より一つの紙包を取出して云けるは、都頭怒りを息め給へ。此紙包は是大いなる證見なり。武松紙包を取てこれを披き看に、其內に兩塊の骨と、十兩の銀有ければ、武松問て云、汝是を以て證見とする其緣由はいかん。何九叔が云、某曾て委細のことは知らねども去る正月二十二日に某不圖街の邊にて縣前の生藥舖西門慶に行遇しが、彼再三某を請て酒店に至り、乃ち這十兩の銀を與へて、汝後刻武大郎が屍首を看ることあらん。必ず我が爲に其死首を査照ことなかれと申ぬ。某是を疑ひ、這銀を頻りに還さんとしけれ共、彼萬千詞を盡して强けるゆゑ、終に辭することを得ずして納め申ぬ。其後

武大公の家に到て、其屍首を看けるに、痛しい哉、武大公目口鼻より血流れ、上下の牙を咬緊て死給ひぬ。是則ち毒に中りて死給ひしに疑ひなし。某本査點を遂んと思ひぬれ共、武大公の爲に力を出す人なきゆゑ、且これを心に收め、今に其沙汰を致さず時を待ちぬ。其節武大公の妻申されけるは、心痛の病にて死れしと申されたるとなり。某其日邪氣に中たる體にもてなし、手下の火家等に扶られて家に歸りぬ。翌日又下火家等某に告て、武大郎が屍は第三日に出喪して彌火葬なりと申ゆゑ、故意喪を送る體にて、私に此骨を拾ひ取ぬ。今日此骨を取て證見とする所以は、此骨の色を見給へ。半は紫に半は黑し。此則ち毒に中りたる骨なり。殊に其紙の上に年號月日、幷に喪を送て來りし人々の姓名を書記せり。這はこれ我爲の口詞なり。望らくは都頭明らかに是を察し給へ。武松是を聞、益大に怒て問けるは、是必定姪婦が所爲ならん。唯しらず、其奸夫は何奴ぞや。何九叔が云、某も實正のことは知らざれども、日外人の云しを聞けるに、武大公已に奸夫を捉へんと欲して、菓を賣ふ鄆哥と云ふ少年者を語らひ給ひ、則ち間壁の王婆が店を大いに鬧し給ひぬるとなり。此事徧く遠近に流布して、人皆是を知れり。武松が云、既に鄆哥と云少年者あらば、速に是に問て事の實正を聞ん。汝も宜しく我に隨て來れとて、遂に酒店を出て鄆哥が家の前に至りけるに、此時鄆哥は手に竹籃を提げ東の方より宿所を望て回り來りければ、何九叔且呼つて云、いかに鄆哥汝は此都頭を識認たるや。鄆哥の云、此都頭向に虎を殺し給ひぬる時、我曾て識認申ぬ。今日我を尋ね給ふならん。其所以我略これを猜しけれ共、唯恨らくは我自ら六十有餘の老父を養ふゆゑ、專ら營に忙しうして、閑談致すべき暇なし。都頭もし果して用事あらば、異日再び來り給へ。武松是を聞て云けるは、汝は猶少年たりといへ共、老父に事へて能孝を盡すよな。我今汝に銀を與ふべし。暫時我に隨て談話せよとて、則ち五兩の銀を出して鄆哥に與ふ。鄆哥銀を收めて、心中に想ひけるは、此五兩の銀は凡二三ヶ月の家用に足べければ、我何ぞこれを辭することあらんやとて、則ち謝して云、都頭我に此銀を惠み給ふこと、誠に感激に勝がたし。我少刻來て都頭と談話すべき間、暫くこゝに相待給はれとて、早速家に回て銀を老父に與へ、再び來て云けるは、都頭もし我に問ひ給はんことあらば、速に承はらん。武松大に喜で云、已にかくのごとくば、我に隨ひ來れとて、遂に一間の酒店に至て、樓の上に座しければ、酒店の小厮酒肴を具へて持出る。武松先鄆哥に對していはく、汝は年幼しといへ共、倒て孝順の心あること尤も難得なり。我今汝を用ふべき所あるに、汝宜しく我爲に用られよ。然らば我又多く金銀を與へ、商賣の本錢となさすべきぞ。鄆哥が云、しらず都頭は何事によつて我を用ひ給はんとにや。武松が云、是他事にあらず、汝日外我が兄武大郎に力を添へ王婆が店に於て、奸夫を捉へんとしたる來歷はいかんぞや。詳にこれを告よ。鄆哥がいはく、此事は去ぬる正月十三日、一籃の梨を西門慶に賣んと思ひしに依て、彼家に行たるに、他出して家に在ざれば、跡を追うて遠近を尋ぬる內、一人の友に遇て西門慶を看ざりしやと問ければ、彼友が云、西門慶は今專ら紫石街の王婆が茶坊に在て、武

大郎が妻と娛をなす。汝若し用事あらば王婆が家に往て尋ねよと敎へたるゆゑ、早速王婆が方に至りて、西門慶を尋ねし處、別して惡むべきは王婆なり。我年の幼を侮て云けるは、汝少年者何ぞ卒爾のことを問や。西門慶とやらんは、我家に來りしことなし。汝若し再三問ば拳を與へんと罵りぬ。此故に我又彼等が樂をなすことを云て、聊王婆を辱めければ、王婆忽ち大に怒て、我を散々に打ぬ。某是を恨ること骨髓に徹、其日遂に這等のことを武大郎に告て商議を定め、翌日又武大郎と俱に王婆が家に往て、奸夫を捕へんとしける處に、西門慶却て武大郎の胸の上を踢たりしかば、武大郎遂に血を噴て、房間の口に倒れ給ひけるが、後五六日經ける處に、武大郎已に死去せらる。其死尤も分明ならず。都頭よく明らかに察し給へ。武松が云、此事彌謊りなきや。鄆哥冷咲ていはく、都頭何ゆゑ我言を疑ひ給ふや。我縱ひ官府に出たりとも、此言毛頭違變することあらじ。武松が云、既にかくのごとくんば、事まさに明白なり。我今縣裡に回りて此事を知縣の相公に訴ん。汝兩人我に隨て來れとて、乃ち何九叔と鄆哥とを引て、直ちに縣裡に回り、廳前に至りしかば、知縣これを見て問けるは、武都頭汝は何事を訴んと欲や。武松頓首して云、某に一人の兄武大郎と云者ありけるが、其妻西門慶と密通し、遂に毒藥を用て兄武大郎を殺しぬ。此の兩人の輩乃ち是證見なり。願くは相公明かに是を決行し給へ。知縣是を聞て、先何九叔鄆哥に問糺口詞を取り、早速縣吏等の役人どもを聚めて、決斷のことを議しける處に、縣吏以下の役人等、原來西門慶が賄賂を受けたる者どもなれば、私に使を西門慶が方に馳て、此事を告げしらせ、尙ほ且知縣に對して云けるは、此事卒爾に決斷し給ふことなかれ。恐らくは不實のことあらん。知縣其議に同じて云けるは、武松汝も縣裡に在つて都頭の職をもなす者なれば、定めて官府の法度も見聞いて辨へつらん。古の語にも盜賊を捕ふるには、其賊を見て捕へ、奸夫を捉ふには、其雙を見て捕ふと云ことあり。もしせめて汝の兄屍首あらば、猶事を正して奸夫を捉ふべけれども、武大郎が屍首は、已に燒捨たることなれば、何を以て正しき證見とせんや。其兩人の輩が云所、全く證見とするに足ず。汝自ら三思を加へて、宜しく此の訴訟を休めよ。此時武松彼骨と銀とを取り出して、願くは相公これを見給へ。是乃ち大いなる證見なり。知縣是を取て云けるは、汝今日は且房間に歸れ。もし行るべきことならば、汝が爲に奸夫を捕へて罪を問ふべきぞ。武松是を謝して遂に廳前を退き、彼何九叔鄆哥兩人の者を、尙己が房間に留置き、則ち酒食を設けて欵待けり。此日西門慶は此事を聞て大に驚き、私に人を縣裡に馳て、上下の役人に賄賂を送りければ、知縣を初めとして諸の役人も、悉皆西門慶を助けんとぞ思ひける。翌日武松又兩人の者を引て廳前に出ければ、知縣昨日の骨と銀とを武松に還して云、汝妄りに外人の云ことを聞て、西門慶を怨ることなかれ。此事尤も明白ならずして、西門慶を捉がたし。汝豈聞ずや、聖人の語に經目之事猶未眞ならずと宣ふことあるをや。汝必ず人の云背後言を信じて、事を惹出することなかれ。諸の役人等武松に對して云、人命の事は尤も大なる沙汰なれば、正しき證見なくんば、分明に決斷しがたし。

且此度は曲て諍り給へ。武松が云、相公既に我誣を准へ給はずんば、某自ら此事正し申べし。殊に今人命のことは大なる沙汰と各申さるれば、奸夫淫婦が命の重きことにや。我兄の命は我に於て重ければ、此上は止むことを得ず、我誣を我正すべきのみとて、廳を下て房間に回り、何九叔郭哥兩人を留置き、汝兩人暫く此に在て我をまて、我は少刻一つの事を完て來んとて、則ち兩人の雜兵從へ街の邊に馳出ぬ。是より武松何等の擧動をなすや、後卷に詳なり。

原本に、武松を武二と書る所多し。武大郎有て、其次の武松なれば、武氏の二男と云義なり。又百回本と七十回本を照し考るに、毎回標目大抵同じく、只金聖歎外書七十回の二十五回標目に、偷骨殖一何九送レ喪と、供二人頭一武二設レ祭と二箇を出し、傳文も大同小異なり。其後七十回までは、又粗相同じ。

三編卷之五

武松鬪て西門慶を殺す

武松は兩人の雜兵を具して、多く酒肴を買調へて武大郎が家に至りけり。此時彼妻は、武松が訴誣准ざるよしを聞いて大きに心を安んじ、少しも怕るゝ色なかりけり。武松かの妻に對して云く、明日は是亡兄の斷七日四十九日の事なり。よつて諸の近隣を請うて、酒を勸めたく思ふなり。彼妻が云く、我曾て近隣を勞したることもなきに、何ゆゑこれを請うて酒を勸め給ふや。武松がいはく、隣家悉く喪を送つて、化人場邊まで出たるとなれば、宜しく此勞を謝すべし。嫂々必ず禮を缺給ふことなかれとて、則ち靈前に香花、燈燭を供て云ひけるは、嫂々宜しく客の來るを待ちてこれを欵待給へ。我は自ら諸隣家を邀へ來らんとて、先づ隔壁の王婆が家に往きて彼を迎へければ、王婆が云く、都頭必ず心を費し給ふことなかれ。武松が云く、亡兄別して汝を勞したること多ければ、我尤も是を感ず。早々來り給へとて、遂に王婆を邀へ家に回り、乃ち彼妻に對して座し給へ。此時王婆も又武松が訴へ准はざるよしを聞きしかば、自ら心を安んじて云ひけるは、左も右も都頭の命に從ふべし。武松又右隣の姚文卿の家に至つて邀へければ、姚文卿がいはく、今日は少し家事忙しき間、願はくは免し給へ。武

松がいはく、一盞の淡酒を勸めんに、強て邀へ申すは反つて無禮に似たれ共、少しの間駕を移し給へ。姚文卿辭すること能はず、遂に來つて王婆が次に座しけり。武松又兩對面の趙仲銘、胡正卿を邀へて同じく座に即しむ。既にして武松又王婆に問うて云ひけるは、右隣第三間の家は誰なるぞや。王婆が云く、彼は是張公と申す人なり。武松が云く、我猶彼人をも迎へ來るべしとて、乃ち張公が家に至りければ、張公武松にまみえて云ひけるは、都頭何の事有りて某を訪ひ給ふぞ。武松が云、明日は亡兄斷七日なる故、一盃の淡酒を進め申さんに來臨を惠み給へ。張公が云く、我未だ都頭に一言の吊問も申さゞるに、いかんぞ敢て請ひに應じ申さんや。武松が云く、張公何ゆゑ隔心の言を云ひ給ふや、願はくは速かに來り給へとて、遂に邀へて家に回り、則ち姚文卿が次に座せしむ。諸の鄰家座已に定まりければ、武松頓て盃を執て、諸近鄰を勸めて云ひけるは、列位を邀へ申ぬといへども、何の欵待もこれなし。只强て酒を酌みて給はり候へとて、再三勸めて酒已に數盃巡りければ、胡正卿先づ別れを告げて云ひけるは、某今日は一つの事有りて忙はしき間、席を辭し申とて、已に立たんとせし處に、武松これを扯住て云く、汝既に來り給ふ上は、縱ひ忙はしきとも尙暫く座に列り給へとて、自ら酒を篩で勸めければ、胡正卿暗に想道、武松必ず好意を以て我輩を邀へつらんに、何ゆゑ又かくのごとく人の忙はしきをも顧ざるやとて、再三心中に恠みけり。既にして盃六七遍巡りける處に、武松則ち諸鄰家に對していはく、且盃を收め申べしとて、頓て兩人の雜兵に命じて盃盤を收めしめければ、此時諸の隣家已に座を立たんとしけるに、武松急にこれを攔り住めて云く、諸の高鄰猶暫時相控へ給へ、我一言を申すことあり。しらず此内に善文字を書く人ありや。姚文卿が云く、乃ち此胡正卿善く文字を書き申さるなり。武松が云く、胡公すでによく文字を書き給ふならば、我少し賴申し度きことありと、未だ云ひも終らずして、雙の袖を捲起げ、忽ち衣の下より一挺の刀を拔出しもち、乃ち兩眼を睜開て云ひけるは、某今寃を報んと欲す。諸の高鄰我ために證人となり給へ、必ず駭き給ふこと勿れとて、忙しく跳蒐つて彼阿嫂を捉へて壓へければ、王婆これを見て、大いに襲れ慄きける處に、武松又これを賺んで、王婆走ることなかれと罵りしかば、もろ〳〵近鄰おの〳〵面を見合はせ盡く色を失ひ怕れけり。武松がいはく、諸高鄰われを怪しみ給ふことなかれ。我はこれ鄆き村夫たりといへども、また能く寃あれば寃を報じ、仇あれば仇を報ず。願はくは列位回りたまふことなかれ。若し一人にても回らんとする人あらば、我必ずこれを怨むべし。衆人是を聞いて揮ひ慄くばかりなり。武松又王婆を罵て云く、賊老婆、汝我云ふことをよく聞け、我兄の性命都て汝が計ひに殺されぬ。我少刻詳かに問ふべしとて、又阿嫂を罵つて云く、汝淫婦好も敢へて我兄の命を害せしよな。汝宜しく謀の次第を一々白狀せよ。然らば饒さん。彼女が云く、叔々何ぞ自ら誤り給ふや、我が夫は心痛の病を得て死し申されしかば、我が干る所にあらず、叔々是を察し給へ。武松益怒り、頓て彼女を靈前に蹋倒し、則ち右の脚を擧て是を踏住め、又刀を以て彼王婆を指しして大に罵て云ひけるは、

汝賊老婆速かに實情を申せ、若し猶豫することあらば、忽ち此刀を飛ばせ汝が首を刎べきぞ。王婆大いに驚き、我實情を申べきに、願はくは都頭怒りを休給へ。武松急に彼雜兵に紙筆を出させ、胡正卿に對して云ひけるは、足下我が爲に彼王婆が云ふ言を寫し給へ。胡正卿甚だ怕れて云ひけるは、某敢て寫し申さんとて、已に筆を執起げ、また王婆に對し、汝早く實情を白狀せよ。我今都頭の爲に是を寫すべきぞ。彼王婆又心中に思ひけるは、我實情を白狀せば、必ず此席にて殺さるべし。且暫く抵賴んにはしかじとて、乃ち答へて云ひけるは、我今實情を申さんと云ひけれ共、此事我知りし事にあらざれば、別に申さんこともなし。願はくは列位我爲に罪を謝し給はり候へ。武松是を聞き大に怒つて云ひけるは、汝何ぞ此事を抵賴んとするや。我先づ淫婦を殺し、其後又汝を害し、天罰を受けしめんとて、乃ち刀を擧て彼女の面に一著著ければ、彼女大に慌忙て云く、叔々且我を放ち起し給へ我詳に白狀すべし。武松急に彼女を扯起し、遂に靈前に跪せて罵りけるは、淫婦早く實情を白狀せよ。彼女肝を消し魂を散らし、則ち彼日簾を取落して、西門慶が頭巾を打つてより以來、私情を通じたる事共、一々微細に語り、其後又藥の内に砒霜を加へて毒殺したること、始終詳に白狀したりしかば、武松胡正卿に白狀の言を書かしめ、又彼王婆を罵つて、賊老婆此上にも詐んや。老婆此時止ことを得ずして、遂に白狀しける處に、是又胡正卿に其言を寫さしめ、乃ち兩人の女が名を書かせ、其下に判を押しめ、武松又諸の隣家に對して云ひけるは、列位も證見人たる間、宜しく名判をする給へとて遂に諸近隣に判を押させ、頓て雜兵に命じ兩人の女を高手小手に綁しめ、靈前に引居、武松謹で武大郎が靈牌を拜して云く、愚弟武松今日兄の仇を殺して恨を雪ぎ申す間、九泉の下に於てもこれを悅び給へとて香を撚りければ、彼女この體を看て大きに驚き、すでに喊んとせし處を、武松急にこれを蹋倒し、遂に胸の上を一刀刺て五臟六腑を引出し靈前に供へ、回す刀にて女が首を刎しかば、血は流れて席上に溢れぬ。諸近隣是を見て大に恐れ、衆皆面色を失ひけり。武松又諸近隣に對して云けるは、列位再び樓上に登りて座し給へ。我尙一つの事を完つて少刻回るべし。諸隣家これを聞いて互に目を見合はせ、遂に皆々樓上に登りしかば、武松自ら王婆を引きて樓に登り、乃ち二人の雜兵に命じけるは、汝兩人必ず樓門を守りて、一人も出さしむることなかれ。我少停來るべしとて、外より樓門を關し、直ちに西門慶が藥舗に至つて、老主官に向ひ問うて云ひけるは、大官人は今家に在りや。主官答へて云く、主人は先に他出致されぬ。武松が云く、我汝に一言問はん。早く我に從て來れ。彼主官武松が勢ひの猛きを看て敢て背ず。遂に武松に引かれ、僻靜なる地に至りしかば、武松詞を荒らげて云ひけるは、汝は死せんことを欲するや、又活んことを欲するや。彼主官大きに驚き、某曾て都頭を犯したることなきに、何ゆゑかくのごときことを云ひ給ふや。武松が云く、汝もし活んことを欲するならば、西門慶が行く向を知らせよ。若し死せんと欲せば西門慶が行向を云ふことなかれ。彼主官が云く、我主人は今一人の友に引かれ、獅子橋の下の酒樓に在つて、酒を飲んで居らるゝなり。都頭

もし用事あらば、自ら尋ねて行き給へ。武松是を聞いて大きに悅び、飛ぶがごとく跳行しかば、彼主官此光景を見て、甚だ襲れ慄きけり。武松已に獅子橋の下の酒店に至つて、小厮に問ひけるは、西門慶は誰とともに酒を酌んで此所に在るや。小厮答へて云く、一人の友と酒興を催し、樓上に居給ふ。武松是を聞いて、直ちに樓上に登り、阿嫂が首を西門慶が面の上に投かけしかば、西門慶肝を消し、急に逃んとして窓の内より下を望みけるに、其下は遙の街なれば、跳下るゝこと能はずして、纔に猶豫しける處に、武松雷のごとく吼り跳蒐りしかば、西門慶が友これを見て、忽ち眼を眩かして倒れけり。西門慶今は脫れがたしとや思ひけん、忙しく右の足を飛ばせて蹋たりしかば、其足武松が右の手に中つて、武松が持ちたる刀を樓の下街の上に蹋落したり。武松刀を蹋落され大に怒り、彼虎を殺したる勢ひを揮て、電のごとく跳蒐り、則ち右の手を以て西門慶が肩脾を揪へ、左の手にては其兩足を握り、乃ち窓の内より街の上に望んで、力に任せて投落しければ、西門慶眞倒に成つて遙の下に落にけり。武松は元來武藝の達人にて身を跳しむるの術を善くしけるゆゑ、又彼阿嫂の首を拾ひ取つて、輕るゞと身を躍せて街の上へ跳下り、彼蹋落されたる刀を再び尋ね取上げ、西門慶が頸の上に當て罵りけるは、汝我兄を毒害したる天罰、まさに今想ひしらするものなりとて、終に頭を刎落し彼女が首と同じく頭髮を結び合せ、左の手に是を提、恰も奔雷のごとく吼て、再び紫石街の兄が家に回り、頓て二つの首を靈前に供て云ひけるは、我兄の靈魂早く天界に生じ給へ、我今日奸夫と淫婦とを殺して兄の仇を報じぬと奠了、則ち又雜兵に仰せ、諸の隣家を樓の下に邀はしめければ、隣家共皆王婆を拖て靈前に至りぬ。此時武松兩人の首を執て、諸の隣家に對して云ひけるは、我尙一句の言有つて、高隣の衆中へ語り申さんに、敢て聞き給はんや。諸隣家がいはく、都頭もし語り給はんことあらば、速かに示し給へ。某ら敢て命に從ふべしとて、衆皆一同に答へけり。

母夜叉孟州道にて人肉を賣る

此時武松は諸の隣家に對していはく、我今亡兄の爲に仇を報ひ、寃を雪ぎしことは、尤も理の當る所なれば縱ひ死すとも怨なし。只某諸高隣を駭かし申せしこと、願はくは是を恕し給へ。我已に罪を犯しぬる上は、存亡死生保んずまじき所あり。今日且家内の道具を變賣、官司へ出る時の使用に備へんと欲す。諸高隣我が爲にこれを變賣して給はり候へ。又我官司に出なば、もろ〳〵高隣の見給ひし所一々我に替て訴へ給へ。望むらくは勞を避給ふことなかれ。諸隣家是を聞いて、皆其意を領承し、頓て家内の道具を取出し、遂に是を變賣しかば、武松乃ち二つの首を手に提げ、諸隣家とともに縣裡を望んで馳せ來りぬ。此時街に出て見物する者數をしらず。知縣此事を聞いて大きに驚き、忙しく廳上に出ければ、武松は諸隣家とともに王婆を引いて廳下に至り、乃ち彼二つの首を堦の下に置き、武松は左の方に跪きければ、王婆は中央に引居、隣家共はこと〴〵く右の方に跪きぬ。武松頓て彼胡正卿が寫したる口詞を取り出し、一々詳に訴へければ、知縣先づ王婆に問ひける處、玉婆が白狀少し

も口詞に差はざりしかば、諸隣家も又其見聞きしたる處具さに訴へける。知縣又彼の何九叔と鄆哥とを呼び出だして、明白に其口詞を取り、早速下官許多兩所に分遣し、彼妻が屍首西門慶が屍首とを査點させ、且武松と王婆とに頸枷を枷て牢中に遣はし、其餘の者共は都て縣裏の役所に入れ置けり。扨知縣相公暗に想ひけるは、武松は原來義氣重き豪傑なり。況んや此度我が爲に東京に上り、事を完へて回りたる功勞も大いなり。我宜しく彼を救ふべしとて、則ち諸役人と商談して云ひけるは、我武松を見るに、義氣鐵石の英雄なれば、先づ死罪を免し、當縣の本府東平府に送つて、知府相公の決斷を求めんと思ふはいかん。諸の役人共誰か敢て知縣の言を背くべき。一同其議に伏しければ、知縣即日一通の文書を修へ、二人の下官をさし添、武松王婆ならびに何九叔、鄆哥、諸近隣盡く皆東平府に遣さんと議定しければ、縣中縣外の人民共、武松が勇を憐み、思ひ〳〵金銀を以て武松に餞しけり。武松は旅裝束の間を免され、房間に歸つて用意なし、頓て十四五兩の銀を鄆哥が親に送らしめ、都て全く調りしかば、兩人の下官武松ならびに何九叔等を催促し、其日遂に東平府に至りけり。此時府尹陳文昭已に廳上に出て、武松等を廳前に呼び入れ、且陽谷縣の文書を披き讀み、諸の口詞共を一覽し、獨明白に來歷を糺し、武松が罪を輕しと定め、先づ入牢させ、王婆が罪は重しとて、頸枷をかけて死罪人の牢中に押し入れしめ、何九叔、鄆哥ならびに諸の隣家共は、無事に陽谷縣に回しければ、西門慶が眷屬共は東京よりの決斷を待ち、暫く消息を窺つて居たりけり。扨陳府尹は武松が義あるを感じ是を憐み、常に人を馳せて武松を問はしめける間、牢守以下の者共、皆々武松を懇に介抱し、時時酒食を以て欵待ぬ。陳府尹ひそかに一通の密書を東京の刑部官等が方に送つて、武松が死罪を赦したきよし、賴遣しければ、刑部官等原來陳府尹と親しきゆゑ、早速省院官に告げ、武松が罪を流罪に議定し、其日文書を修へて東平府に下しければ、陳府尹文書をみて悅び、急に陽谷縣へ人を馳せて、西門慶が眷屬、幷に何九叔、鄆哥及び諸近隣等を再び東平府に呼寄せ、則ち廳前に於て東京より下りし文書を諸人に讀聞しめ、武松を輕く四十杖策て面に刺黥し、七斤半の頸枷をかけ、孟州に流罪せしめ、諸證正人ならびに、西門慶が眷屬等は事なく縣に回らしめ、王婆は街中を引渡して斬罪に行ひけり。隣家共は家財變賣せし銀子を武松に與へ、遂に各別ければ、武松は二人の下官と共に、東平府を出て孟州へ赴きけるが、二人の下官原來武松が豪傑たること隱なければ、道中慇懃に事へ、少しも怠惰のことなく、武松も又其懇情を感じ、此村彼里に於て多く酒肉を與へければ、兩人の下官彌悅んで、共に心を傾けぬ。武松二月の初めに仇を殺し、二ケ月餘り牢中にあり。今孟州路へ出づれば、六月の前後にして炎暑勝がたきまゝ、毎日朝涼に乘じて路を急ぎ、約莫二十餘日馳せける處に、一つの大路に至りて嶺の上に登りしかば、時已に巳の刻なり。武松兩人の下官に對して云ひけるは、且暫く此所に休息し、嶺を下り若し酒店あらば酒肉を調へ食すべし。兩人の下官然りと同じ、暫らく嶺上に歇て、遂に麓に下り來り、其邊を望みけるに、遙の坂の下に僅か十餘間の草屋、盡く溪に傍て

ありけるが、柳の樹の上に一つの酒帟掛しかば、武松これを見て云ひけるは、彼所に酒帟を掛けるは必定酒店有るらん。早く往きて酒を汲べきに、我に跟て來れとて、忙はしく嶺を下つて來りける處に、岡の邊に一人の樵夫柴を荷うて過りしかば、武松是に問うて云く、此より孟州へは尙幾ばくの路ありや。樵夫答へて、僅かに一里の路あり。武松又問うて云く、此處の地名は何と申すや。樵夫が云ぐ、嶺の下に見えし大樹林は、則ち是れ十字坡と申して有名の地なり。武松此時兩人の下官共に、十字坡の邊に至つて樹林を見るに、第一の大樹は凡そ六人圍もありしかば、武松是を希有の大木なりと賞し、已に酒店の前に至つて此所をみるに、酒店の內に一人の女座しけるが、頭の上には鐵環を插し、鬢の邊には野花を挿しぬ。此女已に武松等三人門前に至りぬるを見て、急に出迎て云ひけるは、客官暫く憩み給へ。我が店には、美酒、美肴、菜包、肉包等も賣へば、望みに任せて食し給へ。武松是を聞いて、兩人の下官と供に店の內に入りければ、彼女遂に三人の者を延て、後堂に座せしめけり。抑此女何者なれば、菜園子張靑が妻母夜叉孫二娘とて、蒙汗藥の酒を賣つて旅人を醉しめ殺して、行李衣類等を奪ひ、殺せし肉を切取つて肉包に製へ、是も商物となす、希有の婦人とは、さらに知れざりしなり。

武都頭十字坡にて張靑に遇ふ

流人武松酒店の後堂に入て座しければ、下官が云く、此處は別に人のみるにもあらず、宜しく都頭の頸枷を除て、休息致させ候はんとて、遂に枷を外しければ、武松大いに悅び、乃ち窓に倚て疲を慰めて居ける處に、彼女滿面に咲を含んで云ひけるは、客官幾何の酒を沽給ふや。武松が云く、幾ばくを論せず、只願に昏來れ。肉あらば是又三五斤を切て出すべし。彼女又問うて云く、肉包は用ひ給はんや。武松が云く、是も同じく二三十携へ來れ。彼女呵々と打笑つて內に入り、頓て一桶の酒と一盤の肉とを携へ出て云く、客自ら酒を勸め給へと、酒已に五七椀篩ければ、又肉包を持て座上に出ける處に、武松先是を執て二つに開、乃ち其內を見て云けるは、此肉包は人肉を用ひぬるや。彼女打咲つて云く、客官戲れを云ひ給ふことなかれ。今の世に何ぞ人肉の肉包あらんや。我家の肉包は先祖より牛肉を以て製し候なり。武松が云く、我多年旅中に在て、人の云しを聞ぬるに、大樹林十字坡の輩は、專ら旅人を害し其肉を用ひて肉包を作るとなり。汝必ず我を誑くことなかれ。彼女が云く、客官何ぞかやうのことを云ひ給ふや。我が此處は古へより淸平の地にして、曾て人を害したることなきなり。武松がいはく、我此肉包の內を見るに、人の頭髮あり。是によつて、我是を疑ふ。且汝が夫は何故家に在ざるや。彼女が云く、我夫は商賣の爲、頃日外鄕にいでて未だ家には回らざるなり。武松が云く、已にかくのごとくんば、汝獨り膝を抱いて嘸寂寞からん。彼女笑を含んで暗に想ひけるは、這配軍自ら死をいたすことをしらずして、かへつて我を戲るゝは、是乃ち夏の蟲火を撲、燔を惹いて自ら身を燒に似たり。我終に汝を害すべきものをと、乃ち打笑て云けるは、客官

戯れを云給ふことなかれ。且此處は風曾て來らざれば、後園の樹下に座して乘凉給はんや。もし晩なば乃ち我家に歇み候へ。武松心中に想ひけるは、此女必定惡心を夾んで、我を留むるに疑ひなし。我却つて先彼を試んと、再び彼女に問て云けるは、汝が家の此酒は、甚だ淡うして用ひがたし。別に又美酒あらば是を出さんや。彼女がいはく、我家に尚一種上々の美酒あれ共、唯少し渾れるゆゑ、妄りに是を出さゞるなり。武松が云く、其濁る酒こそいよ〳〵味よきものなり。汝速にこれを出せ。彼の女是を聞て暗に悅び、遂に一瓶の濁酒を拿出ければ、武松これを見て云けるは、此酒極めて美なるべし。凡濁酒は熱くして飲時はいよ〳〵味好、汝是を溫めて來らんや。彼女が云く、客官の宣ふごとく、此酒は熱くして飲時は味ます〳〵美なり。少刻溫めて來らんとて、自ら心中に思ひけるは、此酒の內には蒙汗藥を入置けるが、熱く溫る時は毒藥いよ〳〵其驗疾し。彼自ら熱きを好むは死を急ぐ道理なり。我遂に是を殺すべきものをとて、頓て酒を溫め拿來り、則ちこれを三碗に篩て、武松等三人を勸めて云けるは、客官試に是を酌て味ひ給へ。兩人の下官是を聞て大いに悅び、急に盃を執て飲乾ければ、武松も執上げて彼女に對し云けるは、我は原來肴なき酒を飲こと能はず。別に又肴あらば、我に與へ用ひしめんや。彼女が云く、尙牛肉を與へ申さんとて、頓て座を立て出ければ、武松忙はしく盃の酒を把て傍にある器の內に潑し入、故意舌打して云けるは、此酒味ひ狠き美酒なり。最能人を醉しむと呼はりければ、彼女此聲を聞て急に走り入り、則ち手を拍て、汝ら早く倒れよと未だ云も了らざるに、彼兩人の下官忽ち渾身麻れて、席上に倒れければ、武松も又詐て眼を閉終に盃を棄てて打倒れぬ。彼女呵々と打笑つて云く、汝ら縱ひ鐵石の身たりとも、いかんぞよく我酒の毒に中らざらんやとて、乃ち小二、小三と云二人の後生を呼出し、彼兩人の下官を堂の後に扛入らしめ、彼女は自ら三人の者が包袱蘊を採つて只顧拈り見て云けるは、此內には正しく金銀多く有と覺えたり。今日の得采尤大吉利市と喜悅して、遂に包袱蘊を收めける處に、兩人の後生再び出て武松を扛起さんとしけれども、恰も千萬斤の重きごとくにして動すこと能はざりしかば、彼女是を見て、大いに焦燥、汝兩人何ぞ彼一人を扛上ること能はざるや、我是を拖上て見せんとて、遂に武松が前に至つて、輕々と扛起さんとせし處に、武松急に双手を伸して彼女を胸の上に抱上げ、猶兩腿を開いて彼女が腰の邊を挾み、乃ち勢ひに乘じて緊ければ、彼女少しも動き働くことあたはず、大きに驚きて喊びければ、彼兩人の後生急に來つて助けんとせし處に、武松大きに吼つて、近き倚らば摑殺さんと罵しりければ、兩人の後生此聲を聞いて、偏に只呆れたる許りなり。彼女自ら罪を謝して云けるは、我誤つて豪傑を犯せり。願はくは豪傑我を饒して放ち給へと、纔に云了らんとせし處に、一人の漢子外面より走り入て、只顧呼はつて云けるは、豪傑怒を息て其女を饒し給へ。我自ら說話することあり。武松これを聞て急に跳起き、彼女を左りの脚に踏着、雙の手は拳を揑て彼漢子をみるに、頭には紗の四面金を戴き、身には布の短袖袗を着し、面の色黑くして微し鬚あり。年の比は三十五六歲許

りなり。彼漢子武松を見て慇懃に手を束ね云けるは、「願くは豪傑の尊姓大名を承らん。武松が云く、我は是陽谷縣の都頭武松と云者なり。彼漢子が云く、景陽岡の上にて虎を殺し給ひぬる武都頭にてはあらずや。武松が云く、我乃ち其武都頭なり。彼漢子これを聞て、忙はしく拜をなして云く、某都頭の大名を慕ふこと日既に久し。今日何の幸ひに依て尊顔を拜するや。武松が云く、汝は此女の夫なるか。答へて云く、其女は實に某が妻なり。彼眼有といへども、眞の豪傑を識らずして妄りに威風を犯し申ぬ。願くは某が心の誠あるを顧給ひて、愚妻が科を赦し給へ。武松彼が斯慇懃なるを見て、忙はしく女を放ち起し云けるは、我熟々汝夫婦をみるに、尤等閑の人にあらず、願くは姓名を聞ん。漢子先妻に對し云けるは、汝速に都頭を拜して、宜しく罪を謝せよ。武松是を聞て云く、我一時の怒りに乘じ、夫人を痛めたり。望らくは怨み給ふことなかれ。彼妻急に拜をなして云く、我肉眼眞の英雄を識ずして嚴威を冒し申せしこと、今更後悔極りなし。願くは只罪を宥し給へ。彼漢子が云く、先宜しく草廳に移りて、談話致し申さんとて、遂に武松を延て草廳に至り、賓主座已に定まりければ、武松又云く、願くは先汝夫婦の姓名を報じ給へ。彼漢子が云く、某姓は張名は青と申し、原此邊の光明寺と云寺に在て菜園を預りて居候へども、不圖僧衆と爭ひを做出し、寺中を燒拂ひ、其後此大樹坡の下に徘徊し、強盜をなせしに、一日一人の老翁に遇てこれを剝取んとせしに、此老翁武藝の達者にて、某と三十餘合戰ひ、つひに某を打倒しぬ。此老翁も又壯年の時より強盜をなして、武藝を熟練したるなり。彼某が働活動なりしとて、遂に某を引て城下に回り、己が武藝の秘術を盡く某に傳へ、又此女を某に嫁せしめて、親子の緣を結びぬ。某原來城下の住居を好まざりしゆゑ、再び此處に移りて、酒を商賣するを家業と名付、若旅人貨多き者過る時は、酒の内に蒙汗藥を入て飲しめ、遂に其命を害して貨を奪ひ取、又其人肉を牛肉と名付て肉包を製り、某毎日これを村中に携へて賣ひせり。某以前より天下の豪傑と交りを結びしゆゑ、豪傑ら我を呼で、菜園子張青と申ぬ。我妻は姓は孫父が武藝を傳へ、又聊力量あり。人皆彼を呼て母夜叉孫二娘と申。彼が父は三四年以前死去致しぬ。其名を山夜叉孫元と號して、天下に名高き豪傑にて候ひき。某今村中より回りて内に入し處に、愚妻が再三呼はり喊ぶを聞いて、何事やらんと驚き見しに、想はず都頭に相見え、自ら雀躍に勝ざるなり。某常に牢く愚妻に命じて殺さしめぬ人三つあり。第一は雲遊の僧なり。雲遊の僧は多くは方々に流落、艱難を受るものなり。況や出家のことなれば豈あへてこれを殺すに忍びんや。向にも已に天地を驚しむるごとき豪傑を殺さんとせし、此人は原是延安府老种經略相公の提轄官姓は魯名は達と云て、只三拳を加へ人を打殺したる故、五臺山に上りて出家を遂ぬ。彼が身中に花を刺繍しけるに依て、人皆彼を呼で花和尚魯智深と申、此僧一つの禪杖を使得たること最も神妙なり。乃ち禪杖の重さ六十斤許りもあらん。彼も向に此所を過りて、我店に入しゆゑ、愚妻又酒の内に蒙汗藥を入、遂に毒に中らせ、後の空房に扛入、これを害せんとしける處に、幸ひに我回りて先彼禪杖を見

たるに、等閑の輩の用ゆべき禪杖にあらざりし故、某急に毒を消藥を口中に灌入れて、再び救ひ起し、竟に某と義を結んで兄弟の盟を誓ひぬ。今はかの二龍山寶珠寺に在て、青面獸楊志とやらん云者と共に、强盜の頭領をなして居けるが、毎度書を寄せて我を山陣に招くといへ共、我尙未だ往こと能はずして、其招に應せざるなり。武松が云く、我も旅中に在て魯達の大名を聞こと久し。彼は是眞の英雄なり。張青が云く、我又愚妻に命じ第二に殺さしめざる人は、專ら今世間に往來する妓女婊子の類なり。此輩は皆客を敬ひ舞を奏、十分に慇懃の心を盡して僅の銀を求むる者なれば、豈能これを殺さんや。若我彼輩を殺さば、天下の豪傑に嘲り咲はるべし。又第三に殺さしめざる者は、配所に赴く流人なり。流人の內には儘豪傑多し。若誤つて誠の豪傑を殺さば、某一世の後悔なり。然るに愚妻我が言を用ひずして、今日又都頭を殺さんと欲せしこと、是大いなる過なり。若我片時遲く回りなば、何を以てか我此一片の心を露さんや。母夜叉孫二娘がいはく、我も本都頭を害すべきとは思はざりしか共、第一都頭の包袱の重きを見、第二には都頭我を戲れ給ひしゆゑ、我不圖怒りを起して已に毒酒を進めたり。武松が云く、我は實に是鐵石の心にて女に戲れを云たることなし。然れ共夫人再三眼を留めて我包袱を看給ひしに依て、我先これを疑ひ、故意戲れを云て、我心に油斷ある體を夫人に見せぬ。我老早彼酒には毒あることを知つて暗にこれを捨、詐りて毒に中りし模樣を致しければ、夫人果して我を害せんとせられしゆゑ、我勢ひに乘じて夫人を駭しめり。彼渾りし酒器に移し有を見給へ。張青これを聞いて呵々と打笑ひ、已に酒宴を設け、武松を欵待けり。武松が云く、張公かくのごとく懇情を垂給ふ上に、彼兩人の下官をも助け給はんや。張青が云く、我少し所存ある間、都頭先づ我人を宰所を見給へとて、乃ち武松を引き、人を殺す空房の內に入る。武松此處を見るに、壁の上には許多の人の皮を掛、梁の上には五七對の人の腿を吊けるが、其血臭きこと、鼻を襲うて勝ず。彼兩人の下官ははや人を宰殺の上に有ければ、武松則ち張青に對し、張公我爲にはやく是を助け給へ。張青が云く、彼を救んことは何より最易し、まづ都頭の犯し給ひし罪の次第を語り給へ。我豫じめ是を聞て、其後彼を助ることを商議すべし。某頗る所存あるゆゑ、先づ下官等を助けざるなり。武松是を聞て、彼西門慶と阿嫂を殺し兄の仇を報せし次第、知縣の查照心に任せざりし樣子迄具さに語りければ、張青夫婦大に感歎しけるが、張青が云く、我今一句の言を以て、都頭に勸め申さんに、しらず領承し給はんや。武松が云く、張公の諫め給はんことあらば、速に語り給へ。張青が云く、某熟々都頭の身の上を思ふに、都頭もし孟州の配所にいたり給ひなば、艱苦を請給はんこと最大いならん。しかじ此所にて彼兩人の下官を殺し申さんに、都頭は暫く我家に滯留あつて、疲をも慰め給へ。若又肯て强盜の頭領をもなし給はんとならば、我自ら都頭を二龍山寶珠寺に薦め送つて、かの魯智深と一所にあらしめ申べし。しらず此儀許し給ふべきや。武松がいはく、此儀尤も然りといへども、只一つの事有つて足下の厚意に從ひがたし。我原來只よく上に在て剛き者に傲り、下に在て弱き者を憐む。

況や此兩人の下官は、路すがら慇懃に我を敬ひ、一點も麁略のことなし。我もし兩人が命を害せば、天理必ず我を饒し給ふまじ。足下もし我を憐み給はゞ、宜しく我が爲に彼兩人が命を助け給へ。然らば我ます〳〵感心すべし。張青が云く、頭都の宣ふ所は都て義士の本意なり。我急に彼を助くべしとて、頓て二人の下官を発より拖落し、一碗の毒を消藥を口中に灌ぎ入れければ、彼の兩人の下官恰も夢中に在て、睡の醒たるごとくにして起上り、則ち武松に對して云ひけるは、此處の酒はいかなる美酒なれば、僅一椀を飲けるに、何ゆゑはやかくのごとく前後もしらず醉ひけるにや。武松これを聞て呵々と笑ひければ、張青夫婦も同じく咄と笑ひし處に、彼下官ら偏に其意を曉らずして共に笑ひけるこそ好咲けれ。此時又張青再び、小二小三に命じて、豐かに酒宴を設けしめ、乃ち後園に於て大いに飲酌を催しけり。張青夫婦盃を執て、再三武松を勸め、又兩人の下官を强、酒已に數巡回りし處に、日色薄暮に近ければ、張青夫婦夜飲を催すべしとて、遂に燈を秉て盃を新ため、酒又數巡に至りし處に、武松又張青夫婦に對し、諸〻の豪傑等が所爲、人を殺し火を放つことを語り、將又山東の及時雨宋公明が洪德を稱美して云ひけるは、宋公明は元來双びなき英雄にて、義を重んじ財を輕んじ、專らよく人の危急を救はれけるが、これ又禍を惹出して故郷を走り出で、已に今柴大官人の館に居給ふと語りければ、張青夫婦も宋公明が德あることを稱美しける處に、二人の下官此談話を聞て大に驚き恐れ、再四身を揮はし色を失ひければ、武松これを見て、乃ち兩人の下官に對して云けるは、

汝兩人道中慇懃に仕へて、我を此處迄送りしことなれば、我輩毛頭汝等を害する心なし。惣じて我がごとき豪傑の談話する所は、武を帶し勇を兼ね人を殺し火を放つ言多し。汝等誤てこれを恐るるなかれ。我輩は誓て善をなす人を殺さずして、只惡を做人を殺すのみ。我は是恩を忘れ義を背くの徒にあらず。汝等宜しく心を寛げ、只願酒を酌。明日孟州に至りなば、我猶重く汝兩人を謝すべきぞ。張青も又兩人の下官に對して云ひけるは、汝必ず我輩が談話を聞いて、徒らに疑心を生じ恐るゝことなかれ。只宜しく安心して酒を飲めよとて、自ら盃を擧て勸めければ、兩人の下官此時始めて心を安んじ、一連に三五盃酌乾しけり。已にして夜も漸更しかば、遂に盃を收めて、其夜は各張青が家に歇みけり。翌日武松別れを告げ打ち立んとせし處に、張青夫婦再三再四詞を盡して留めければ、武松辭することを能はずして、一連に三日逗留し、大に張青夫婦が懇情を蒙りしかば、武松心中に甚だ夫婦の者が厚意を感じ、遂に張青と義を結んで兄弟の約を誓ひ、其年齡の高低を論じけるに、張青は武松に五歲の長なりしかば、乃ち張青を拜して兄と定め、恰も同胞のごとくなり。武松此日張青を辭して別れを告ければ、張青則ち酒宴を設け、別離の盃を催し、又十兩の銀を武松に送り、餞の薄儀なりとし、又三兩づつの銀を二人の下官に與へ、張青夫婦已に武松を送て路口に出で、互に依々戀々遂に双方に別れけり。

武松威安平寨を鎭む

扨も武松は兩人の下官と共に其日に孟州の城下に至り、直に府尹が衙門に赴けるに、府尹廳上に出て武松 幷兩人の下官を堦の下に呼寄、東平府よりの文書を請取披覽し、早速返文を修へて下官に與へ直に東平府へ回しめ、一人の雜兵に命じて武松を當地の營中に送らせければ、則ち營中に武松を導きける。武松則ち營門を看に、一つの額懸れり。額の上には三つの大文字ありて、安平寨と書けり。房間の內に至りし時、雜兵が云く、汝は宜しく此處に在て差撥の來るを待ち候へとて、己は役所に至て斯と告げ、遂に領書を乞取再び城下へ歸りける。武松は獨り房間に閑坐しけるに先達て營中に在る流人共、凡そ十四五人武松が房間の內に至て云けるは、豪傑汝は新來のことなれば、定めて營中のことを知り給ふまじ。若し汝賄賂の銀あらば、預じめ是を包て待ち候へ。少刻差撥來るべき間、暗に其銀を差撥に送り給へ。然る時は彼殺威棒と申て初て來る流人を打つの棒有けるが、是を打つこと尤も輕し。若し賄賂を送らざる時は、此棒を打つこと甚だ重し。我輩皆汝と同じく罪人なる故、特々來つて此事を汝に告げ申すなり。諺にも、兎死ば狐悲むと云ふこと有つて、物各其類を悲む。我輩今汝に此の如きことを告るは、乃ち其類を哀むの道理なり。武松が云く、列位の懇意誠に感謝に勝ず、我身邊にも少しは銀を所持しけるに、彼若これを求る時は、幾何の銀を與へんや。彼萬一我を嚇して求んとするならば、我却て一錢も與ふまじ。諸の流人共是を聞て云けるは、豪傑必ず這樣のことを云ひ給ふことなかれ。我が輩皆彼が下知を蒙るなれば、いかんぞよく彼に對して頭を低れざらんや。只宜しく慇懃に說話し給ふべしと、纔かに云ひ了りける處に、又一人の罪人來て、差撥官人はや至り給ぬと告ければ、諸の罪人共、各四方へ散去けり。武松は獨房間の內に居ける處に、彼の差撥進み入て問ひけるは、新來の流人は何れに在りや。武松答へて、新來の流人は則ち某なり。彼差撥が云く、汝何ぞかくのごとく無禮なるにや。汝は是れ景陽岡にて虎を殺せし豪傑にて、已に陽谷縣に於て都頭の職をもなせし者なれば、世間の事をも曉すべき處に、かく時務に達せざるはいかん。汝已に此營中に來るからは、縱ひ犬猫たり共、汝に打るゝもの有まじ。汝宜しく汝が分量を知れ。武松が云く、汝斯云ふは嚇して賄賂を求んと欲ふや。汝若し我を憐むの言を云ひなば、我肯て多く賄賂を送るべきに、汝已に此のごとく我を羞辱むる上は、我一錢も汝に與ふまじ。若し再三望ならば、我此拳を以つて汝が太陽の上に與ふべし。汝若し能く勢ひあらば、われをいかんともせよ。彼差撥此言を聞いて大に怒り、忽ち身を回して營外に馳出けり。此時諸の流人ども、再び相聚つて武松に云けるは、豪傑何ゆゑ差撥に無禮を云ひ給ひしぞや。差撥必定管營相公に告て足下の性命を害するは必定なり。少刻の到ることあらん。豪傑何を以てこれを脫れ給はんや。武松が云く、何の怕るゝことかあらん。彼文を以て來らば我文を以て對し、かれ武を以て來らば、武を以て對せん。列位必ず我爲に憂へ給ふことなかれと云ひも終らざるに、三五人の兵來つて大に呼りけるは、新參の流人武松は何れに在りや。武松答へて、武松こゝにあり。我一足も走るまじきに、汝何ぞかく大音に呼はるや。彼兵共再び答へ

ず、遂に武松を引て點視所の前に至りければ、管營相公廳上に出で、武松を罵て云く、汝罪人我朝の太祖武德皇帝の遺し給ひぬる法度を知りけるや。凡そ流人初て營中に至る時は、一百の殺威棒を打つことあり。我今汝を打つべきに宜しく棒を請よとて、則ち左右を呼はりしかば、許多の下官共已に立騷ぎける處に、武松が云く、汝衆人必ず騷動することなかれ。我若し一棒にても缺ることあらば是大丈夫にあらず、又一聲にても喊ぶことあらば、是豪傑にあらず。汝等速に棒を下せ。兩邊に列坐しける役人共、都て打咲て云けるは、這痴漢何ぞ自ら死を取や、恐らくは棒を受煞んこと能ふまじと低言しかば、武松又云く、汝等打ばはやく打て、若し輕く打ば、我却て快よかるまじ。力を盡して痛く打て。左右の衆人これを聞て、都て又大に笑つて云く、此漢子遂に骨を碎かるべきものをと未だ云ひも畢らざるに、一人の下官棒を取て進み出でける處に、管營の傍に一人の漢子來る。身の長六尺許にして、年の比二十四五歳と見え、面の色白く腮の鬚長く、頭には手巾を捲、身には紗服を着しけるが、已に管營の前に至て、乃ち管營の耳に附て暫く低言ける處に、管營忽ち武松に向て云ひけるは、汝道中に於て病を得たるよな。武松が云く、我道中に在ては酒を飲肉を食し、身躰益々堅固にして曾て病を得たることなし。管營が云く、彼は道中にて病を得しか共、今少し快氣を遂と斯は申らめ。然れ共病後のことなれば、暫く且殺威棒を預置き、他日病全く平復せば、其時に方に殺威棒を行ふべしとて、故意下官等を瞧しかば、下官等其意を悟り、乃ち武松に對して云ひけるは、汝早く病有しと云ふべし。這は是管營相公汝に殺威棒を免給はんとの好意なり。武松が云く、我曾て半點の病なし。速に殺威棒を受なば却て清かるべし。若此棒を預りなば、我心豈よく片時も安んずることあらんや。又縱ひ實に病ありとて、百や二百の棒を受けんこと何ぞ恐れん。管營呵々と笑つて、此の者必定熱病に犯され、未だ汗發せざるゆゑ、只顧亂言を申すなり。彼が言を聞き入れず、疾房間に引き歸り臥しむべしとて、下官等に命じければ、三四人頓て武松を引き立てゝ、營中の房間に送り入りける。是より武松剛勇の働品々、後卷に追々出づるを見たまへ。

三編卷之六

施恩義をもつて快活林を奪ふ

時に諸の流人共又々相集りて、武松に問うて云く、足下は誰人の書簡を持參して、管營に呈げ給ひぬるや。武松が云く、我曾て書簡を持參せず。衆皆これを聞て、足下書簡を携へ給はざるに、管營相公殺威棒を免し給ふは、是必定善意にあらず、今宵汝の命を害せんとの事なるべし。武松がいはく、彼いかにして我を殺すや。流人等が云く、今宵汝を土牢の内に引き入れて殺さるべし。武松が云く、既にかくのごとくんば、是則ち我が天命なりと、いまだ云ひも了らざるに、一人の家僕手に大いなる盒子を持て進み入り、乃ち呼つて云ひけるは、新來の流人は誰なるぞや。武松答へて云く、新來の流人は我なり。汝我を問うて何の事ありや。彼下官が云く、管營相公我に命じ、汝に酒食を惠み給ふとて、彼盒子を武松に與へければ、武松これを開きて内をみるに、果して一瓶の酒、一盤の肉、一盤の麪あり。武松闇に思ひけるは、先我に酒食を吃せしめて、其後殺さんと云ふ事ならん。遮莫何ぞ是を用ひざらんやと、時を移さず酒食盡く用ひ罷しかば、彼の家僕自ら器を收めて歸りけり。武松は獨房間の内に在て、冷笑ひ想道、彼輩如何として我を殺すやらん。我宜しく是を試んとて、暫く消息を相待ける處に、日も漸々黄昏に至て、又彼先に酒食を携へ來りし家僕、再び一ッ盒子を持て進み入りしかば、武松これに問うて云く、汝又來るはいかん。彼下官が云く、管營相公の命を受て晩飯を送り來りしなりとて、自ら盒子を開きて武松に與ふ。武松これをみるに、一碗の飯、一瓶の酒、一盤の肉、一盤の魚あり。武松心中に想ひけるは、此飯を食し終らば、必然我を害すべし。須く是をも食して快く死に就んとて、片時の間に又是を吃しければ、彼家僕器を取て回りけり。其後半時計を過て、彼家僕又一人漢子を引て、一桶の湯を携へ來りしかば、武松是を見て何ごとをなすやらんと思ひける處に、彼下僕が云く、都頭はやく浴し給へ。武松又思へらく我に浴みせしめて殺さんと計るらめ、是又辭すること有るまじとて、乃ち湯を把て澆ぎければ、彼兩人の家僕再び桶を帶して歸りけり。武松此時自ら門を關して想ひけるは、我に湯を與へて沐浴なさしめぬるはいかなる謂ぞやとて、遂に床の上に打臥ける處に、其夜もはや明て雞犬の聲四方に聞えしかば、武松遂に起て房間の門を開きし處に、又彼の家僕壹人待詔を引て馳來り、乃ち武松が髪を梳らせ、又多くの飲食を携へ來りて、武松に用しめければ、武松心中に想道、今日は必定我命終るべし。只宜しく彼等が所爲に任すべしとて、少しも騷ず、飽まで食しぬる所に、又一人の家僕來て則ち武松を請て云ひけるは、此房間は殊更不自由なるべければ、宜しく房間を換給ふべきのよし、管營相公命じ給ふに、早々我に隨て來り給へ。武松是を聞て、暗に想ひけるは、今日我を請て房間を換さしむるは、必ず土牢の内に移して、命を害

せんとの事ならん。我且彼に隨ひ行きてこれを試むべしとて、乃ち包袱蘊を彼家僕に持しめ、遂に下官と共に房間を出て、一つの處に至りしかば、彼僕門を推開きて武松を入しむ。武松此處を見るに、新らしき床、凳、卓ならびに器等多く設けて、諸色都て足備りぬ。武松自ら思道、我は只土牢の內に往んとこそ思ひつるに、此のごとく善き所に邀へ來ること、偏へに其意を曉り難しとて、只顧躊躇として、時已に日中に至りし處に、又壹人の家僕同じく酒食をそなへて武松にすゝむ。武松是を見て益〻奇異の思ひをなしけるが、終に意を決して酒食を食し了、暫く坐を安んじて居ける處に、彼家僕又來て、武松に沐浴なさしめ、再三慇懃に申けるは、都頭宜しく尊慮を安んじて歇み給へ。武松密に想ひけるは、諸の流人等も我を土牢の內に引き入れ、殺害するならんと告けるに、何ゆゑ却へつて我をかく欵待や、尤も奇怪のことなりとて、其夜は終に歇けり。其翌日又彼家僕酒食を送り來ること、前日のごとし。武松例のごとく食し畢り、獨自ら營外を奔走して此邊をみるに、諸の流人共或は水を荷ひ或は柴を劈、其外さま〴〵雜事をなす徒も多かりけるが、すべて皆此六月の炎日に晒され、甚だ汗を流して苦みぬ。武松此者共に問うて云く、汝らは何ゆゑ此炎日に晒されて事を做や。流人等答へて云く、豪傑汝は新參の人なれば、此の營中のことを知り給ふまじ。我輩此所に在て事をなすは、是則ち人間の天上なり。何ぞ安りに炎熱を嫌んや。彼賄賂を送らざる流人共は、都て土牢の內に在て生を求れども生を得ず、死を求れども死を得ず、其苦しきこと萬千にして、言語に盡すべからず。我輩若彼等に比せば、雲泥の差あり。武松是を聞き畢て、又天王堂の前後を繞り、此邊を見るに、一つの青石あり。此石は卽ち天王の旗を揷石なり。約莫四五百斤の重さも有べし。武松心を留て是を一見し再び房間の內に歸て坐しければ、又彼家僕酒食を携へ來つて武松に食しむ。武松熟々思ふに、此營中に我を害せん意一點も見えず、必定緣故有べし。我先此家僕に其故を問ふべしと、乃ち下官に對して問ひけるは、汝は誰が家の者なれば、只顧酒食を以て我を欵待や、宜しく其緣故を語て我に聞せよ。彼下官が云く、先日も已に都頭に告げ申せしに、何ぞはや忘れ給ひぬるや、我は是管營相公の家より、斯毎日酒食を送り申なり。武松が云く、已に此のごとくんば、此酒食は定めて管營相公の命を奉つて送るならん。彼下官が云く、是は總て相公の子息小管營の命に依て送り申なり。武松が云く、我は是罪を犯したる流人にして、一點の功なきに、何ゆゑ我に酒食を惠み申さるゝや。彼下官が云く、我も其緣故は知らざれども、小管營の宣ふには、且半年ばかりが間は、酒食を送て都頭に與ふべしとのことなり。武松がいはく、此の意必定且我を養うて胖さしめ、其後我が首を刎、身を寸々に割擅に己が刀の鋼を試んと云ふことならん。此酒食分明ならざれば、我いかんぞこれを食して安穩ならんや。抑先小管營と云ふはいかなる模樣の人なるや、我いまだ對面せざるに、彼人我を知られたるはいかん。家僕が云く、都頭前日始て來り給ひし時、管營相公の耳に附て、低言れたる彼後生人乃ち是小管營なり。武松が云く、彼日頭に手巾を捲、身に紗服を着したる人、管營が身邊に近づいて何ご

とやらん低言きけるが、定めて此人のことならん。家僕が云く、其人則ち管營相公の子息なり。武松が云く、我彼日已に殺威棒を請んとしける處に、彼人管營に向て低言けるゆゑ、管營則ち殺威棒を免されぬ。是正しく彼人我を救ひたるに疑ひなし。家僕が云く、都頭はいまだ知り給はぬや、其日小管營都頭を救ひ申されずんば、都頭は痛く打れ給ひて、今時分は死生も不定なるらん。武松が云く小管營我を救はれたるゆゑん、偏に曉しがたし。我は是清河縣の者にして、彼は孟州の人なれば、素より知音にあらず。いかんぞ十分我を憐み給ふや。此中に必ず緣故ぞあらん。我且汝に問ん。彼小管營の姓名はいかんぞや。家僕が云く、小管營の姓は施名は恩と申し、尤もよく武藝を熟練されたるゆゑ、人皆金眼豹施恩と稱せり。武松是を聞て想ひけるは、管營已にかくのごとく武藝を善せば、必ず是豪傑なるべし。我且彼に對面して、其虛實を試んと、則ち又家僕に對して云けるは、汝若し小管營を邀へ來つて我に遇しめば、我乃ち此酒食を食すべし。もし汝邀へ來らずんば、我決して一點も食すまじ。望らくは汝速に向つて小管營を延て來れ。家僕が云く、小管營我に命じ申されるは、汝必ず我酒食を送ることを都頭に告知らする事なかれ。直に半箇年も過ぎなば、我相見えて說話すべきことありと云ひ給ひぬるゆゑ、我今小管營を邀へきたらんこと、直正以て能ふべからず。武松が云く、汝妄りの言をいはんより、早く邀へ來りて我に遇しめよ。彼家僕猶豫して決せざりしかば、武松忽ち大に焦燥て、汝もしいよ〳〵小管營を邀へ來らずんば、我決して此酒食を吃すまじとて、遂に酒食を把て還しければ、家僕止ことを得ずして、頓て施恩に次第を告げ邀へければ、施恩來つて、先武松を見て拜をなしぬ。武松忙はしく拜を還して云ひけるは、某は犯科の流人にて、未だ曾て尊顏をも拜せざるに、前日も已に救ひを蒙り、殺威棒を脫れ、殊に酒食を送つて欵待給ふこと、某甚だこれを受がたし。夫鷄だにも功なき食は吃はざるといへり。いはんや某半點の功なくして、豈妄りに小管營の祿を費やし申さんや。若永く酒食を惠み給ふは、某却て寸志を安んずるの暇あるまじ。施恩答へて云く、某久しく都頭の大名を聞て、雷の耳に轟くがごとしといへ共、只恨らくは山川遙に隔て、未だ高風を接へざりけり。今日幸ひ、都頭此所に到り給ひしかば、理正に早速威顏を拜すべき處に、何の欵待も盡さゞりしゆゑ、某深く是を愧て、相見自ら延引に及びぬ。願くは都頭我が罪を免し給へ。武松が云く、某今彼家僕に問ひけるに、半箇年を過なば、方に某に遇て說話し給はんとやらん、云ひ給ひぬると告けるが、しらず何等のことを示し給ふや。施恩がいはく、彼賤き輩にて妄りに言を申しぬ。某何ぞあへてかくの如きことを申さんや。武松が云く、小管營斯言を藏して、人を疑はしめ給ふは、眞の豪傑のなす所にあらず。則ち是れ秀才等が戲と同じ。願くは速に今我に告げ給へ。施恩が云く、彼已に我が云ひし言を、都頭に告げぬる上は、我今心事を語申すべし。乃ち都頭は是譽れ高き有名の豪傑なるゆゑ、我敢て一つのことを都頭に賴んと欲す。是もし都頭にあらずんば、他人の能ふべきことにあらず。然れ共都頭遠路を經て此地に至り給へば、定めて氣力も疲れ給ひつらんと

察しけるゆゑ、先づ宜しく半箇年も休足なさしめ參らせ、其後氣力全く備りなば、其節委細に都頭に告て事を行んと圖りぬ。武松是を聞て、から〳〵と打笑ひ、小管營聞き給へ。某去年三月瘧病を患へしかども、景陽岡の上にて、而も大酒の醉中に一つの大虎を打殺しぬ。いはんや今一點の病氣もなく、氣力十分に足り全し。若某を用ひ給はんことあらば、唯宜しく早々命じ給へ。施恩が云く、都頭の言を信せざるにはあらざれども、這時節は且行ひがたし。都頭尙ほ幾ばく日を休息し給ひて、氣力いよ〳〵足り備りなば、其時まさに都頭に告て事を行ひ申すべし。武松がいはく、小管營只願我が氣力の疲れたることを恐れ給はゝ、我れ今力を用ひて小管營の一覽に備へ申べし。我昨日天王堂の前にて、一塊の青石有を見けるが、彼石は重さ幾ばくあらんや。施恩が云く、彼石は約莫四百斤の重み有べし。武松が云く、我且試に小管營と天王堂の前に至て、彼石を一見すべし。若持るべくんば、我試に是を持て一覽に備へ申べし。施恩が云く、已にかくあらばわれあへて同往すべしとて、遂に武松とともに天王堂の前に至りしかば、諸〻の流人ども小管營が武松を引いて至りぬるを見て、盡く身を躬めて禮を行ひけり。武松已に石の前に至り、彼石を一搖搖て云けるは、某誠に氣力疲れたるにや、此石を持んこと能ふまじ。施恩が云く、此石原來四五百斤の重み有べければ、いかんぞ能く輕々しく持ことを得んや。武松から〳〵と、大いに笑て云く、小管營は我今持んこと能ふまじと云ひぬるを信じ給ふよな。我實にこれを持て尊覽に入れ申さん。傍によつて好見給へとて、乃ち双の袖を捲起

武松投大石示姥力

て、再び石の前に走り倚、遂に石を取て眼より高く扛上、唯一电に地上に撲着しかば、其聲大に響いて一尺餘り地の内に打ち入れけり。諸人是を見て大に驚き、衆皆舌を揮ふ計なり。武松又立倚て彼石を輕々と引拔き、再び空を望んで电上しかば、地上を離るゝこと一丈餘り、其石已に落けるを、武松双手にこれを接へ、輕々と原の所に差置、則ち頭を回して施恩幷に諸の流人どもに向て、呵々と咲ひけるに、面の色少しも變せず、胸のうへ聊も跳らざりしかば、施恩これを見て、忙はしく地上に伏拜して云けるは、都頭は是凡人にあらず、乃ち眞の天神なり。諸の流人共も一齊に拜をなして云けるは、都頭の勇力人倫のよく及べき處にあらず。これ必ず上天の神祇權に顯化して、下界に降下り給ひぬること彰し。誠に希有の英雄かなと、衆皆奇異の思をなしけり。當時施恩再三武松を乞うて私宅に歸り、直ちに堂上に至て、坐已に定りしかば、武松先施恩に對して云く、小管營已に我力を見給ひし上は、宜しく我に其事を告て急に行ひ給へ。施恩が云く、都頭先づ寛坐して待ち給へ。我自ら家父を邀へ來つて都頭と對面なさしめ、其上にて事を明かに告げ、都頭を賴み申べし。武松が云く、小管營縱ひ如何樣の大事をなし給ふ共、何爲再三遲疑に及び給ふや、是却て事を做の器量にあらず。若人を殺し火を放つことたり共、某あへて小管營の爲にこれをなすべし。少しも猶豫することあらば、是丈夫にあらざるなり。唯よろしく意を決して、早々告げ知せ給へ。施恩が云く、某あにあへて都頭の尊意に背くことあらんや。少停事を明らかに告げ申さん間、先づ暫く心を寛げて、茶を用ひ給へと

て、則ち家人に命じ住茗をぞ進めけり。武松已に茶を吃し畢て云ひけるは、小管營速に事を詳かに說て某に告げ知らせ給へ。施恩答へて云く、某敢て事を告げ申さんに、これを聞き給へ。某幼なき時より許多の師に從て武藝を傳へ申せしゆゑ、孟州の人皆某に諢名を附て、金眼彪施恩と稱し申なり。扨當城の東門の外に一つの里あり。地名を快活林と號して、山東河北等の商人等其外多く此快活林に來て、賣買をなし申す。此處に百十餘所の客屋有つて、二十餘所の賭坊あり。某向に快活林の內に酒店を開き、營をなしける所に、彼處の民人共、某が武藝を尊んで、諸の客屋賭坊等より、每月錢を湊て某に送りけるが、一箇月に約莫二三兩の銀ありぬ。此故に某も又深く是を感じ、若里の內に盜賊醉漢の徒來つて居民を犯さんとする時は、某親自ら八九人の流人共を引て、屢これを治め其無事を調へり。然るに當營の張團練新たに東路州より來りけるが、一人の力士を從へて此處に至りぬ。力士が姓は蔣名は忠と號し、身の長九尺餘り有つて力量人に踰たり。故に人皆諢名を附て蔣門神と呼び慣せり。彼唯身の材長大にして力量剛强のみならず、又能鎗を刺棒を使ふ。就中相撲は比類なき達人なり。自誇て大言を吐、三年太嶽に於て角力を交りしかども、對手になる者一人もなし。普天下我ごとき相撲はかつてこれあらじと大に勢を振ひ、擅に我が商賣を奪取んとするゆゑ、某肯て是を讓らず、遂に手脚を交へ鬪ひける所、某彼が働きに打倒され、全身大に傷うて凡三ヶ月餘り、平復を得ずして床に臥ぬ。前日都頭初て至り給ひぬる時も、猶甚だ餘痛あり。乃ち手巾を用ひて頭を包み、漸々廳上に出て都頭の尊顏を拜しぬ。今に至ても打傷れたる痕、時時再發して身心苦るなり。我本大勢を催し、此仇を報じて恨を雪んと思ひしかども、張團練が一身の者共は、我が人數に十倍して多き故、是また勢ひ敵すること能はず。只徒に時日を過して恨骨髓に徹れり。某原來都頭の猛威を聞き及びぬるゆゑ、這回幸ひ都頭を賴で、此仇を報せんとす。都頭もし肯て我爲に恨を雪てたび給はゞ、此恩身を終るまで忘るゝこと有まじ。某暗に想ひけるは、都頭這遭遠路を經て、當地に至り給ひしことなれば、必定氣力も疲れ給ひぬることあらん間、先づ宜しく半年計休息なさしめ參らせ、其後氣力足備るを待て、方に此ことを告げ、商議せんと思ひけるに、家僕誤て事を露しけるゆゑ、已ことを得ず、急に今事實を告げ申なり。武松これを聞て呵々と大に咲て云く、那蔣門神は幾ばくの頭有つて幾ばくの臂ありや。施恩が云く、只是一つの頭二つの臂あるのみ、如何ぞ許多の頭臂あらんや。武松益大に笑て云く、我は只三頭六臂の異人ならんとこそ思ひつるに、元是一つの頭二つの臂あるのみならば、何ぞ必ずしも恐るゝ所あらんや。施恩が云く、某只氣力薄うして、武藝疎きゆゑ、彼に敵することに能はざるなり。武松が云く、我自ら誇言を云ふにあらざれども、我が胸中の武藝は、只天下の惡人道德に明らかならざる者をのみ、是を傷め申なり。彼の蔣門神かくのごとく非道を行ふならば、宜く今速に馳申さん。小管營某を引て往き給へ。某彼虎を殺せし勢を奮て、彼を只一打に打殺し、我自ら命を償ふのみ、何ぞ別に遠慮する所あらんや。施恩が

云はく、都頭暫く先家父が出で來るを待て商議し給へ。然らば明日先づ人を馳て、蔣門神が消息を窺せ若いよ〳〵家に在らば、明後日馳行べし。若し彼家に在らずんば、他日の催にいたすべし。武松是を聞て大に焦燥て云ひけるは、小管營彼に打れ給ひぬるに、自から勢ひを失ひ給ひて、かく遲々し給ふや、大丈夫のなすこと、何ぞ再三猶豫することあらんや。若し明日明後日とのばさば、此事彼等が方に曉されて、必ず備へを堅固にすべし。只宜しく急に意を決して今日事を行ひ給へとて、頻りにすすめけり。

施恩重て孟州道に霸たり

小管營武松と商議半なる處に、忽ち屏風の背後より老管營走り出て呼ばはりけるは、豪傑の曰ひし處我一々是を聞けり。今日我が愚男想はず豪傑に相遇ふこと、恰も雲を披いて日を見るがごとし。先づ後堂に移りて商議を遂げ給へとて、頓て武松を延て後堂に至り、再三高座を武松に讓りて坐せしめければ、武松これを辭して云く、某は是科を犯せし罪人なるに、いかんぞ肯へて相公と座を對し申さんや。老管營が云く、豪傑必ず過て謙退し給ふことなかれ。我が愚男豪傑に對面を遂ぐること、十分の幸ひなれば、我尤欣躍に勝ず。唯よろしく座を安んじて談話し給へとて、再三頻りに請ひければ、武松辭すること能はず、遂に席を對して坐しければ、施恩は其次に座を定めけり。家僕やがて酒肴を具へて携へ出し處に、老管營已に盃を取つて云ひけるは、都頭は是眞の英雄なるに、願はくは愚男を助け給へ。愚男原快活林に在つて、賣買をなしけるは、畢竟財を貪り利を好むにあらず。只よく快活林を守つて、盜賊醉漢等を追退、其名を四方に振ひ、孟州に一人の豪傑あることを、世の人に知らさんが爲なり。然るに、今蔣門神擅に己が猛勢を振ひ、公然として愚男が賣買を奪ひ取れり。若し、都頭の英雄にあらずんば、仇を報じ寃を雪ぐこと能ふまじ。都頭いよ〳〵愚息を棄給はずば、此盃を酌み給ひて、愚男と義を結び盟をなし、愚男が八拜を受け給へ。武松答へて云く、某年若く學なうして如何ぞ敢て小管營の拜を受け申さんや。願はくはこれを免し給へとて、已に辭せんとせし處に、施恩座を起て、武松を八拜し、義弟の禮を行ひければ、武松忙はしく禮を還し、遂に兄弟の盟を結び、其日は大いに悅んで酒を酌み、已に晩て宴終りければ、武松は泥のごとくに爛醉し、其夜は先づ房間に歸りて歇みけり。其翌日施恩父子商議して云く、武松昨日甚だ昏醉の體なれば、必然酒に中り、氣分も好かるまじ。今日いかんぞ事を行はんや。只詐て云ふべきは、先立つて人を遣はし、動靜を窺しめけるに、蔣門神は這兩日家にあらず。明日は必定歸らん。明朝飯後に早々長兄を敬ふこと引いて馳せ行くべし。今日は且氣力を養ひ給へと云うて、一日延すにしかずとて、施恩先づ武松に此事を演けるに、武松が云く、彼家にあらざるには、縱ひ今日行くとも益あるまじければ、只明日往くべし。然れ共我一刻も早く、蔣門神に遇はんと欲することなれば、今日空しく憤りを抱て、過し難からんとて、遂に施恩とともに營外に奔走し、再び又家に歸つて閑談を催しければ、はや日中に至りぬ。

此時施恩武松を引いて私宅に歸り、僅か二三碗の酒を具へて、武松を欵待、重ねて一碗の酒も篩ざりしかば、武松此體を見て心中歡びず、早速別れ、己が房間に回りけり。斯かる所に、兩人の僕又酒肴を携へ來たりて武松に進む。武松是を見るに、肴は多けれども、酒多からざれば、武松乃ち家僕に問うて云く、小管營今日は何ゆゑかくのごとく酒少く肴多く送られけるや、我偏に其意を曉しがたし。若し躊躇あらば、宜しく我れに告げよ。彼僕が云く、今朝管營父子商議して申されけるは、今日都頭を引いて快活林に馳行たく思へ共、都頭定めて昨夜の酒に中り給ひて、快かるまじければ、今日馳せ行きては大事を誤ることもあらん。宜しく明日の沙汰にすべしとて、今日は已に日を延されて酒を送ること多からず。武松是を聞き、心中に冷笑ひ、其夜は事なく寐みけり。武松翌朝未明に起て裝束を調へ、獨房間の内に坐して、施恩が消息を待ちて居ける處に、施恩親自來りて武松を私宅に邀へ種々珍物を設けて、武松を欵待、食事已に畢りければ、施恩が云く、長兄敬ふこと若し馬に乘って行き給はんならば、我家に幸ひ一疋の良馬あり、則ち今日是を牽て乘らしめ申べし。武松が云く、我原來路を行くこと達者なれば、何ぞ必ずしも馬を用ひんや。我只一つの望みあり。小管營肯て是に從ひ給はんや。施恩が云く長兄の望み我何ぞ敢て違はんや。宜しく速に示し給へ。武松打笑て、我望他事にあらず。若し城を出て途中に臨みなば、縱ひ幾ばくの酒店有りとも、酒店毎に立倚て、三碗の酒を飲んで過るべし。小管營もしこれに從ひ給はずんば、這回のこと頗る難き所あらん。施恩是を聞いて、快活林は城の東門より十四五里の路なれば、其間にある所の酒店約莫十二三軒も有るべし。毎店に立倚て三碗のみ給はば、都合三十五六碗の酒なり。長兄已に快活林に至り給ふ時は、其醉大いに發し、前後を覺え給ふまじ、願はくば此望を休給はんや。武松大いに笑て云く、小管營は我もし酒に醉ば事を誤らんと思ひ給ふにや、我反つて酒なき時は力なし、一分の酒あれば一分の力有り、五分の酒ある時は五分の力あり、十分の酒あれば又十分の力あり。某向に十分の酒を飲んで爛醉したればこそ、景陽岡にて大虎を殺せり。若し然らずんばいかんぞよく虎を殺すことを得んや。小管營これを以て我力は酒に起ることを知り給へ。施恩が云く、我家には元來多く美酒を貯へしか共、昨日より長兄に多く酒を勸めざるゆゑんは、唯是長兄の爛醉し給ひて後、自ら事を誤給はんとのみ恐れてなり。長兄すでにかくのごとく酒の後益力あらば、我先づ二人の家僕に我家の美酒を持たせ、途中に待しめん間、長兄意のまゝにこれを用ひて快活林に往き給へ。武松が云く、小管營若しあへてかくのごとくんば、是則ち我悦びの第一なり。尤蔣門神を打倒さんこと、何の疑ひかあらん。我萬一酒を飲まずんば、いかんぞ能く全き勝を取らんや。此時施恩兩人の家僕に多く酒肴を持たせてまづ途中に遣はしければ、老管營は暗に健なる大漢子二三十人を撰み出し、其後へに從はしめて遣しけり。扨小管營は武松とともに、平安寨を離れ城の東門の外に打出、纔四五百步計り馳せぬる處に、はや一間の酒店ありければ、彼兩人の家僕先づ此所にあつて相待、すなはち施恩武松を迎へ、酒店の内

に入りて坐已に定まりしかば、兩人の家僕頓て酒肴を具へ持出けり。武松是を見て云ひけるは、小盃を收め只宜しく大碗を以て酌むべしと、則ち大碗を追取て、一連に三碗を酌乾遂に酒店を離れ急ぎけり。此時七月の天氣にて炎暑未だ消ずして金風乍ち起りければ、武松施恩と共に衣襟を開いて、又一里計り往きける處に、此邊に又一間の酒店有りしかば、武松大いに悅んで、忙はしく酒店に入り、再び酒食を具へ、三碗を酌乾、忽ち門外に出で馳せ行きけるに、二三里計に至つて又一間の酒店有りければ、此處にても同じく三碗の酒を飲み、都合十箇所ばかりにて酌みしかば、武松大に爛醉し、則ち施恩に問うて云ひけるは、是より快活林には猶幾ばくの路ありや。施恩が云く、快活林は此前面の林の内なり。武松が云く、既にかくのごとくば小管營は先づ彼邊に在つて待ち給へ。我自ら林中に入つて、蔣門神を尋出すべし。施恩が云く、長兄自ら往きて尋ね給はゞ、最可ならん。某は他所に徘徊して待申さん。長兄必ず彼を輕く覩給ひて誤ち給ふこと勿れ。武松が云く、此ことは案じ給ふまじ、只宜しく彼家僕に命じ、酒を送らしめ給へ。我猶酒を用ひて氣力を強むべし。施恩これを聞いて、兩人の家僕に命じて云く、武都頭もし酒を用ひんとあらば、速かに進め申せ、必ず怠慢ることなかれとて、施恩は此より武松におくれ控へければ、武松是より又五六ヶ所にて酒を酌み、十分爛醉をぞなしにける。

武松醉ながらに蔣門神を打つ

此時午の刻にて、天色殊に熱しければ武松益醉發し、一歩は高く一歩は低く、東に倒れ西に歪て、漸々林の前に至りしかば、彼僕指さして云ひけるは、對面に見えし酒店は、乃ち是蔣門神が店なり。武松が云く、已に然らば、汝兩人は先づ遙の所に躱れ、我若し蔣門神を打倒したると聞かば、早速馳來れとて、終に別れて林の内に入りける處に、後背に一人の大漢子、槐樹の下に凳を設け、乃ち其上に坐して乘凉居たり。武松此男子をみるに、形容醜惡にして身材長大なり。兩眼は星の光りに似て、雙眉は刷毛の濃がごとし。武松心中に想ひけるは、這大漢子蔣門神にはあるまじやと、暗にこれを疑ひ、又四五十歩許行きけるに、はや彼酒店の前に至つて此處をみるに、酒店の簷の前に一つの旗を立て、旗の上に四つの大文字あり。則ち河陽風月と書けり。又門前にも二ツの旗を建けるが、五つの大文字あり。左は醉裡乾坤大と云ふ文字あり。右は壺中日月長とあり。店の内には年小の女凳の上に座して在りけるが、是れ則ち蔣門神が新たに娶たる妾なり。此女は原娼妓の流れにて粧ひ殊に風騷なり。武松是を見て、醉眼を睜開き、遥ちに店の内に入つて凳の上に座をなし、只顧かの女を看たりしかば、彼女急に面を轉て傍を望み、佯て見ぬ體にて居たりけり。此時店の内に猶六七人の家僕ありけるが、其内壹人の酒保先武松に問うて云く、貴客幾ばくの酒を沽給ふや。武松が云く、先づ二升の酒を呑來れ。家僕是を聞いて、彼女に二升の酒を出させ、則ち是を携へ出て云ひけるは、貴客宜しく酒を酌み給へ。武松が云く、我原來惡酒を飲まず。汝先一碗を呑で我に與へ試みしめよ。家僕が云く、我家の

酒は味極めて美なりとて、一碗の酒を呑んで武松に與ふ。武松是を一口飲んで云ひけるは、此酒大いに惡し。汝速かにこれを換て來れ。彼僕武松が醉たるを見て、敢て背かず、再び彼女が前に來りて云ひけるは、彼客酒惡しとて換んことを求む。夫人宜しくこれを替て與へ給へ。彼女又上酒を呑出して家僕に渡しければ、家僕これを携へ出云ひけるは、貴客此酒を試み給へ。是則ち美酒なりとて又一碗の酒を與へしかば、武松これを飲んで云ひけるは、此酒いよ〳〵惡し。再び上々の美酒を換て來れ。もし遲々することあらば、我が拳を汝が太陽に與へんぞ。家僕是を聞いて心中に怒りしかども、武松が醉しを見て爭ひをなさず、再び彼女が前に來つて云ひけるは、彼客又酒を換て來れと申。夫人曲て再び換て與へ給へ。彼客原來爛醉したる故這樣の非道を申ならん。是に依つて某も言を爭はず、夫人も彼が醉ひたるを顧みて、早々美酒を換へて無事ならしめ給へ。若し然らずんば彼必ず酒興に乘じて鬧しむること有るべし。彼女これを聞いて、然りと同じ、乃ち第一色の上々酒を換へて、武松に與へければ、武松是を飲んで云く、此酒頗る味好し。我先づ汝等に問ふことあり。此店の主が姓はいかん。彼僕答へて云く、主の姓は蔣なり。武松が云く、此家の主は何ゆゑ姓を李とせざるや。蔣氏は何とやらん聞惡し。彼女是を聞いて云ひけるは、這漢子何れの所よりか酒に醉てこゝに至り、自ら禍ひを招んと欲ふや。彼僕が云く、渠は是外鄉の者なるゆゑ、我家の勢ひをしらずしてこそ、かく無禮は申すらめ。何事も聞かぬ體にもてなし、只よく穩便に回し給へ。武松是を聞いて、忽ち吼て云ひけるは、汝等今云ひし言は、我を識りたるにあらずや。彼僕が云く、我輩自ら事有りて說話するに、何ぞ貴客を識り申さんや。貴客は只宜しく酒を酌み給へ。武松が云く、汝速かに彼女を呼びて我相伴させて酒を飲ましめよ。彼僕怒て云く、汝何ぞ甚不禮を申や。彼夫人は則ちこれ主の夫人なり。誤て言を犯すことなかれ。武松が云く、縱ひ主が妻たりとも、相伴させて酒を飲まんに何の妨かあらん、早早女を引いて來れ。彼女是を聞き大に恚り、罵て云ひけるは、死を招く大賊、何ぞ甚だ人を羞辱るやとて、已に座を起て內に入らんとしける處に、武松衣の袖を捲て跑來り、頓て彼女を揪へて酒缸の內へ投込しかば、許多の家僕ども衆皆一齊に打つて出けるに、武松少しも騷ず、手の到る所はや一人の僕を捉へ、酒缸の內へ投込しかば、酒保幷に家僕どもの內、二人左右より武松が脚に纏ひ引倒さんとするを、武松事ともせず左右の手に提げ缸の內に投入、猶猛威を振て、三四人の僕を地上に踢倒し四面八方に狂ひ繞り、餘多の僕ども盡く打傷はれて、此彼に倒れけり。其內一人の僕、漸〳〵に爬起て門外に逃出しかば、武松是を見て、心中に想ひけるは、必ず蔣門神に告げ知らせんとのことならめ、我宜しく大路の上に馳出て、蔣門神を打倒し、乃ち諸人に是を咲しめ、施恩が恥を雪んとて、遂に門の外に跳出、直ちに大路の上に至つて相俟ぬ。扨かの僕忙はしく馳て、蔣門神にかくと告げければ、蔣門神大いに駭いて跳來りし處に、武松はや大路の上にて、蔣門神を迎へり。この蔣門神は原來力量武藝人に勝れしかども、頃日は酒色に迷はされて、力大いに弱りければ、武松が

虎威に敵することを得ん。此時蔣門神は、武松が醉たるを侮り、勢ひを振ひ足を飛ばせて蹋入りける處に、武松急にこれを避、蔣門神が眉間に拳を閃かして、故意十歩許退しかば、蔣門神大いに怒追て近づかんとせし處を、武松忙はしく脚を擧て蔣門神が小腹に蹋中、第二の脚を飛ばせて蔣門神が太陽の上を蹋破り、頓て雙手を以て打倒しければ、蔣門神相撲の手を盡して働んとしけれ共、武松が勇力敵すること能はず、遂に胸の上を踏付られ、大いに聲を放つて苦しみけり。武松罵つていはく、汝奸賊いかんぞ擅に人を欺くや。汝もし命惜くば、我が三件に從ふべきや。然らば我れ汝が命を免さん。若し汝我が三件に背ば、我今汝が命を免さんこと難し。蔣門神が云く、豪傑もし三件有つて我に從はしめんとならば、速かに是をいひ給へ。我都て命に從ふべし。武松が云く、汝もし果して三件に從ふべくば、我今是をいはん。先づ第一の件は、汝が家の諸道具を只一ッも遺さず本主金眼彪施恩に還して早々快活林を離れ故郷に歸れ。蔣門神忙しく答へて云く、某敢てこれに從ふべし。武松又云く、第二の件は我今汝を饒さんゆゑ、汝自ら快活林の英雄豪傑たるべき者、悉く皆呼び寄せ、宜しく施恩に對して罪を謝せしめよ。蔣門神が云く、某これに從ふべし。武松が云く、第三の件は汝今日家財等を施恩に還しなば、今宵の內に故郷に歸れ。汝もし私に孟州に藏れ居ることあらば、我再び汝を痛く打つべし、輕き時は半死半生に打傷はん。重き時は則ち性命を害すべし。汝一々是らのことに從つて早々此所を立ち去らば、卽時汝を饒すべし。若し半點にても相違くことあらば、卽時に汝を蹋殺さん。汝いよ〳〵主意を定めて返答せよ。蔣門神はいかんともして、命を脫れんと欲ひけるゆゑ、早速答へて云く、某謹で豪傑の命に從ふべし。願はくば速かに扶け起し給へ。武松是を聞いて呵々と打笑ひ、遂に蔣門神を扯起して、面の上を看るに、太陽の邊痛く打破られ、血は滾々流れ出づ。武松指ざして云ひけるは、汝未だ我をしらずや、我は景陽岡にして僅に三拳兩脚を用ひ、大いなる猛虎をだに打殺せり。況んや汝ら如き弱男を殺さんこと、何の難きことあらん。小指一本にて足りぬべし。汝速に家財を回し、卽時に故郷に歸れ。もしなほ遲疑することあらば、汝が性命暫時に消ゆべきぞ。蔣門神此言を聞き、初めて武松たることを知り、彌〳〵恐れ入つて再三罪を謝す處に、施恩は健かなる輩二三十人を引いて跑來り、武松はや蔣門神に贏たるを見て大いに悅び、終に人數を分ちて左右に跕しかば、武松これを見て、再び蔣門神に對して云ひけるは、汝が家財の本主施恩すでに來れるに、汝向に奪ひ取りたる所の諸物ことゞ〳〵く皆還すべし。尙且快活林の豪傑たらん者、一人も遺さずこれを呼びて來れ。蔣門神が云く、豪傑先づ某が店に入つて座し給へ。某自らこれを辨じ申すべし。武松此時施恩に對して云く、然らば我先づ渠がみせに行くべし。汝等も我に從ひ來り給へとて、諸〳〵の人數を引き再び酒店の內に馳入りける時、酒缸の內に投入れし女も、三人の僕も尙缸の內に在つて、大いに酒に滄れ苦しみければ、武松漢子共に下知してこれを引き上げさせ、乃ち又呼ばはつて云ひけるは、蔣門神汝早く家財を施恩に還して、早々當地の豪傑共を呼來れ。蔣門神これを聞い

て、早速家内の道具を改め、又家僕を馳て村中の豪傑を呼びければ、諸の豪傑ども悉く來つて蔣門神がために慇懃に言を下げ、施恩と武松とに罪を謝しければ、武松から〳〵と打ち笑ひ云ひけるは、諸の衆中先づ一盞を酌み給へとて、頓て酒宴を設けしめ、大いに飲酌を催しけり。此時先づ武松諸家に對して云ひけるは、各〳〵此店の事を知り給ひつらん。我は近來陽谷縣にて人を殺し遂に此孟州に流されけるに、前日人の云ひしを聞きぬるに、快活林の這酒店はもと施恩が店なりしが、這蔣門神すでに勢ひに乘じて、擅に此店を劫ひて小管營の衣飯を奪ひ取りけるとなり。此ゆゑに我今日これを取復しぬ。諸人誤つて我を小管營の家人とばし思はるゝな。我は只天下の惡人共、專ら非道をなす蔣門神ごとき者を打たんと欲するゆゑ、我深く彼を恨みて、此のごときことに及べり。我途中に於ても、若し剛き者有つて弱き者を欺き侮非道をなすをみるときは、乃ち劔を拔て弱き者を助け剛き者を傷ふ。萬一彼が命を害し我命を償ふ共曾て恨みなし。今日も已に蔣門神を殺して一害を除んと欲しけれ共、且列位の思像を顧みて、權く彼が命を饒すなり。今晩早々蔣門神を他鄉に往かしめ給へ。もし藏れて孟州の地にあらば、我又尋ね出して景陽岡の上にて虎を殺したるごとく、三拳兩脚を以て終にかれが命を害すべし。諸人このことばを聞き、初めて景陽岡の上にて虎を殺したる武都頭たることを知り衆皆慇懃に云ひけるは、豪傑怒りを息給へ。某等宜しく蔣門神を他鄉に遣はして、家財悉く皆本主小管營に還し申べしと、諸人一同にこれを肯ひしかば、彼蔣門神は武松が猛勢に怕れ、敢て一句の言をも云はず、只頭を低て居たりけり。此時施恩家財等を點査てこれを收めければ、蔣門神は羞を懷て諸人に別れ、遂に快活林を離れて、行方しらずなりにけり。扨武松は其日諸の衆中を勸め酒を酌み、漸々晩昏に至つて盃も收りしかば、皆々別れを告げて歸りけり。武松其夜爛醉して打臥、翌日辰の刻に至つて睡を醒せり。扨又老管營は子息施恩、再び快活林を覇と聞いて大いに悅び、忙はしく馬を飛ばせて快活林に跳來り、乃ち武松に對面して、深く勞を謝し連日酒店に滯留し、朝夕宴を設け酒を酌みて自ら悅び賀しにけり。此時快活林の貴賤、都て武松が猛勇を知りければ、來つて武松を訪はざるもの一人もなかりけり。武松是より新たに店を修理し、再び酒を賣ひければ、老管營はこれを見て、まさに安堵の思ひを催し、遂に自ら安平寨に回りけり。施恩私に人を馳せて蔣門神が動靜を伺はしめけるに、蔣門神は已に行向しらず、落行ぬと告げければ、施恩彌々心を安んじ、自ら商賣をなし、前方よりも猶繁昌して、毎日大利を得たりしかば、施恩ます〳〵武松が助けを感じ、則ち武松を尊ぶこと恰も父母の思ひをなしけり。

三編卷之七

都監張蒙方武松を陷いる

却説武松は施恩がために宿怨を晴し、一ケ月餘りも過しける處に、炎暑漸退き玉露涼を生じ、はや深秋に至りけり。或日施恩武松と共に店の内に座し、閑談をなし居ける處に、門前に兩人の下官一疋の馬を牽せ馳來り、乃ち施恩が店に入て問ひけるは、虎を殺されし武都頭は此所に在りや。施恩出て此輩を見るに、乃ち是れ孟州を守る兵馬都監張蒙方が家人なりしかば、施恩先づ下官等に向つて云く、汝等武都頭を尋ねていかなる事ありや。彼下官等が云く、某らは都監相公の命を奉て此處に至りぬ。都監相公老早より武都頭は當世の豪傑なることを聞き及ばれて、乃ち馬を以て武都頭を邀へ給ふなり。尤も書簡をも携へ來れりとて、施恩に與へければ、施恩是を披見し、暗に想ひけるは、張都監はこれ我が親の上に在つて下知をなす人と云ふ。尚且武松は流人のことなれば、張都監が命に背きがたし。唯宜しく武松をすゝめ遣はさんと圖り、則ち武松に對して彼兩人の下官を指さし、這人等は則ち張都監相公の使者なるが、相公都頭に遇ひ給はんとのことにて、今日武長兄を迎のため、馬を牽せ此所に來られぬ。都頭肯て行き給ふべきや。武松はこれ一勇の士なれば、何の思慮分別にも及はず云

ひけるは、張都監相公人を馳せて我を迎へらるゝは、是則ち好意なり。我何ぞこれを辭することあらんや。早々馳せ行くべしとて、遂に裝束を改め馬に乘り、かの下官等とともに孟州の城下に馳せ、直ちに張都監が館の前にて馬を下り、遂に下官らに隨うて廳前に至りければ、彼張蒙方武松が來りしを見て大いに悅び、乃ち請うて相見る所に、武松は廳下に於て拜をなし、謹で廳の傍に立ちしかば、張都監先づ武松に對して云ひけるは、我聞く、汝は眞の豪傑にしてよく人を助け死生を同じうするとなり。我今汝を擧げて帳前に用ひたく思ふ、汝肯て我幕下に屬せんや。武松跪いて慇懃に謝して云く、某は是罪を犯したる流人なり。若し相公の吹擧を蒙らば、某敢て犬馬の勞を盡すべし。張都監これを聞いて大いに悅び、便ち左右に命じて酒食を儲けしめ、自ら盃を取つて、武松に勸めければ、武松甚だこれを感謝し、一連に數盃の酒を酌んで、遂に廳前を退きけり。此時一人の下官武松を引いて一ツの房間の内に入つて云ひけるは、都頭宜しく此處に休息し給へ。猶明日對面致さんとて、頓て房間の外に出ければ、武松其夜は遂に歇みぬ。翌日又人を施恩が方に遣して行李を取り寄せ、此より武松は張都監が家に在つて事へけり。張都監常に武松を後堂に呼び入れて、酒食を與へ、抑且内外出入りを許して、恰も親類のごとく欵待、多く衣服等を惠み、深く愛憐を垂れければ、武松暗に是を歡んで心中に想ひけるは、都監相公かくのごとく我を愍み給ふこと、誠に感激の至りなれば、我又此處に至りてより以來都監の前を寸歩も離るゝことなく、左右に侍す。然れば快活林に往きて施恩にま

みえん暇もなく、自ら多く疎遠に打過ぬ。いかさま近日暇を求めて施恩を訪はんと圖りけり。扨世上の人武松が出頭することを聞き及び、何等の公事ある時は、早速來つて武松を賴みけるに、武松も又賴を辭せず、張都監が前に出て宜しく取成を云ふごとに、張都監も都て武松が言に從つて公事を決斷しけるゆゑ、世の人擧て武松に金銀財帛を送りければ、武松は是を一ト色も散さず都て櫃の內に入れ置きけり。光陰矢のごとくにして、はや八月の中秋に至りしかば、張都監後堂の鴛鴦樓の下に酒宴を設け、中秋を賞し、乃ち武松をも宴上に呼んで座に就かしめければ、武松大いに悅んで、後堂の邊に來り、宴上を窺み見るに、張都監が夫人を始めとして、女中多く宴に就いて座しけるゆゑ、武松忙はしく身を回して走り出でんとせし處に、張都監急に武松を呼んで云く、汝何ゆゑ走り出でんとするや。武松答へて云く、相公の夫人ならびに女中多く宴に就いて居給ふゆゑ、某宜しく此を避けんと欲するなり。張都監大いに咲て云く、汝大いに差へり、我汝が義あるを敬うて汝を此席に呼びけるに何故自ら避けんとするや。汝は是我が心腹の者なれば、少しも遠慮なく共に宴に就いて酒を酌むべきに必ず辭することなかれ。武松が云く、某は是罪を犯せし流人なるに、豈あへて相公の夫人と座を對し申さんや、願はくは某を饒して出させ給へ。張都監が云く、汝いかんぞ再三慇懃のことを云ふや。今宵は殊に外人もあらざれば、汝座に列りて酒を飲むとも、何の妨かあらん、必ずしも我が心に背くことなかれ。武松再三再四辭しけれ共、張都監牢くこれを饒さず、自ら引きて座せしめしかば、武松これを辭すること能はず、遂に無禮の罪を謝して遙か末座に座しにけり。張都監は了鬟に命じ酒を斟しめ、再三勸めて、酒已に數遍巡りしかば、張都監又肴を添へしめて、再び相勸め閑談良久しうして後、張都監武松に對していはく、大丈夫の酒を酌むに、何ぞ小盞を用ひんや、宜しく大盞を用ひて快よく酌むべしとて、自ら大盞を執て頻に武松に强ければ、武松一連に數盞を酌乾ぬる處に、月光光彩直ちに東窓を照しければ、武松益興に乘じて、只顧盞を傾けしかば、醉まさに五六分に及びけり。張都監又寵愛の使女に玉蘭と云ふ美女を呼出して云ひけるは、今宵は別に外人もなく、唯獨我が心腹の武松のみ、此に在つて妨げなければ、汝速かに一曲を唱うて、我に聞かしめよ。玉蘭命を承はつて敢て辭せず。乃ち象版を執て蘇東坡が中秋水調の歌を唱ていはく、

明月幾時。有ニ把レ酒問ニ青天一。不レ知ニ天上宮闕一。今夕是何年。我欲ニ乘レ風歸去一。只恐瓊樓玉宇高處不レ勝ニ寒起一。舞ニ弄清影一何似レ在ニ人間一。高捲ニ珠簾一。低綺戸照無レ眠。不ニ應有レ恨。何事常向ニ別時圓一。人有ニ悲歡離合一。月有ニ陰晴圓缺一。此事古難レ全。但願人長久。萬里共嬋娟。

玉蘭已に唱ひ罷りて傍に座しければ、張都監又云はく、玉蘭汝宜しく盃を把て勸むべし。玉蘭命を奉り乃ち盃を執て了嬢に酒を篩せ、先づこれを張都監に献り、次に同じく一盃の酒を篩で夫人に勸め、第三の盃を武松に勸めければ、武松頭を低て盃を接、忙しく張都監夫婦に禮を述べて、遂に其酒を飲

乾て再び其盃を又玉蘭に返しぬ。此時張都監玉蘭を指さして武松に對して云ひけるは、此女頗る聰明伶俐にして善音律を知り、殊更針指は極めて高手なり。都頭もし彼を嫌はずんば、近日の内に吉日を擇んで汝に嫁せしめん。武松この言を聞いて急に頓首して云ひけるは、某何等の者なれば敢てかくのごときことを望み申さんや。願はくは相公これを饒し給へ。張都監打咲つて云く、我已に此言を出すうへは必ず汝に嫁せしめん間、汝これを辭することなかれ。我又決して約を背かじとて、再び盃を執て相勸め、酒又八九遍めぐりしかば、武松こゝに於て醉すでに發し、恐らくは禮を失ふこともあらんやとて、遂に張都監夫婦を拜謝して座を退き、頓て房間の前に至つて門を開き、尚自らおもへらく、酒食腹に滿て何とやらん睡りがたければ、宜しく棒を使うで歇むべしとて、忽ち棒を搶取て門前に躍り出で、良久しく棒を演習して天を見るに、時方に三更の左側なりしかば、もはや棒を休て一睡すべしとて、遂に房間に入つて衣服を脱んとせし處に、後堂の邊に人聲有つて、賊來れりと呼ばはること再三なり。武松是を聞いて想ひけるは、都監相公限なく我を憐み給ひて、寵愛の美女玉蘭をすら我に賜るべしとのことなるに、今後堂に賊來ると呼ばはるに、我いかんぞ馳せて賊を捕へざらんやとて棒引提て直ちに後堂の内に跳入ける處に、彼玉蘭慌しく走り出、武松に對して云ひけるは、一人の賊後園の内に入りぬるに、はやくこれを捕へ給へ。武松未だ聞きも畢らず直ちに後園の内に駈入て、四方を搜しけれども更に人影もあらざりしかば、武松又身を翻して奔り出でんとせし處に、夜色暗々として前後を見分たず、一ツの凳の有りけるに跌いて忽ち倒れけるに、左右より十四五人の下官跑來り、一齊に聲を放つて賊こゝに有りと大いに呼ばはり、遂に武松を捉へ絆めけり。此時武松急に呼ばはつて云ひけるは、我は是武松なるに汝ら誤て我を賊なりとは云ふや。諸の下官ら武松が言を耳にも聞き入れず、頓て武松を引いて後堂の前に來りけるに、燈燭煌煌として、四方を照しぬ。此時張都監は廳上に馳せ出で大いに呼ばはつて云ひけるは、其賊早く引來れと云ひければ、諸の下官ども武松を推て廳前に至る。武松呼ばはつて云く、我は是賊にあらず是武松なり。此輩誤て某を捉へり。相公速かに我を免し給へ。張都監武松を見て大きに怒り、忽ち面色を變て罵りけるは、汝武松賊配軍、我汝を擡舉て人に做んと欲、毎々愛憐を垂れ厚く賜を惠みけるに、何の不足有て賊を做しけるや。已に今宵も汝を請うて酒宴に就かしめ、我寵愛の玉蘭を以て汝に配さんと約せしは、畢竟汝を擡起官職をも授んと思ふがゆゑなり。然るに汝賊心盜肝を改めず、擅に偸みをなさんと計るは、是何の道理ぞや。汝今更毛頭も分説有るべからず。武松かいはく、某豈あへて賊をなさんや、某全く賊を捉んとて、後園の内に馳せ入りける處に、何ぞ圖らん、正中に凳あらんとは、月傾きて暗く、凳に跌き倒れければ、此們一齊に來つて遂に某を絆たり。某下肖たりといへ共、曾て賊をなしたることなし。願はくは相公明らかに察し給ひ、下官らが詞を信じ給ふことなかれ。張都監益いきまきて云く、汝いかんぞよくこれを抵賴んや。我今汝が房間の内を搜さしめんとて、則ち下官ら